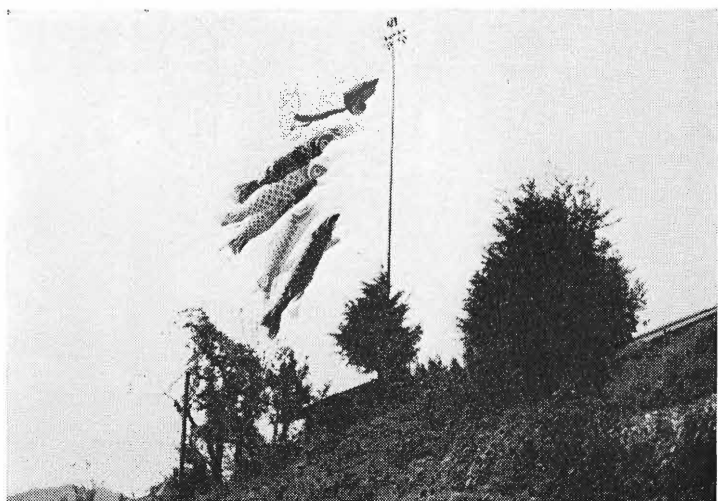


第六編
民俗・文化



ふるさとの空高くこいのぼり

第一章 衣食住のうつりかわり

衣食住は人の一生にとって、最も重要な役割りをもつものである。それが藩政時代にあつては、農民の衣食住については、すべてご法度はつとであらゆる規制を受けていた。そのころ松山藩から示されたお布令おふれい、寛文一〇（二六七〇）年によると、「百姓の衣類いらいは、布木綿おのもめんの外は着用すべからず」「百姓は、食物常々つねづねかろく雑穀ざうこくを用いるべし、米を乱みだりに費すべからず」「山林、竹木は無断むだんで乱りに伐採ばつさいするべからざること」など、またその後「絹類きぬるい、衣類は申すに及ばず、袖縁そでぐち、襦袢じゆばん、笠かさの紐ひもに至るまで、絹類、紬つと一切無用いっさいむよう、木綿であつても高価な目立しい色、模様付き等は用いてはならない」など、このようなことによつて、代官より、年々再々にわたつて、厳しく村々の庄屋へ伝達された。このような時代にあつては、あまり衣食住の進展はみられなかつた。

明治維新になつて、これらの規制は解かれたけれども、経済豊かならず、依然として農民の生活は、粗衣、粗食の苦しい生活状態が長い間続いた。明治時代の末期から、大正時代にかけて、いわゆる文明開化の波がおしよせ、洋風が取り入れられるようになって、衣食住の生活も複雑多様に変化しながら、都会から田舎へとだんだん波及してきた。明治末期、そのころの我が村では、村人を驚かす水力発電所の建設（産経通運編参照）が始まつて、村の一部では、大正六年早くも電灯がつくなどあらゆる面で村の文明開発が促進され、衣食住の生活においても大きく進展しながら、昭和初期を迎えた。昭和一六年になつて、太平洋戦争が始まり、衣類も食糧もあらゆる物資が欠乏するようになった。

昭和二〇年終戦後のどさくさ、復員、引揚げの人達によって、村の人口は増加し、食糧をはじめ諸物資の不足、食糧の強制供出、闇取引・インフレなど、衣食住の生活は、実に窮迫の時代であった。

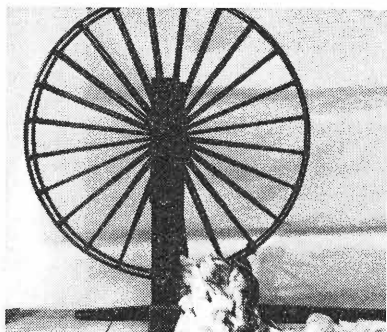
昭和二五・六年ころから、経済状態がようやく好転の兆しを見せ始め、やがて三〇年代には、高度の経済成長によって、物資が豊富に出回るようになり、所得の向上、あらゆる文明の発達によって、衣食住の生活は急激に進展した。家用自動車の普及、近代的な住宅、明るく改善された台所、風呂、電気製品がずらりと並べられ、さっぱりした衣服を着て、米の飯を食べることができるようになる。テレビでは、世界のニュースが坐っていて知ることができる。このよくな衣食住の生活、ここ、二、三〇年来の生活様式のうつりかわりは、夢の如く、まさに驚異の一大変化である。ここに、主として、明治から大正・昭和の時代へのうつりかわりを追ってみる。

第一節 衣生活

一 衣服

庶民の衣料の主流は、元禄（一六八八—一七〇三）のころから、次第に麻布から綿織物に移っていった。生活のすべての面において自給自足を原則とする時代にあつては、木綿が手に入る以前は、我が村あたりでも、麻を栽培し、これを織って衣服にしていたといわれ、その苦勞はなみたくないものではなかった。

ここで衣服を、晴着、ふだん着、仕事着に区分してみよう。



糸車・糸 (柳谷中学民俗資料室)

晴着

晴着は、ヨソイキ、イッチョウライなどといい、その中で特に冠婚葬祭の儀式に着るものを式服という。羽織袴や、女子の裾模様様の着物は、明治の後期から着はじめ、それ以前は、農家の花嫁衣装も新しい縞の着物がほとんどであって、男子もまた縞の着物ですませ、袴をはくのはまれであった。我が村あたりで、羽織袴や、裾模様様の着物が式服として普及したのは、昭和の時代に入ってからである。

戦後、昭和三〇年前後から、衣服の変化はめざましく、結婚式の服装も華美になり、男子は羽織袴かモーニングで、女子は豪華な裾模様様のうちかけ、あるいは、ウェディングドレスなど、しかしこれはほとんど貸衣装を利用してゐる。また最近では式服も、略礼服が流行し、儀式の時に着用するようになった。

晴着のうちヨソイキは、正月や祭り、あるいは、神仏参りとか、その他外出の時に着る。

明治三九年、日露戦争が終ったところから、紡績・織物の会社が県内にも各地にできて、いろいろ変った反物が市販されるようになって、衣類の様相もだんだん変ってきた。そのころから、大正時代にかけて、成人男子が着物の上に羽織り、ヨソイキなどにいつも着用したものに、アツシ(厚司)がある。

アツシは、大阪地方で産出された、厚くて丈夫な平地の木綿、または毛の織物で、ハンテン仕立にし、両側の内にカクシポケットがついているのが特色だった。

昭和初期にかけて、外とうとして、インバ、ヒキマキ(マント)が流行し、和服の上にこれをひっかけた。スフ(ステイプルファイバー)・人絹が現われるようになって、衣料品に大影響を及ぼしたが品質において絹製品には及ばな

かった。

太平洋戦争中は、衣料品は配給制になって、衣料キップがなければ何も購入できなかった。戦争たけなわとなって、男子には国民服、女子にはモンペの着用が農村に至るまで強制され、ヨソイキの着物を着ることはほとんどなくなっていた。

戦後になって、従来のスフ・人絹に加えて、ナイロン・テトロン・ビニロンなど、優れた化学合成繊維が、次々と開発され、色・柄・デザインも近代感覚を取り入れたものが、豊富になるとともに、洋服が流行し、現在日常生活における衣類は、ほとんど洋服化してしまった。

ふだん着

ふだん着は、農民の日常生活に直接かわりあいの深いものであった。ふだん着は、ヨソイキの古くなくなったものを下して着ていた。ふだん着といっても、それは多くの場合仕事着でもあった。農民の生活は、朝起きると、男女ともすぐ仕事にかかり、夜は夜なべ仕事をするというように、起きている間は働きずくめというのが原状であったからである。

ドンザが冬の防寒着として、男女を問わず着用された。ドンザとは、古いきれを重ねて、刺し子にした着物で、仕事である場合もあるが、やや長めにつくったものは、家に居るときふだん着として用いられ、夜は寝具にも適用した。ユルリのはたで、ドンザだけで、火をたきながら寝ていた時代もあったようである。

赤ゲット（毛布）が明治末期から大正初期にかけて流行した。これは、フサゲットなどとも言い外出の時肩にかけた。

子供の着物もこのころは、木綿の縞の着物で、下着などあまりなく、男子が成人すると、さらし木綿の六尺ふんどしをしめ、女子は腰巻きをした。子供が、申又まゝまた、ズロースを着けるようになったのは、我が村あたりでは、昭和五、

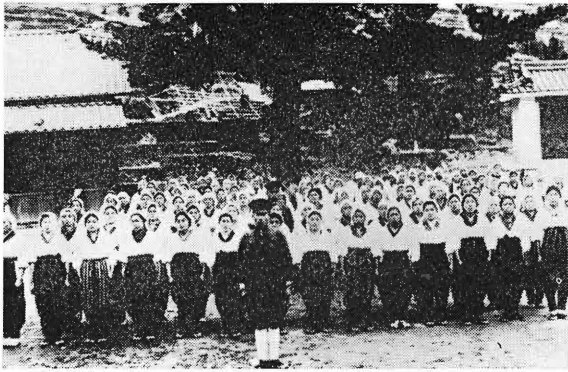
六年ころからである。このころ女の子は、冬など寒い時は、木綿ネルの柄の肩かけを、頭からスッポリかぶった。戦後の洋服化によって、男子はセーター・ジャンパー、それに女子は、スカート・スラックス、若い人にはジーンが大流行した。また近年は、体力づくりの普及によって、彩りも豊かなスポーツウェア（運動服）が運動着としてはもちろんのこと、家庭着、レジャー着として、老若男女のあいだで広く愛用されている。

パジャマは、上下に分れた寝巻きである。明治時代から大正にかけて、我が村あたりでは特に寝巻きとしたもの着ず、ふだん着のまま寝ていたようである。ユカタまたはネルなどが出回るようになっても、なおふだん着で寝る場合が多かった。今日のように、子供から大人にいたるまで、男女をとわずパジャマを寝巻きとして、着るようになるまでには長い年月を要したのである。

仕事着

仕事着は、着て働きやすいことが第一である。そのため、上半身と下半身が分かれているのが普通の形であった。男子は、ロップ（筒袖つづみそでの上衣）、マキノデともいう。ハンテン・デンチの上衣に、下衣は、イキバカマ（雪袴ゆきかま）。女子は、腰巻きにヒトエの着物の着流し、衣服のよごれや、いたみを防ぐためマエカケをつけた。

デンチは防寒用として、仕事着はもちろんふだん着にも広く用いられた。各種の仕事は手足を動かすことが主となるため、手と足のこしらえにいろいろ工夫がなされていた。足にはわらでつくったハバキや布製の脚絆あしはきをつけて、手足を保護した。頭には、手ぬぐいでねじり鉢巻はちまきや、ねえさんかぶ



モンベ姿（太平洋戦争中の中津婦人会）

り、ほほかぶりをすることが多かった。

女子のモンペは、戦後長く仕事着として用いられた。昔から仕事着は、ふだん着の古くなったものから、おろして着用していたが、近年では、作業着としたものが作られるようになって着用されている。

二 履物

下駄 昔は下駄はすべて自家製だった。下駄にはヒキツケとサンゲタがあり、ノブノキ・ハリメギなどの台

れども、ふだん履きはやはり手製のものですませた。日露戦争後（明治三十九年）次第に生活が向上してくると、下駄の材料もキリなどが用いられるようになってきた。婦人用には、表つきやぬり下駄・サシ下駄などができた。

大正時代から昭和初期にかけて、若い者の間に、白い大きな花緒のサシ下駄が流行した。また女の子のコップリなども現われた。太平洋戦争後は、着物の洋服化によって、だんだん下駄も用いられることが少なくなって姿を消しつつある。

草履・草鞋 昔から草履といえは、主として自家でわらを打って作られたわら草履である。ちり草履ともいう。

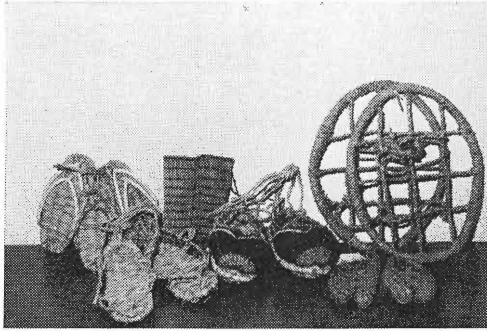
どこの農家の庭にも、わら打石があつて、わら打ちづちがかまえられていた。夕方になると、わらを打つ音があちこちに聞かれ、草履づくりは、ほとんど夜なべ仕事であった。時には竹の皮を拾って、竹皮草履を作った。竹皮草履は上等の部類である。現在のスリッパができるまでは、学校の上履きもみな竹皮草履だった。ちり草履の花緒の部分には、古い布をひきさいて交えてないつけた。女の子のものには、赤い布なども使つてきれいなものにした。花緒をとんぼ結びにしたのが、とんぼ草履で、足のかかとまで届かぬ短かい草履を足半草履といつて、畑仕事

はほとんどそれを履いた。

麻裏草履（フジクラ）、セッタといわれる、上等の草履が売られるようになり、また大正時代になって、ヤッオレ草履、続いてゴム裏草履が流行した。太平洋戦争後は、革の台にレザーの花緒を付けた草履、総ゴムの草履が出回るようになって、わら草履は姿を消した。

草鞋は、昔から戦場はもちろんのこと、飛脚から旅人、郵便の配達から配達、かごかきなど、あらゆる仕事に広く履かれたものである。草鞋も、すべて草履と同じように手づくりであった。

牛馬に履かせたくつも、草鞋の一種である。この草鞋やわら草履に代って、労働用の履物として、大正末期から、



わらぞうり・わらじ・はばき・わらぐつ・雪輪

地下足袋が出回り、農山村の山仕事から、工場労働に至るまで使用され、欠くことのできないものとなった。そのころから、草鞋は姿を消すようになった。

足袋 足袋は、木綿の流行によって、一般的に普及した履物である。初

めは布だけ買ってきて、紐付きの手製であったが、明治の末期ころ、コハセ付きに改良された。ふだんには、男子は黒か紺の無地、女子は白や色物を用いたが、婚礼や葬儀などの儀式には、男女とも白足袋を用いた。

靴沓 靴は昔から履物の総称で、わら沓・革靴のように足の甲をおおう

ものも、草履・草鞋のように足の裏だけを保護するものも、ともに靴と呼んだ。わら沓は、大雪があつて冬の間仕事ができなく、猟に出ることが多かったので、雪やけ、凍傷を防ぐため考えられたもので、わらでつくった沓である。

革靴

革靴は明治時代になって、欧米諸国から日本に入ってきたものであり、明治一四、五年ころから一般官吏・巡査・学校教員などが履くようになった。明治末期には、デパートの店頭に姿を見せるようになったといわれるけれども、およそ、我が村あたりでは縁遠いものであった。

ゴム靴

ゴム靴は、大正一〇年ころから出回り、初めは短靴だったがその後、長靴も現われて、積雪の多い当地方では、小学校の児童はもちろん、大人に至るまで広く使用された。しかし素足へ履くので靴ずれになやまされたようである。そのゴム靴も、太平洋戦争中は、ゴムの原料が輸入できなくなつて、一時姿を消してしまい、履物に苦勞したが、戦後は、また大量に出回るようになって、いろいろ改良され、ゴム底に、上は布製のズック靴の発達はめざましいものがある。幼児用から小中学校・高校に至るまで通学靴となり、運動靴は、革・ズックともにますます改良されて、運動の種類により、それぞれ使用されるようになってきた。

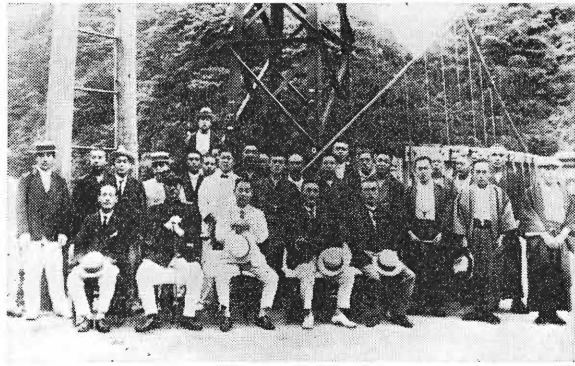
三 被りもの

手拭い

仕事着としての被りものに手拭いが多く用いられた。テノゴイとも呼んでいた。日を除け汗を吸う便利さで、男子はほほかむり、鉢巻き、女子はねえさん被りで頭や顔を保護した。

帽子

帽子は、明治の時代になって西洋から入ってきたもので、我が国では昔から、さまざまな頭布が被られていた。明治二七・八年ころから、昭和の時代にかけて一般的に流行したものに、中折帽子と烏打帽子という。大正から昭和初期にかけて、夏、男子のカンカン帽が流行したが、キョウギ帽などが出回ってから姿を消した。太平洋戦争中は、戦闘帽・ヘルメットが用いられた。また防空用として綿の入った防空頭布を、おとなも、



帽子を持つ人、かぶった人（カンカン帽・中折帽）

昭和2・3年ころ、県知事視
察あり、落出つり橋のたもと

こどももみんな被った。この頭布は、江戸時代に武士が被っていた、山岡頭布といわれる頭布の名残りをとどめていたという。戦後は、しばらく防寒用として愛用されていたが、皮やビニール製の防寒帽が出るようになってから姿を消した。長髪化の時代となって、ふだんはほとんど無帽の場合が多いが、作業用としては男女共にキョウギ帽・登山帽・野球帽類の帽子が多く用いられてきたが、最近では、労働の安全、交通の安全上、ほとんどヘルメットを被るようになってきた。学生は黒の学生帽、園児や児童は、交通安全のため、黄色の野球帽をかぶるようになった。

四 風呂敷・袋物・雨具

風呂敷

風呂敷は、昔から使われた日本独得のものである。初めは平包と称されていたが寛保年間（一七四一—四四）のこ

ろから風呂敷と呼ばれるようになったという。ふとん風呂敷のような大風呂敷からはじまって、大小さまざま、柄もいろいろでその用途は広い。働く時の被りもの用に用いていたところもあるようである。

特に明治時代から、大正、昭和の初期へかけては、学校に行く時の教科書も弁当もすべて風呂敷包みであった。教科書の風呂敷包を右肩から背負い、裁縫箱の包みを左肩から背負った女の子、腰に弁当の包みを巻きつけた男の子、この時代における小学生の通学風景であった。利用範囲の広い風呂敷だけに、慶弔をはじめとする記念品・贈りもの

に近年までほとんど風呂敷が用いられていた。

袋物

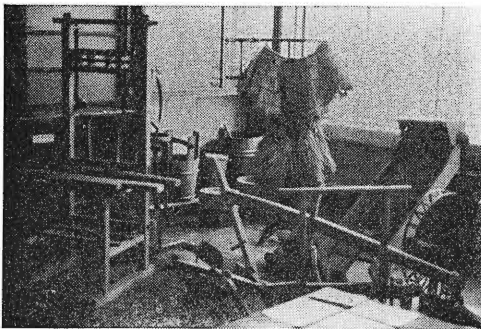
信文袋しんげんくわうが、明治の中期から大流行した。信文袋は、底板を付けた手提袋で、底板は袋の表と同一の生地でおおい、口まわりに、くくりひもをつけて結んだものである。現在の旅行用バッグ類の役目を果たしたものである。昭和の初めから、サラリーマンの間で流行した手提鞆は、戦後になって全国的に大流行し、昭和三〇年ころからは、学生・生徒の通学用鞆ともなった。また、小学生のランドセル・登山用のナップサックも大流行した。これらの袋物や鞆類はめまぐるしく変化している。

雨具

昔から仕事用の雨具は、蓑みの・菅笠すげがさであった。自生する菅を夏の間に取り干して乾燥し、これを材料として手編みした。蓑には大蓑と背蓑があり、背蓑は、女子が夏の日除けとして使用した。我が村では特に猪伏で作られた蓑が材料の菅もよく、また編み方が、京都の奥地方のものと共通したもので、丈夫さと着ごこちの良さで人氣がありおそくまで作られていた。

昭和三〇年ころから、ゴム・ナイロン・ビニール製品などの雨具が出回り、昔からの蓑笠は全く姿を消し、今では民芸品として残されるのみとなった。

傘が一般に用いられるようになったのは、江戸時代に入ってからといわれている。番傘や蛇の目傘は、明治時代になってから多く出回った。昭和の初めにかけて、文字の入った番傘が流行した。戦後昭和三〇年代になって洋傘が流行し、男子用、女子用、色とりどりのカラフルなものが現われて、番傘や蛇の目傘は、一般用にはほとんど用いられなくなった。大きな文字の入った番傘が、



農具類 (柳谷中学民俗資料室)

ずらりと掛けられていたのが、昔の学校の貸出し用であった。

第二節 食生活

一 食物

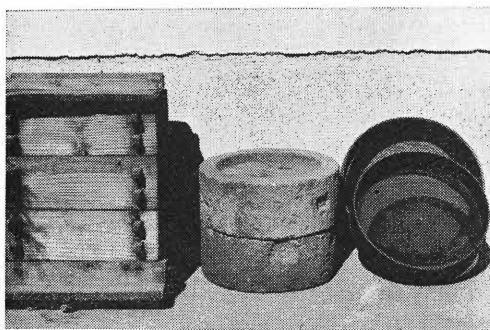
食制

食えることは、生命を維持するため、人々にとって最も基本的であつて重要なことである。食事の回数
は現在では朝昼晩の三食に固定されているが、ずっと昔は二食で朝夕だけだつた。それに昼の間食が加
つて三回となつた。しかし、労働のはげしい我が村あたりでは、農家は四食制だつた。朝と晩、昼の食事を、オチャ
と呼び、午前一〇時ころに、ヒダケチャ、午後二時ころにニバンチャ、食事をすることを、オチャヲノムといつた。
ヒダケチャのことを、イキツキチャと呼んだりして、朝山へ行きつくとすぐオチャヲノンデ仕事を始めた。また夜な
べ仕事をすると時は夜食をした。

主食

一般の食生活が米食中心になつたのは、そう遠い昔のことではなく、太平洋戦争の混乱がようやく治ま
り、経済成長をみせてきたころ、我が村あたりでは、昭和三〇年代も後半からである。米は貴重品であ
つて、特に田の少ない我が村、昔から米の飯を食べるのは、正月・盆・祭など、なにかごとのあるときだけで、年
数えるほどしかなかつた。米に対する人々の執念、病人に米がゆを食わすこともできないままに、死期が近づいた病
人の耳元に、ふり米といつて、竹の筒に入れた一握りの米を打ち振つて、米の音だけでも聞かせてやる、こんなあわ
れな時代もあつたという。我が村の主食はほとんどトウキビでこれを常食とした。昔から村人は、広い焼畑を利用し

てトウキビを作った。トウキビは、天正七（一五七九）年ころから我が国で栽培されるようになったといわれており、実に四〇〇年余りにもなる。この間我が村人の命の糧かたとなった。稔りの秋、トウキビの取入れは、くる日もくる日も夜なべでトウキビはぎが続いた。これをせがって（積み重ねて束にする）イナキ（稲架）に架けた。どこの農家にも黄色のトウキビ稲架いなぎが長く並んで見事であった。多い農家では二〇〇せがい（約二〇石）くらい架けたという。しかしながら、トウキビほど、背が高いため風に弱い作物は無く、台風シーズンが花ざかり、一夜のあらしで収穫皆無となり、ただぼう然となることは珍らしいことではなかった。それでも農家は自然との取引きで、くり返しくり返し、トウキビ作りに取りくんできた。常食としてこれに代る作物がなかったのである。



せいろ・ひきうす・けんど（ふるい）

（柳谷中学民俗資料室）

トウキビをイナキから下して、カラサヲでたたき粒にする。これを細かく石臼いしうすでひき割る。ひき割ったものを、フルイにかけて選別する。メカワが除かれ、粉が除かれて飯にたく部分が残る。これをヒキワリといい、粉をハナゴといった。平常はほとんどがヒキワリの素飯で、米を少しなべのすみに入れた部分を弁当などに入れたりもした。

ハナゴは、ぞうすいにしたり、ハナゴ団子をつくった。秋の初めのヤキトウキビは味もまた格別でよく食べた。

トウキビの小粒の種類をよく乾燥して大金で煎ると、よくはじいて真白い花のようになる。これをイリハナと呼んだ。イリハナを石臼でひいてこの粉をコンコ（ハッタイ粉）といい、コンコは飯を補うために食べ、農家ではこれを欠かせないものとしてよくひいた。冬の間、粉ひき唄などを唄いな

ら一年中の分をひいて、しめらぬよう、ハンド(ツボ)に詰めて保存し、年中食べた。コンコメンツ(竹をまげて作った入物)に入れてコバシ(竹で作ったサジ)ではねて口へ入れる。コンコを食べることをはねるといった。コンコは、子供のオヤツがわりにもなった。

遊びつかれてクジラクル子供、母親は仕事の手を休めることなく、子守りをしている三つ違いくらいの子へ、「コンコでも食わせておけや」といった。コンコを上手にはねることのできない子供、半分くらいはコンコメンツからふりまいてしまう。なみだ、はな、どろまみれの顔、コンコだらけの着物、焼畑の一角に見る、コンコメンツを抱えた無心な子供の姿、このような時代はながかった。「わしらはコンコを食うて太ったのよ」と昔からよく聞かされたことばである。

麦飯は、昔は丸麦だったのでたけにくかったが、大正の初めころからシヤゲ麦が出回るようになり、また農家も裸麦を作ってシヤゲ麦にして食べるようになった。

粟あわや稗ひびもよく食べた。特に稗は西谷方面でよく作られ、トウキビとともに主食にしていた時代もあった。これらを精白するのには、各農家に足踏みのヤグラがかまえられていた。谷の水を利用してつくソオズもできた。

大正の初めころから水車ができて楽になった。水車は小組単位くらいに作られるようになっていた。水車廻りにはそれぞれ順番に名前を書いた番帳を使用していた。

餅のことを昔からバツポと呼んでいた。正月・節句・祭・誕生・普請・仏事など農家では良きにつけ悪しきにつけよく餅をついた。誕生祝いの力餅とか歯固めの餅、餅は人の生命に力を与える食物とされていたのである。

旧正月、農家ではイイをして餅つきをした。米の餅はほんの少し、あん餅も少なく、すや餅がほとんどである。

ヒキワリ・粟・コキビ・タカキビ・ハナゴ餅などである。多くつく農家では二石五斗くらいついたという。これを

寒の水につけて、夏ごろまで毎日食べた。

激しい労働をするためには、味よりも何よりも、こうした腹ごしらえが必要だった。

夏になると主として、小麦粉を使って、ミョウガの葉に包んだヨモギ餅、大きな平釜での煎餅など、その味はおふくろの味として、いまなお、ふるさと祭りなどで人気を呼んでいる。

そばをよく作り、そば粉にして自家製でそばを打ち、また熱湯をかけてそばねりなどもした。

副食物

副食物はオサイと呼び、味噌・シヨウユノミ・ナツバ・大根の漬物・梅干し・味噌汁・野菜の煮物などで、魚はふだんいりこを使うのはぜいたくなほう、正月・盆・祭りなどの塩サバ・イワシ・イタズケ・チクワなどが最高のご馳走で、牛肉やブエンといわれた鮮魚など、ほとんど食べることはなかった。野菜は、ダイコン・ニンジン・イモ・タカナ・ネギ・ゴボウ・ウリ・カボチャ・ナスビなどで、ワラビ・センマイ・フキなど山菜類をよく取って保存した。大根の切干しや干し葉をたくさん作って保存し、冬期の野菜がわりとした。ハナゴ雑炊にはたいていヒバ（干蕨）が入っていた。パレイシヨは、コウボウイモと呼び主食のように常食した。豆腐やコンニャクは自家製で最上のごちそうであり、正月・盆・祭り・またなんぞごとのあるときは必ずつくった。大きくてニガリの効いた豆腐、なわでくくって持ってもよいくらいだなどといわれた。この豆腐を焼いて塩漬や、梅酢にたくさん漬けて保存食とした。

食物も、昭和二〇年、太平洋戦争前後は食糧事情が悪くなって、我が村でも雑穀、いも類に至るまで強制供出となり、食糧も塩もしょうゆも配給制となった。トウキビ飯さえ充分に食えず、さつまいもの切干しを入れたカンコロ飯、食うや食わずの生活が続いた。昭和三〇年代になって、高度の経済成長に伴い、米も麦も主要食糧が豊富になり、肉・魚・果物・あらゆる食料品が嗜好品にいたるまで、村内の店頭はもちろん、交通の便がよくなるにつれて、

移動スーパー的な行商が、どんどん各家庭の庭先まで入ってくるようになって、田舎の村でも何不自由なく求められるようになった。

二 炊事施設

台所

昔の農家は、家の中に入るとヌワと呼ぶ土間があり、その奥にシツと呼ぶ台所があった。このシツには、大小のクド(カマド)があり、その近くに流しを設けて横に水ガメをすえ付け、食器や炊事用具を置く棚や戸棚を取付けた。水ガメの水は、家の外のフネガワと呼ぶ木や竹の掛樋かけとじから受けた水ダメの桶から汲み取られた。昭和に入ってから、水タンクがセメントで作られるようになった。煮たきは、特別の場合を除き主として、茶の間のユルリ(イロリ)が使われユルリも台所の一部をなした。ユルリにはジザイがかかっていた。ジザイは、天井からなわをつり下げ、竹筒に梅の木で作ったかぎを通し、それになべ・はがま・どびんなどをかけて火をたき煮物などをした。大正年間になって、このジザイカギも鉄製のものができた。

タキモン(薪)

燃料はタキモン(薪)と呼んだ。昔から大雪の降る我が村では、暖房用と併せてタキモンを多量に必要とした。年間三坪も四坪もたぐのが普通だった。農家ではタキモンを主食と同じように大切に扱いキハンマイ(木飯米)とも呼んだ。タキモン作りは、農家にとつては大仕事の一つであった。秋の初めころから山を切り、木こりをして、遠い山からの運搬・家族中が冬に向って毎日木かるい(背負う)や木馬きんまに積んでひっぱった。どこの農家の軒下にも木グロが高く積まれた。戦後昭和三〇年代になって、石油コンロの出現、ユルリを堀ゴタツ化することになって、茶の間のほこりも煙もなくなった。木炭が使用されるようになってタキモンの必要がなくなった。

昭和四〇年代になって、プロパンガスが売り出され、その便利さは食生活における炊事を容易ならしめた。

三 調理・炊事用具・食器

鍋・釜

主食をたくのは、鉄の鑄物の羽釜・またツルカケ鍋があった。農家では、ユルリで煮炊するため、飯を炊くのも、主にツルカケ鍋を使用した。ツルカケ鍋は大小いろいろあり、大きいものをハマイヅルと呼んでいた。これを使う多人数の農家が昔は多かったのである。小さい鍋は、煮物・汁物を炊くのに使用した。羽釜は、昭和の初めころからアルミ製になり、戦後はアルマイトとなり、電気釜・ガス釜などの出現によって、あまり使

われることがなくなった。

茶沸し

昔は、土ビンといって、明治の終りごろ

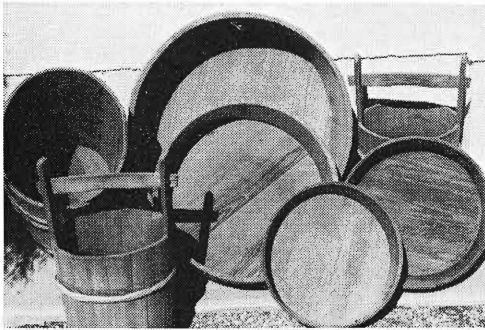
までは主として土製のものを使っていた。大正時代になって、ホウロウビキ・鉄の鑄物製、昭和になってアルミ製などが出るようになった。

汁杓子

杓子は木製の汁杓子がおそくまで使われていた。その後アルミ製のものが



炊事道具 (羽釜・木製汁杓子・トックリ・ユキヒラ・茶碗・メンツ)
(柳谷中学民俗資料室)



桶類 (桶・サゲ・ハンゴ)
(柳谷中学民俗資料室)

出回った。木製の汁杓子は、クリの木などで作られた大きいもので、昔はよく行われていた縁日などのくじ引きで、タワシなどとともに景品などに使われたものである。

桶類

昔は木製の桶類が多くて、水桶をはじめ、味噌・醤油を作る桶・手提桶き・手桶・ハンボ・飯ビツなど、大小さまざまな桶が用いられていた。桶は、モミ・マツ・スギなどの材質の良いものを選んで、竹の輪でしめて作った。これらの桶の輪替えは、「たる屋さん」と呼ばれる職人が何人かいて、年に一回は必ず農家を一軒回って輪替えをした。古い輪をたる屋さんにはずしてもらって、子供達は輪ご回しをして遊んだものである。

カゴ類

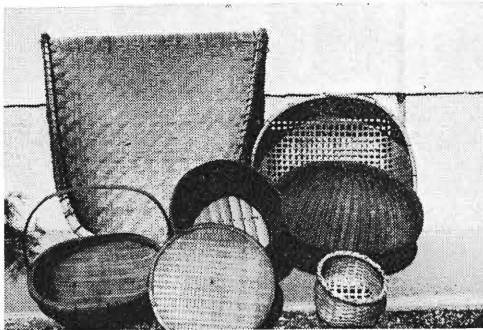
カゴ類は日常仕事に使用されるものを含めてたくさんあり、シタミや小さいザル類をはじめ、オйкаゴ・タナカゴ・トリカゴ・イモホリカゴ・茶摘チャツミカゴからミにいたるまでさまざまだった。普通のカゴはそれぞれ自家製であったが、シタミ類やミなどは売りに来るのを買っていた。

食器

茶碗は、明治の初めころから、カラツモノを使うようになったが、汁碗は木製のものやはり使っていた。箸は竹の自家製で、タカキビの煮出し汁で染めて使った。

箱膳

食器をのせたり、しまったりするのに、江戸末期のころから箱膳が広く使われた。箱膳は家族めいめいにかまえていて、その中には、箸・茶碗・汁碗・テシオザラ（小ザラ）を入れ、食事の時には自分の前に置き、ふたをひっくりかえして、それに食器を出してのせめいめいの飯台とした。食事が終ると、その都度食器を洗うことはなく箱膳に入れて、



み・したみ・あわげ・かご
(柳谷中学民俗資料室)

戸棚へみんなのをしまった。あまり衛生的ではないが便利であった。この箱膳は、農家では、ユルリが使われなくなつて、そこへ飯台がおかれるようになったころまで用いられた。

シタミ

飯ビツはあつたけれども、夏は飯がスエル（クサル）のを防ぐため、シタミに入れてサナ（竹で編んだ小さなすだれ）をかけて涼しい軒下などに吊した。シタミはツルがついているので大変便利であり、いろいろなものを入れて、家の中にも吊されていた。

弁当入れ

昔は弁当はにぎり飯にして竹の皮に包んでいた。藩政時代の終りころから、メンツが用いられた。メンツは、大きな竹の表皮を除き、内身をけずつて、火や湯であたため、一枚の板のように伸ばし、さらにそれをあたためて、小判型に丸め、板で底を入れ、かぶせるようにふたを作り、必要によってはふたにも入れることができるように作つた。小さいメンツを菜メンツと呼んだ。またこのころから、ヤナギコオリの弁当入れも使われるようになった。軽くて飯がスエにくいので、よそいきなどによく使われた。弁当ゴリと呼ばれていた。

第三節 住生活

一 住居

屋敷取り

村に住みついた人たちは、住居を構えるについて、先ず水、働き場、安全を考えて屋敷取りをしている。古い家は、どこの家も、谷川の湧水が利用できる場所を選んでいる。家の庭をカドと呼び、カドのまわりにはカザガキなどの木が植えられているところがある。我が村では平地が少ないため、屋敷が細長くて奥行きが

浅く、随って平屋が多い。藩政時代は、掘立小屋が多く、土間の上に直接板を敷きその上にわらやむしろを敷いて生活していたようである。明治の時代になって、農家でも、石口や土台を使った家が木工によって建築されるようになった。

ドウツキ

家を建築する場合まず地鎮祭を行い、次に地搦ぎを行う。これをドウツキと呼んでいる。ドウツキは、柱や、土台の下へ入れる石口の箇所を搦いで固めるのである。ドウツキの方法はいろいろだが、やぐらを組むもの、松の木の丸太の大きい部分を短く切って、これにたくさんの引き綱をつけて、多勢が輪になってひっぱり上げながら搦くこんな方法もあった。二番茶には、ドウツキ祝いの酒もでて、にぎやかにドウツキ歌に

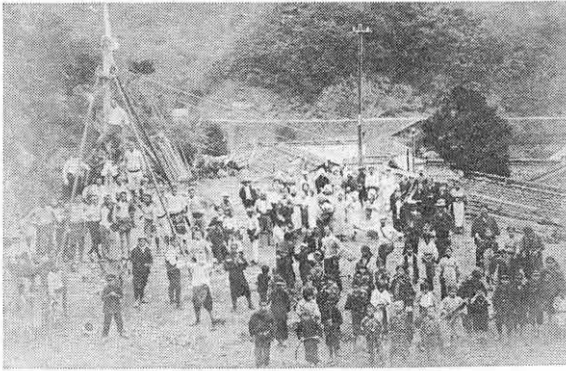
合わせて威勢よく地固めをした。こんな風景も、昭和の初めころまでで、家の基礎がコンクリートになってからあまり見ることができなくなった。

チヨウナハジメ

大工仕事を始めるのを、チヨウナハジメ(手斧始め)とって、家が木工とともに祝った。

棟上祝い

家建てを建前という。建前の日は、柱の組立てを完了して、棟桁をかけ、棟上祭りをを行う。幣を切り、お神酒などの供物をして神を祭る。ささのついた長い竹を立て、長い布、カモジ、髪道具、センスなど、また松、桧などで作った弓矢を北の方角に向けてつける。棟梁が、さしがね・すみつぼ・尺杖つえを供えて神を拝む。次に餅まきをする。すみ餅といって家の四すみにまいた。また銭を一緒にまくこともあった。



胴づき風景(昭和4年ころ、落出公会堂敷地、現在役場の位置)



茅屋根の風景（菅行）

その後、多勢の手伝いの人たちで祝宴が行われた。家が完成すると、家移りをして新築祝いをする。家固めの祝いとも言われた。

我が村における住家も、明治の時代に建てられたものは、次第に建てかえられ、またたびたび改築されて、昔のままの黒くすすけた古い家は、あまり見ることができなくなった。

一一 家の屋根

茅^{かや}ぶき屋根

昔の家は全部茅ぶきだった。茅ぶきの屋根は、夏は涼しく冬は暖かである。ユルリで火をたくので、三〇年くらいはもつといわれる。ただし、その間に棟の部分の押えの竹がくさるので、七、八年で棟はふきかえをしなければならなかった。屋根のふき替えは、各部落に共同の茅^{かや}場^ばがあって、屋根講やこころくによって行われていた（第三章講参照）。

瓦屋根

明治の中期から、瓦が出現したけれども、交通の不便な我が村あたりでは、明治末期になっても、瓦屋根は数軒こそなかったという。昭和初期になって、杉皮ぶ

きが多くなり、それが次第にトタンぶきへと変わって行った。そのころから、杉・松の植林がすすめられて茅も次第に少なくなり、また火災に対する用心のためにも、人々は瓦屋根を望んだけれども、経済的になかなか容易なものではなかった。そのころから、瓦講がぼつぼつ生れたようである。戦後においては、新築はもちろん、茅屋根も小屋下げされて、日本瓦や、各種スレートなどにふき替えられた。現在では、村でも茅屋根はほとんど見られず、茅屋根を鉄板で包んだ家が数えるほどあるだけになった。

三 家材料

住宅は木造で発達してきた。骨組は、柱と梁で組み固め、壁は板から後には竹を骨とする土壁に発達した。柱は主として、クリ・ツガ・マツ、後にはスギ・ヒノキが使われるようになった。家には、クリなどで大きい大黒柱を必ず入れた。またマツの大木で梁はりを入れ、風雪に耐えるがんじょうなものとし、これをウシ(梁)と呼んだ。家普請ふしんは、隣近所や親類によるコウロクで、材木取りから始まるのであるが、運搬の道具もなく、人力のみに頼ったこの時代、遠方山から、ひっぱり出して来るウシ(梁)は、家に到着するまでには相当たくさんひきの酒を飲んだという。柱は一本一本ハツリ(斧)ではつり、製材のない時代、板は一枚一枚木挽ひきによって挽かれていた。このころでは、なかなか造作までも出来上らない家が多かったようである。昭和一〇年代になって、発動機による移動製材が現われて、普請をする場合は、建築材一切を集めて製材するようになった。このころから、セメントも使われ、また壁も白壁が見られるようになった。太平洋戦争の前後は、釘をはじめとした建築材が不足していたが、戦後次第に物資が豊富になって、建築様式も急速に変り発達した。

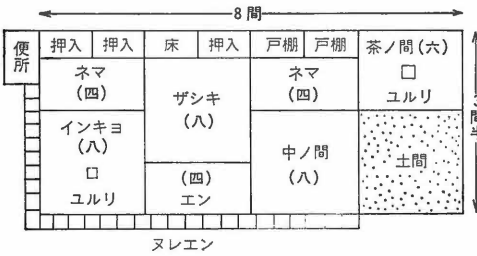
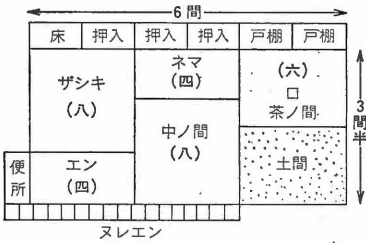
昭和四〇年代になって、外材が多く使われるようになり、新建材がどんどん生産されて、木材の多い我が村あたり

まで入って来るようになった。我が村における建築様式も、鉄筋コンクリート造り・鉄骨造りなども多くなって、建築用材は木材だと思っていた時代はいつの間にか過ぎようとしている。

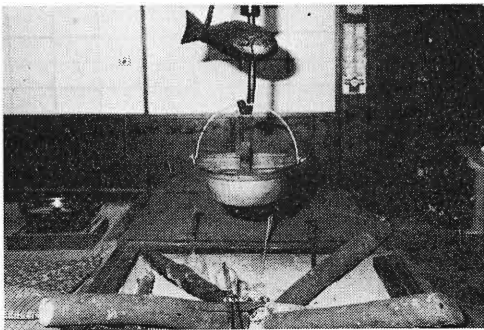
四 家の間取り

農家の間取りが形造られたのは、近世になってのことである。家の間仕切りがない時代、中世の寝殿造りにおける几帳、広い部屋の一部に布(張)で囲んだ一区画を作って、プライバシーを保ったのであるが、農家では、寝間などにむしろや、板を利用したようである。間仕切りが板戸・障子・フスマと移動するように工夫され、婚礼や葬式など

第1図 農家平面図



(註) 数字は畳数を表す。



いろり・じざい・つるかけなべ

人が多く集るときは、大きな室として使用できるよう考えた。

我が村で、明治時代に建てられた家の間取りが多かったと思われる様式を図示してみる。一列並び型と称される型がほとんどであり、それに隠居を一緒にとったものも多かった。隠居が一棟にとられているものは特に西谷方面に多く、これは豪雪による寒気のきびしさに対する生活の知恵だともいわれている。

家の前には、ヒノリワと呼ばれる広場を物干しなどに使うために設けた。ヌワと呼ばれる土間が広いのは、ヌワに大釜が備え付けられて、コウゾ・ミツマタの皮はぎ・トウキビはぎなど、作業場として使用するためであった。

ヌワぞいに茶の間・寝間・中の間・座敷・エンがとられて、寝間には夫婦が、中の間には子供たちが、座敷は来客の場合使うようになっていて、タタミは盆や正月、なにかことのある時だけ敷き、ふだんは板の間にしてタタミはそこへ積んでいた。その時代、タタミは敷付でなく備品であり道具として取扱っていたようである。

隠居部屋にはとしよりが住み、世帯はおおむね別にしていた。茶の間にはユルリ（イロリ）が作られていた。ユルリは、三尺角、または、三尺三寸角の正方形に作られ、タタミ半枚敷きの大きさだった。ユルリで煮たきし、それを囲んで食事をし、暖房をとるなど、一家だんらんの場合であり、日常生活に欠かせない存在であった。ユルリの周囲の座は、サキザ・テツザ・オクザ・シモザなどと呼ばれ、主人はサキザ、主婦はテツザ、客はオクザときまっていた。テツザは台所に近い方をとった。ユルリは火をたくと煙が充満するので、ユルリの真上の天井が空いており、屋根の両側にはハフと呼ばれる煙抜きが見られた。

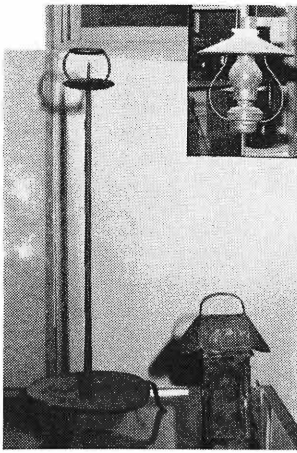
隠居部屋が一緒にとられていない場合は、近くに隠居屋が建てられた。納屋・駄屋なども近くに建てられていた。家の間取りも、戦後においては大きく変り、昔の来客中心から、家族中心に考えられるようになった。明るい南向きに居間をとり、中廊下などをとって、個室に仕切り、洋間などもとり入れられるようになった。

五 家の中の設備

燈 火

燈火は、古くはあかし（照明）といい、ユルリの火が屋内の燈火であると同時に、コエマツの根の脂の多い部分を割って、石や鉄製の燈台をユルリの片隅に置き、その上で燃してあかしとした時代、また江戸時代中期から、ナタネ油を使って油皿に灯芯とうしんをさしともした。そのころ紙やローソクの普及によって、アンドンやチョウチンが生れ、江戸時代末期になっては、石油を燃料としたトクヨ・カンテラ・ガンドオ・そして明治五年前から、国産のランプが販売されるようになって、従前の燈火よりはるかに明るく、夜間の照明用具は一変した。

石油ランプは、小さい豆ランプ・普通のつり下げるランプがあり、シンの大きさで、三分・五分・八分と分れていて、ふだんは、三分や五分を使い、特別の時に大きい八分のランプをともした。毎晩ともす前には、ランプのホヤのフスボリを磨かなければならず、子供の仕事の一つであった。なにかごとのある時、座敷には八分のランプを二こも三こもぶらさげた。それを頭でかざかないよう長い紙ぎれをぶらさげていた。

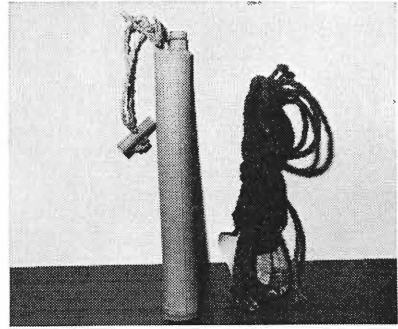


照明用具(燭台・カンテラ)
(柳谷中学民俗資料室)

風 呂

昔の風呂は、ごえもん風呂が多く、たきもんは薪たきぎだった。農家では風呂を沸わかす回数が少なく、たらいで、行水ぎょうずいをし、これを、「湯を使う」といっていた。昭和の初めころまでは、風呂のない農家が多く、隣近所のある家でもらい風呂をするのだった。風呂はつくりたくてもその余裕がない時代だった。

風呂はたいい便所のそばにあって、風呂の廃水は便所の大き



作業用具（おいなわ・竹の水筒）

は、山間部では不要だという考え方もいつの間にか変って、うちわから、扇風機、そして一般家庭でもエアコンが普及するようになってきた。

なたまりへ流しこんでいた。たまりの下肥は、常に作物の肥料として使用されていたものである。

戦後になっては、山村でも文化風呂が普及し、燃料も重油や灯油、プロパンガスを使用するもの、また電気温水器・太陽熱利用の温水器まで普及している。

暖 冷 房

暖房設備は、昔はユルリばかりだった。それから掘ごたつに変わり、ストーブが現われた。ストーブは、薪ストーブ・石炭ストーブだった。昭和四〇年前後から、石油ストーブが現われ、急激に各家庭に普及した。現在では、暖房器具も次々とあらゆる新製品が回っている。冷房設備

第二章 通過儀礼

第一節 産 育

帯 祝 い 妊娠して五か月目の最初の戌の日、ウヅ神の加護を祈って腹帯をしめてお祝いをする。これを帯祝い・帯とり・岩田帯などという。これは腹部が冷えないため、あるいは、お腹の子が大きくなりすぎないためである。腹帯をしめないとお産がきついという俗信もここから生れている。犬はお産がかかるいとか、犬は産後すぐ走り回るといふことにあやかり、戌の日が選ばれた。腹帯は、白いさらしの布で、長さは六尺から一丈程度である。とくに誰に巻いてもらうとか、また帯はいつごろ、だれから贈られるものだったといった、慣習はなかったようである。

帯祝いは、生児の生存権の最初の承認であり、貧しさから間引きといつて、だ胎の多かった江戸時代であっても、帯祝いのすんだ子は、必ず育てなければならぬものとされていた。

出 産 お産は、姑や近所でお産の巧者な人によって取り上げてもらっていた。お産の軽い人は、ひとりりで分娩をすませたりもしたという。我が村では、昭和一六・七年ころから、産婆があつたけれども、交通は不便であつて、なかなかみてもらうようにならず、ほとんど利用できなかった。産院などへ入院して分娩するようになったのは近年からのことである。

お産の方法は、昔はみな坐産だったが、産婆にかかり、また入院してするようになってから、寝てするようになった。

た。お産はほとんど自分の家でした。子供が生れる寸前まで、山や畑の仕事に出なくてはいけなかったもので、実家に帰って産むことは少なかった。分娩の場所は、たいてい寝間で、部屋たたみを上げて、むしろやこもの上に油紙を敷いて、その上で分娩した。分娩の時には、姑が付添っている程度で、夫はほとんど関与しなかった。初めての子の出産時に、たまたま夫が家にいたら、次の子からも、夫がいないと生れないものだななどと言われた。やはりお産は女の大役だといわれていただけに、夫の関与をほんとうは望んでいたものと思われる。

出産の時に降りてきて、出産を見守ってくれるとされている神を、ウブ神と呼んでいる。子供が生れると、すぐご飯をたいて、ウブ神に供えお礼をいう。

へその緒は、生れるとすぐ母親の体からハサミで切り離し、オ（麻）でしばっておく。生後一週間で生児の体から離れたへその緒は、そのままとっておいたり、墓に埋めたりするところもある。後産は、胎内での生児の毒が集っているなどともいった。その処理方法はさまざまで、墓の一隅や産室の床の下、あるいは、屋敷口の下に埋めるのが多かったようである。生児には、二、三日間、母乳の出るまでの間は、フキの根とヨモギの根に甘草かんそうを合せて煮つめ、その煮干を、綿を丸めて絹をかぶせ、乳頭の形にしたもので吸わせた。これをゴウと呼び、これを吸わせることによって、生児の体内の毒を下させる毒ザラエであるといっていた。毒ザラエをすると、一生その児には、できものができないとか、腹が悪くならないとかいっていた。

第二節 養 育

名付け

名付けは、七日目のお七夜にするところと、三日目から七日までの間、また三日・五日・七日目などのうち、いずれかの日を選んでするなど、さまざまである。名付けの方法では、数枚の紙に、それぞれ付けたと思う名前を書いて、その紙を小さく丸めておぼんの上にのせる。それを神前に供えて、おぼんを振って最初落ちたのを拾って付けるなどしていたところもある。そうして名付け祝いをする。

名付け親

名付け親は、一般に拾い親といわれることを意味している。子供がよく育たない家の子、父母の厄年に生れた子、虚弱な子や年回りの悪い子などは、一度捨てる意味で道まで連れて行き、最初に出会った人とか、またあらかじめ頼んでおいた人に抱いてもらって、その人が親としてその子の名を付けたり、付けかえたりしてもらふ。このことを「取り上げてもらう」といい、仮親になってもらったこの人のことを「名付け親」「とり上げ親」などと呼んで、盆や暮れにはお礼の挨拶をしていた。

宮参り

晴衣として、赤ん坊に一つ身の着物を縫ってやり、生後三三日月に初めて氏神様にお参りさせる。生れたことを氏神に告げ、すこやかな成長を祈念する。宮参りへは、嫁の母親などが、忌の晴れた産婦と一緒に行くことが多かった。

食べぞめ

生後百日間の無事な成長を喜び、将来の健康を願って、赤ん坊のため茶碗ちやわんと箸はしを揃える。箸揃えともいった。赤ん坊にご飯を一粒でも食べさせるとよいとしていた。

初誕生

生後満一年を迎えると、親戚などを招いて、子供の成長を祝う。誕生餅、一升餅・知恵餅などと呼ばれ、餅をつき、白または紅白の重ね餅を、ふろしきに包んで背負わせて歩かせた。餅を背負わせるとその子が強くなり、知恵がつくといわれ、一般に餅を背負うことは、縁起のよいこととされた。近隣へは祝いのしるしとして餅を配ったりした。

七五三

毎年一月一五日に、五歳の男児・三歳は男女児・七歳の女児を神社に参詣させる風習であるが、子供の成長期において、重要な段階と考えられる年ごろに、神参りさせるものである。我が村では、近年になつて普及したもので、昔は別に七五三としては行われていなかったようである。

第三節 成人

成人とは、一人前になったことを社会的に認められることを意味する。藩政時代の武士は、一歳から一六歳くらいの間に、成人となる元服の儀式が行われたが、庶民の間では前髪を剃って元服を示し、若者組に加入したようである。男子の場合、一人前と認められることによって、村人としての共同作業に当たって、一人役に数えられるようになり、男女とも結婚の資格が生じた。明治年代から太平洋戦争までの間は、男子の徴兵検査が、一種の元服とみられてきたが、戦後は法律によって満二〇歳が成人と定められ、一月一五日が「成人の日」の祝日となり、成人式が行われるようになった。

第四節 婚姻

一 婚約

通婚圏

昔は時代がさかのぼるほど、経済的、社会的、政治的に独立性、封鎖性が強くて、近親婚、村内婚が多数を占めていた。交通が不便であって、ほかの村のことはよくわからない時代、素性のわからぬものは嫁にもらわないといって、村外婚を嫌ったものである。しかし、我が村では地域的に交流の深かった隣接村（現在の美川・仁淀・梶原・東津野）の一部は通婚圏となっていた。

結婚観

昔は結婚は家本意の考え方が強く、家柄・血統・相性などがやかましくいわれ、自由な結婚は許されなかった。子供が年ごろになると、親は知人に相談し嫁の世話を頼んでおく。知人が見合いをすすめる。親同志、本人同志気に入れば婚約の運びとなる。

すみ酒

知人は仲人になって、正式申入れの使いをする。仲人は酒を抱えて行き、娘をもらうことを告げ、酒一升を渡し、それを飲むことによって婚約は成立するのである。すみ酒、または、たのめの酒ともいった。

この日に、結納や結婚式の日取りを決めることが多かった。結納は、普通、この婚約から一か月後くらいに行われた。すみ酒から結納までの間が、あまり長すぎると「水が入る」といつてきらっていた。

結納

選ばれた吉日、結納の日は、仲人は嫁方へ、結納の品として、帯や着物、酒肴などを持参した。今日ではこれらの品物も、結納金と酒肴料にかわり、婚約と同時に女へエンゲージリングが贈られることが多くなった。結納金については、仲人が婿方と相談し、嫁方へ「カエシコナシ」というと、結納返しの必要はないが、それがない場合は、結納金の全額、または半額程度を、袴料として返されている。

二 結婚式

祝言 結婚式を祝言ともいう。祝言の日は、昔は巳・馬・亥・酉の日が吉日とされ、その夜が選ばれていた。祝言は婚方で行われることになっていて、先ずその日は嫁迎えから始まる。

嫁迎え

嫁迎えには、仲人の外に婿・近親者・婿伽・迎え嫁などが出向いて行くのである。嫁迎えの人数は「ハで行って、チョウで戻る」といわれは奇数、チョウは偶数のことで、奇数が縁起がよいとされたのである。嫁方の家では、花嫁の門出を祝っての宴が行われる。婿と婿伽は宴の途中から先に帰って、花嫁の到着を待た。

嫁入り行列

嫁の一行は、迎え客の倍数くらいか、もっと多い場合もあった。嫁入道具は、簞笥や、シツと呼ばれる大きい箱などの荷物かたぎを従えて嫁入り行列は婚家に向った。荷物送りは先にすることもあったが、これらの人は、「たんすかき」とか「ふんどしかつき」などとも呼んだ。嫁入り行列は、たいいて夕方となった。「ヨメミヨ」、「ヨメミヨ」といって、嫁入りを盛大にしたものである。

手引き嫁さん

花嫁は到着すると、玄関から入らず床柱の見える縁側から、「手引き」また「手引嫁さん」と呼ばれる仲人の奥さんか、姑に手を引いてもらって、座敷の床柱の側に着席させられる。これは、誰も知らない他家に嫁ぐ時、ひとりで座敷に上るのは心細いからである。玄関から入らずに、縁側から入るのは、「嫁は庭先からもらえ」という諺が示すように、嫁は自家よりも、格式の低い家からもらった方がいいという気持の現われであろうか。

三三九度の盃

夫婦固めの三三九度は、仲人と雄蝶雌蝶おむちようめちようをもった童と童女が揃って、御銚子の口を合して酒を注ぎ、三三九度の盃が交され、親戚固めの儀式は、一般には披露宴と共に行われ、嫁いだ者の親戚を正客として宴がはじめられた。途中で花嫁は高島田を丸髻まげに結いなおし、お色なおしといって着物をいろいろ着替えた。若夫婦はトックリを持ち、大きい杯で酒を注いで回りあいさつをした。披露宴は、夜を徹してのみ明かし、昔は、三日三晩も続けていたという。

ヒザナオシ

祝言の翌日かその翌日に、ヒザナオシと言って里帰りが行われた。この時は嫁・婿・姑の三人で、酒一升なりを持って行き、一晚泊るのである。

この翌日は、帰って来てから姑が嫁を連れて、隣近所へあいさつして回るのである。しかし近年では、新婚旅行に旅立つのでこのようなことも次第に行われなくなっている。

その後、実家とのつきあいで、嫁は歳暮には必ず、お年玉といって鏡餅を一重ね持って行った。

第五節 厄年・年祝い

厄年

厄年の年令は、男子二五・四二歳、女子一九・三三歳があり、節分の厄払い、また神社参りなどをし、祓はらつてもらったりした。女の三三歳には、実家の親から帯を贈る習慣が多い。帯のように長くという意味がふくまれてのことである。男四二は、世だめし、運だめしもいわれ、親戚や知人を招いてお祝いをする。

年祝い

六一歳になると「六一ろくいち」といって、男女とも還暦を祝う。自分の生れた干支が一回りして、再び同じ干支がめぐってきたことを祝うのである。七〇歳（古稀）・七七歳（喜寿）・八〇歳（傘寿）・八八歳（米寿）に達すると、子や孫たちがその長寿を祝う。特に米寿の祝いには、赤い座ぶとんや赤頭布などを贈ったりする。

第六節 葬送

一 死亡

魂呼び

人が息をひきとった直後、死者から離れた靈魂れいこんが、大空に飛び去ってしまわないうちに、呼び返すことによつて、死者を蘇そ生せいさせることができると信じ、魂呼びといわれる風習があった。昔は、我が村でも、人の死後直ちに屋根に上つて、一升枀かきの底をたたき、また笠かさや箕み、うちわなどで招きながら大声をあげて、その

人の名を呼び「モドレヨ」、「モドレヨ」と繰返し呼んだという。

死者に末期の水を飲ますといつて、茶碗や湯のみなどに、水を入れておき、息をひきとった直後に、ガーゼやハナシバの葉などでくちびるをぬらしてやり、その後近親者や隣近所の人たちにもしてもらう。死者は、北枕に寝かせ、死者のふとんの上に刃物を置く、これは魔除けのためといわれている。

マクライ

枕がみへは、マクライの飯を供え、線香を一本、ローソク、ハナシバを立てる。マクライの飯は、二合半の米をたき、その飯を茶碗に山盛りに盛り、残りで丸いにぎり飯を四個つくる。そして膳ぜんの中央に、飯を盛った茶碗を置き、その回りににぎり飯を置く、飯を盛った茶碗の真中には、一ぜんのはしを立てる。マクライの飯は、死者があゝの世へ行くための弁当だといわれている。また枕団子はオモリモノと呼ぶ。オモリモノは、米の粉をひき、水でねって団子にしてゆでる。これを三本の細い竹を上部で結び、一本の竹に四個から五個くらいずつさし、三角形に組み合せ少し大きな団子をひらためにくつつける。これを三角形に作った膳ぜんに立てる。マクライの飯、オモリモノは、供えておいて野辺の送りの時墓に持って行く。

二人使い

弔いのある家を当家とうやと呼んだ。死者の出たことを、当家から寺や親戚に知らせる走り使いは一人で行くものでないといった。走り使いは近所の者が二人で、当家に近い親類から、遠い親戚へと順に知らせて行く。電話も車もない時代に知らせることだけでも大変だった。

死者が出るとすぐ、家族の者が床の間に半紙を一枚はる。これは神のおそれのためといわれ、四九日の法事が終るまでとらないところが多いようである。

お通夜

死者の通夜はオツヤ、ヨトギなどという。お通夜には、親類や死者の友人などが集まる。近親者はそばと一緒に寝るが誰か一人は交替で必ず起きていて、線香やローソクの火を絶やさないうようにし、またそ

の部屋へ猫が入らないよう番をした。

二 葬 儀

不幸組

村内各部落に葬式の手伝いを主体とした組が存在し、それらを不幸組とも呼んでいる。伍組単位の場合が多いようであるが、大きな伍組などでは分れている。死者の出た当家に対して不幸組が協力して、そのシマイ(葬儀)をすることは、久しい村人のつきあいであった。

お悔み

香典のことを見舞とかお悔みともいう。昔はお悔みは、米一升・米一升と金など、それぞれの部落で異っていたようである。酒を持って行く慣習のところもあったようであるが、多くは不幸には酒を使わなかったようである。昔は米を入れた色柄とりどりのたくさんの袋が、仏前に供えられていた。

穴掘り・道具作り

葬式の日には、伍組長のふれによって、各戸から男女が手伝いに集まる。女は食事の世話をし、男は伍長の指図によって手分けをし、穴掘り、ツボホリともいった、笠石取り、ハナシバ取り、棺桶をはじめとする野道具を作る道具方など、それぞれ仕事が多かった。道具方は、天蓋・燈籠・花籠・シカバナ・タツガシラ・花立・線香立て・六地藏・草履・縄・孫枝など一切を準備した。また入棺のため、棺桶を早く作らなければならなかった。穴掘りも道具作りも、終わったら道具清めといって、それぞれ酒一升を出し、それは残さぬように飲んでしまうものだといった。

湯灌

湯灌は、死体が置いてある部屋で行う。湯灌をユカワともいい、ごく身近かな者が数人で行う。湯灌の湯は先に水を入れ後で湯を加える。死体をきれいにふいて、死者の生前一番好んでいた着物を左前に着

せ、その上に白い着物を縫ったのを着せる。その白い着物は、娘や嫁、身近かな人が寄り合つて縫う。手おい、脚絆きまばんを着け、たびを左右反対にはかせた。

入 棺

棺は座棺が多かった。昔は桶だったが箱にかわつた。死者は棺の中に座ぶとんを敷き、その上にあぐらをかいた形で座らせる。首にサンヤ袋をかける。これは白木綿でつくり、この中には、ロクドウノカネといつて、六文銭と、ゴコクノシナといつて、米・粟・稗・トウキビ・大豆・ソバなどの中から五品を選んで紙に包み入れた。その他身近かな者が生前の好物など、思い思いに入れた。そしてハナシバの葉を棺いっぱい入れた。

葬 儀

座敷に棺を移して葬儀にうつる。坊さんをオッサンと呼ぶ。普通の葬儀の場合は、オッサンは一人であつた。カネ・タイコ・ミヨウハチをナリモノといい、これをうつのはこも伍長と組の者の役目だつた。焼香によつて葬儀は終る。次に出棺の準備にうつる。近親者によつて棺の蓋かたに釘をうつ、釘は石でうつならわしである。棺は直接なわをかけ、それに竹の棒を通して、二人でかつぐようにする。輿こしを使つていたところもあつたようである。

出 棺

出棺は、座敷口を開けて出すところが多い。近親者は、白紙でつくつた三角形のホウカンを頭につける。モチカタといつて、棺をかつぐ人は、わらぞうりをはき、家から地面へおりる。棺を庭に出した後、アナマワリといつて、その周辺を、オッサンを先頭に位牌・マクライ・天蓋てんがいなどの順序で、ナリモノを鳴らしながら、左回りで三回するところが多いようである。出棺の時、近親者が茶碗を門先でわる。これは死者が食物の縁を断つて、再び戻ることをもたげる意味ともいわれ、また死者の願をほどこすためともいわれている。

葬 列

野辺の送りの葬列はところによつて風習が多少異なるが、ミチキリといつて、組の年寄りなどが、鎌とわらを少し持つて先頭になり、ナリモノを鳴らしながら行く。ミチキリが刃物を持つのは、道を切り開く

とか魔物を払うためともいう。棺は、モチカタがちょっとかついだ後は、組の人たちが野辺までかついで行った。

埋 葬

埋葬することをイケルという。死者が西を向くよう、棺を入れるところが多い。はじめ身近かな者が手で土を少しかけて、後は組の人たちがきれいに埋葬する。上には、カサ石といって、大きな平たい石を置く。

カサ石の前に、オガミ石、あるいは、エンノ石と呼ばれる石を置く。カサ石の上に後から石塔が建てられる。

野辺の送りをすませて帰ったときは、シオバライといって、家の入口に塩を入れた皿と、手だらいに水を入れて置き、それで清めて家に入る。オッサンが後拝みをする。

トキノメシ

トキノメシといって、死者との別れの食事をする。トキノメシを大きな釜でたいたときに小さな穴があくが、この形を見て、死者が、トリ・ヘビ・ウマなどに生れかわったなどと故人を偲んだ。

墓 直 し

葬式の翌日は朝早くから、近親者たちが墓地に参って、川から砂や小石を取って来て墓に敷き、カサ石を直したり、オイ、あるいはヒオイと呼んで、わらや板竹などで作った屋根を墓の上にする。これは、四九日の法事まで建てておき取除きするところが多い。

我が村では、昭和三〇年代まで、ほとんど土葬であったが、墓地の改葬・火葬場などの整備によって、近年では、ほとんど火葬になってきた。それに伴って、葬儀店を利用するようになり、棺をはじめ、葬式用具はほとんど葬儀店が揃えるようになって、葬送儀礼も大きく変ってきた。

三 仏 事

服 喪

死者があつてから四九日間を、普通、喪に服する期間とし、家で喜びごととはせず、神祭りもしない。またその翌年は正月の年賀行事も遠慮する。四九日の法事が終るまで、位牌は仏壇に入れず、仏壇の下に台を置いてその上になまつる。

タンヤ

四九日までは水を供え、線香は一本を立てる。四九日まで七日ごとに、ヒトナノカ、フタナノカ、ヒトタンヤ、フタタンヤと呼ぶ。四九日までは、毎晩、墓の燈籠とうろうに火をともした。七日ごとのタンヤには、近親者が集まり、念仏をとなえ、また墓参りをする。このとき塔婆を一本ずつ持って行って墓に立てる。

シジュウク

四九日の法事をシジュウクといい、オッサンを迎えて行方。このとき四九餅しじゅうくもち、または、オモリモノをつくる。四九餅とは、一升餅をつき、これを四九箇に丸めたもの、これを供えて、法事に来た人たちに食べてもらう。シジュウクの法事も、最近は、遠方の親戚の關係などから、葬儀の翌日にする家もあり、また四九日より早く、ミナノカ（二一日）、イツナノカ（三五日）あたりにすることが多くなった。この日、死者が生前使つていた衣類や持ち物などを、形身分けといつて近親者に分けた。

アラボン

初盆をアラボン、ニイボンともいう。盆月の一日、昔は旧曆の七月一日でこれを七月入りと呼び、その日は、ハタオコシをする。白木綿で六尺に二尺の両袖をつけて、人の形をした旗をつくり、お寺で文字を入れてもらつて立てる。この旗は、この月中立てられ、あわせて盆提灯ちようちんを吊るし供養する。ハタオコシには親類も集る。

カンニチ

仏の正月をカンニチ、あるいはミウマという。この日は新仏が年をとる正月だといわれる。

一二月の最初の巳・馬の日（柳井川・中津）、辰・巳の日（西谷）である。親類が集まってカンニチ餅をつく。一升餅をつきこれを大餅おおもといつた。その日は朝早く、カラスが鳴かないうちに、墓に大餅を持って行く。これは、野辺の送りの時のモチカタをした者が持つて行くものだといふ。墓には、松の代わりに柿の木を二本立て、左繩にしたシメナワに、白色のワカバをつけたものをお飾りした。ワラで火をたいて大餅を焼き、包丁で角に切つて少し食べて持つて帰り、小さく切つて、親戚やお悔みももらったところへ配る餅へ入れた。カンニチ餅は普通の餅より大きく、これを一〇個か一二個ずつ包んで配つた。

年忌

年忌は、翌年のムカワレ・三年・七年・一三年・一七年・二五年・三三年・五〇年とある。各年忌には、法要を営み塔婆を立てて供養する。

第三章 労働とならわし

第一節 人と人とのつながり

過去から現在に至るまで、人々は一人だけで生きてきたものでなく、社会的にさまざまのつながりを持ちながら生活してきた。我が村人のつながり、それらの主なるものは、労働力を補うため相互扶助を目的とする結びつき、信仰による結びつき、年令集団による結びつきなどが考えられる。

一 相互扶助

モヤイ モヤイ（催合）のことをツキヤイともいう。神社・寺・学校・道掘り・道刈り・井手掘りなど、生活に

関する共同、あるいは、共同作業があり、これらに出役することを意味する。働き盛りの男が各戸から参加することをヤク（役）と呼び、出役の順番を、ムラマワリ（大字）組マワリなどといった。これらの作業で、比較的軽い作業、主として道刈りなどの場合で、労力を多く必要とする場合は、隠居や子女も参加することがあり、これを、アシダチと呼んでいた。足の立つものは全員という意味である。一般に、モヤイに参加するのは、男で一人前の仕事ができる者とされていたが、止むを得ぬときは代理人でも許された。

共同で焼畑などを作り、収穫物を分け合うような場合もモヤイと呼ぶ場合があったが、これは個人的であって、ヨリヤイの意味が強い。

イ イ イイは、ユイ(結ぶ)結合を意味することばである。テマガエともいわれるように、相互の労力交換である。イイの入れ合い、イイ入れなどといわれ、また返すことを、イイナオシといった。一時的に労力が不足する農作業、田植え、稲刈り、トウキビ取り、大豆まき、小豆まき、山伐りなどひんぱんにイイが行われた。一日の労力に対しては、必ず一日の労力を返さねばならず、金銭や品物で相殺することは許されないので特徴の一つであった。

コウロク コウロクは、オコウロクなどともいわれ、「合力」からきたことばと考えられ、助け合いの意味である。最も広範囲に、また日常的に行われている相互扶助の方法で、親戚や隣近所において、またその他、家の普請、家族の病氣、災害などの場合の片付けなど、手弁当による労力奉仕が行われてきた。

二一 講

講は、信仰を同じくする人々が結集している講と、経済的機能を發揮することを目的として結集する講の二つがある。信仰的な講については、その性質の違いから、さらに、大きく二つにわけて考えることができる。

その一つは、寺院・神社・宗派の教祖などが、その信者集団に講名を付けて、代参を伴う崇敬講と、もう一つは、寺社・宗派とは直接結び付きを持たず、したがって、代参を伴わないもので、地域ごとにつくられ、人々の生活に根ざして発達したものであり、地縁的結合の特に強いものである。経済的な講は、社会生活の分化につれ、民間の互助

的な金融組織としての頼母子講・無尽講などである。それぞれの講は、年間定期的に当番の家で会合をもち、代参人や、その費用の負担を決めたりした。この会合は、宗教的な会合であるとともに、娯楽的な要素を大いにもち、お互いの親睦を深めるものであった。またこの結合は緊密であって、講の加入が半ば強制的であるものもあり、義務的拘束性をともなうことが多く、宗教的性格とともに、村や組などの団結を強化する働きをもっていた。我が村人の間にこれら多くの講が存在したがその主なるものを見てみる。

(一) 崇敬講と代参

伊勢講

三重県の伊勢神宮への参拝を目的とする代参講である。昭和一〇年ころまでは、講のある部落が多かったようである。それぞれ講の代参人が二〇人くらい、村の神社の神主が先達となり、旧正月の二〇日ころから参拝に立っていたという。当時としては、実に遠い信仰の旅路であり、また楽しみでもあった。その当時は、伊勢音頭がよく唄われ、またお伊勢踊りが伝えられた。無事帰って来て、講開きをし、四方山のみやげ話に花を咲かせたという。

金毘羅講

金毘羅さんと呼ばれる、香川県琴平町の金刀比羅宮への代参講である。伊勢参宮とともに金毘羅参詣は全国的に流行し、我が村でもほとんどの部落に講が組織されていた。森の石松でおなじみであり、全国津々浦々から参詣されたことだろう。金毘羅さんは海神として崇敬される。それぞれの講で春か秋、また二回参拝する部落もあったようである。代参人は二人くらいずつで行き、お礼たをうけて帰って講開きをする。参拝を終えた後の楽しみは金毘羅の宿、金毘羅講参りの人々のエピソードは多く、いまなお語り草となっているものもある。

秋葉講

高知県高岡郡仁淀村、隣村にある秋葉神社への代参講である。普通、秋葉さんと呼んでいる。昔は各部落にほとんどあって、代参人二人くらいが参拝して帰って来て講開きをして、家内安全と、火災予防のお礼を配っていた。秋葉サンは、アタゴサンとともに火の神とされているが、アタゴサンは火をつける神で秋葉サンは消す神であるといわれている。秋葉サンの例祭は毎年旧暦の正月一八日に行われ、近隣であり現在では多くの村人が参拝している。

石鎚講

石鎚神社の大祭、石鎚サンと呼ぶ。毎年七月一日が、お山開きで一〇日間、石鎚山頂へ参拝する。昔はほとんどの部落に講があって、先達に従って、面河村から歩き、鎖を繰って上り参拝した。参拝する者は、一週間前から谷にしめ縄をはって水行（水をあびて心身を清める）をし、魚類を食べることを断ち、家族と別居していたところもある。代参人は、お礼・オシバを持って帰り配った。オシバは、竹にはさんで作物の虫よけとして立てた。最近では、交通の便がよくなり、自由に参拝するので講はほとんどなくなった。

宮島講

広島県鞆島神社への代参講である。中久保部落ではおそくまで行われており、旧暦の正月二日に代参人二人で参拝に行き、お礼をうけて帰って講開きのお祝いをしていたという。金毘羅講と一年交代で行っていたところもあるという。

子安講

周桑郡小松町にある香園寺に参詣する子安講であり、ここは、子安大師が祀られており、安産のお守りと、妊婦のハラオビをいただいでくる。子供が生れるとお礼に行くのである。

久礼講

高知県順崎にある久礼八幡宮に参拝する代参講である。久礼八幡宮は作物の神といわれ、代参人が参拝して帰り、八月一五日に組の者が集って、作祭りと、講開きを一語に行っている部落もあった。

(二) 民間信仰的な講

日待講

ヒマチ、オヒマチと呼ばれ、マチは、古くからのことばで、始めの意味は、「オソバニ居ル」ということ、つまり、神の傍に居るとともに夜を明かすこと、それが後になって、日や月の出を待つことだと考えられるようになったのだといわれている。お日待は、どこの部落でも昔は盛んに行われていた。正月には、三日までくらいには、組の当番の家に寄って、神を祭り、一年の無病息災と、五穀豊穡を祈禱きとうした。当番の家で夜を明かし、日の出を拜んで解散した。女はあまり関与せず男だけで煮たきして飲食をするなど、部落ごとに形式は若干異っていたが、どこの部落でも、組境にはお礼を竹にはさんで立てているのが見られた。このお日待も太平洋戦争の終戦後は、信仰心のうすらぎとともに、次第に簡素化され、また行われなくなりつつあり、行われているところにおいても、本来の日待の意味がうすれている。

愛宕講

アタゴサンと呼ばれて、火の神といわれている。当番は、夕方から集まり、ドンブリに盛った御飯と御神酒を供え、お灯ひかりりを上げる。組の者が寄って来て飲食をしながらお祭りをする。村内多くの部落にあり、特に大きな火災のあったところでは必ずまつっていた。

大師講

旧暦三月二一日と七月二一日には部落の大師堂に寄って、弘法大師をお祀りし、会食をした。その夜はオコモリとあって、お堂で一夜を明かすようなことも行われていた。

えびす講

えびすは、生業を守り、福利をもたらす神として祀った。講では当番が定められて、その年は当たったものがまつり、昔は一〇月二〇日が例祭とされていたようである。例祭には、相撲などを催していたところもあるという。

(三) 頼母子講

親頼母子

頼母子講は、古くは鎌倉時代から始まり、相互協力から発したといわれる。病人があったり、不幸があったりして借金が出来た場合、また家の改築、新築、田畑の購入などで、一時に多額の金銭が必要な場合、一定の人員の人に頼んで加入してもらって、頼母子講をつくる。この頼母子を作った人を親といい、「何某始め頼母子」という名称で呼んだ。親の家に加入者全員が集って頼母子を開く。一番に親がとる。親以外の者を子と呼ぶだ。

総代といって、金預りを信用のある顔役から選んだ。二回目から入札などによって、一番多く切った人に落札するが、落札した人は次回から、一定の利子を定めて併せて掛けていかなければならない。その利子分と入札で切った額を足した金額をまだ取っていない者の間で分配する仕組みである。親は利子を払わないかわりに、一回目に酒などを出して接待するとともに、二回目からもなんらかの賄いをする。

馬頼母子

昔は、農家には牛か馬か必ず飼っていて、馬は運搬の主役であった。村内の物資の運搬はほとんど馬であった。道路も狭く、馬の事故が非常に多かったので、相互援助から馬頼母子がつくられていた。馬が一頭、六〇〇円くらいだったのだらうか、三〇口で一口の掛金が二〇円だった時代もあったという。

屋根講

屋根講あるいは、茅講かやと呼ばれる頼母子的な講が各部落に組織されていて、茅屋根の葺替えふきかをした。

ほとんどの部落に共同の茅場かやばがあって、共同でこれを刈り運搬した。一五〇〇束前後で足りる家、二五〇〇束から三〇〇〇束を必要とする家もあった。葺き終るまでの四、五日間の労力の提供、なわの持ち寄りなどだった。茅屋根の家は必ずこの講に入っていないければならなかった。

互講

昭和初期になって、瓦講がぼつぼつつくられ、瓦屋根への葺替えが行われるようになった。昭和二年には、中久保部落に瓦講が設立され、一八戸が瓦屋根に葺替えされていった。中久保ではこの時、本家新築講と称する頼母子講もつくっていた。これは本家を新築する場合に限って一定の労力を提供するというものである。

三年齡集團

子供組

現在の子供会などに相当する、子供グループで、子供連中などの名称で呼ばれていたこともあり部落単位に組織され、各種縁日の子供相撲、秋祭りなど、年中行事に深いかかわりあいをもって活動した。

若者組

若い衆連中・若い衆組・若いもん組などと呼ばれ、我が村でも、明治後半ころまでは存在していたようである。その後、青年会・処女会に変わり、今日の青年団になった。青年をワカイシと呼んでいるが、これらが若い者組に加入できるのは、一五歳前後であった。その年齢に達すると、村の神社の境内に集まり、相撲をとったり、一八貫から二〇貫もある大きな石をかついだりする。この石を力石・ママゴ石などと呼んでいる。この石を持ち上げて地面よりちよつとすかすことができるのをアlicoソシと言っていた。

若者組への加入についてタブサといわれる儀式があった。これは、江戸時代の侍のように、前髪を少しそる行為で、これをする事によって、一人前の男子とみなされた。一種の成人式である。こうして、村人から一人前の若者として認められ、若者組に加入することになるわけだが、加入する際に親が付添い、酒を一升持参して皆に振舞い、若者組へ加入する。組織面から若者組をみると、種々の形態があるが、若連中・若いもん組は、それぞれ指導者とし

て、若者大将・若いもん大将を投票で選んだ。若長ともいった。その組は、選ばれた若長を中心に、集って話し合ったりした。集まる場所は、若いもん宿・若い衆宿と呼ばれる若者宿があり、これは、お堂を利用する場合、またヤマメ（男の独り者）の家を借りる場合もあった。若者宿では、時には寝泊りすることもあった。部落における若者組の役割として、秋祭りの興守り、奉納宮相撲・獅子舞い・盆踊り・村芝居など、あらゆる行事の運営にあたって、中心的な役割を果たしていた。また急病人の搬送・道普請・消防・夜警など、部落の日常生活を維持していく上でもなくてはならない存在だった。若連中は、明治末期に青年会と改称され、従来の部落単位のものとは支部となり、町村単位の青年会に統合され、いわゆる戦前の青年団となった。

娘組とか娘連中というような集団はなかったようであるが、裁縫とか、三味線など習いものには行っていたようである。

夜這い

昭和の初期まで、当地方では、若い衆の間で夜這いの風習があった。夜這いは、男子が女子のもとへ夜代、唯一つの男女の逢合として、半ば公然と行われていた。若い衆は、二、三人が連れ立って提灯をぶらさげて、二里も三里もの遠方まで、山を越えて行ったという。当時は、娘をもつ親も黙認するのが普通であった。どこまでも結婚を前提としたものではないが、これが結婚に発展する場合も多かったという。貞操観念が強く、風紀が厳しかった時代であり、現在見られるような、男女間のデートほどの自由はなかったと思われる。しかし、いつの時代も男と女、娘の子を親の子供として戸籍をつけるのも珍らしいことではなかったという。

隠居組 部落には、隠居組という年令集団がある部落が多く見られた。隠居となった老人たちが自らの手で創設し、寄り集って話しをしたり、酒を飲んだりした。また奉仕作業として、春・夏に道の草刈をしたりした。

第二節 奉公

子守り奉公

子守りをモリサンと呼んでいた。昭和一〇年ころまでは、子守り奉公が多くみられた。当時の農家は嫁も大きな労働力とならねばならなかったので、子供が生れると子守りを雇った。子守りは村内で雇う場合もあるが、土佐（橋原方面）から雇ってくるものが多かったようである。子守り奉公に出す家庭は、子供が多勢いて貧乏であり、クチペラシのためでもあった。モリサンは、たいてい、一〇歳から一二、三歳までの女の子が多かった。モリサンは、子供を背負って学校へ行くこともあったが、ほとんど行かれないようである。子守りは、食べさすのと、シキセといって、年に二回くらい、盆と正月に着物とたびくらしいを買ってあたえた。また少ない給金でもはらうことになっている場合は、親が遠方からでも、わざわざとりに来ていた。

この時代、農家では、少しの労力でもほしく、子供が大きくなると、下の弟や妹の子守りをさせ、雇っている子守りには、農事の手伝いをさせたりもした。

あらしこ

男の奉公人をあらしこ、女をおなごし、ねえ、などと呼んでいた。農家では奉公人を雇うのは、大きな農家であり、各部落ではごく少ない数であった。年季奉公（五年くらい）は住み込みであった。当時の農家の労力は、すべて人力か畜力に頼っていたので、重労働の連続であった。夏の農作業のあい間は、肥草刈り・牛の草刈り、冬は薪切り、雨や雪の日は、なわないにぞうり作り・俵あみ・ヤグラでの米つきなど、時には主人に代って組づきあいに出役しなければならなかった。奉公人の出替りは、一二月一六日で、やぶ入りともいう。盆・正月・氏神様の祭り、節句などには、一日または、半日の休みがあたえられた。給金といったものは、現金で支給されるのが

大部分であったが、具体的に金額は、はっきり決めてない場合が多かったようである。奉公人は、各家においては家族員と同じような扱いは受けていたが、食事や風呂は一番後になっていた。食べるものとか量のへだては普通なかつたようである。年齢は、一四、五歳から二〇歳前後が多く、奉公先で認められて、養子とか嫁に行く機会も多かった。

弟子入り

明治の時代から、大工・左官などの職人になるためには、すべて弟子入りからはじまり、修業は技術の雑用・板けずり・穴掘りくらいをさせてもらうのみで、墨つけや、切り組みができるようになるまでには、五・六年もかかった。そう親切に教えてくれる師匠ししやうは少なく、すべて見習いによって、自ら覚えこまなければならなかった。きびしさをこぎぬけ、やがて年季が明けると、後一年間、お礼奉公をしてやっと一人前になるのである。

左官の弟子もまた、土運び、土ねりから始まり、一人前の左官になるためのきびしさは同じであった。

でっち奉公

大正から昭和のはじめにかけて、でっち奉公として、松山や大阪方面の商家、主として呉服・金物店などへの奉公をするものが多かった。辛抱しんぱうして奉公のあかつきには、のれん分けといって、小さい店を出してもらえる。しかしそれまでの数年間、他人の飯を食うきびしさは、容易なものではなかった。

第四章 年中行事

年々同じ暦時に、同じ様式の習慣的な行事が繰り返される。これが年中行事である。ただし、それは個人を単位としたものではなく、家庭・村落・民族など、ある集団ごとに、しきたりとして共通に行われるものである。

年中行事は、このように、各地域社会ごとに共通して、伝承するものであるから、社会の変化に伴って、変化していくことがあるにせよ、そのテンポは非常に遅い。年中行事は、年間いくつかの節ごとに行われることが多い。この節は、自然の動きに関連している生産活動、特に農耕と深いつながりを持っている。そして節の日に神に供物をささげる行事が節句であった。また年中行事をあらわすのに、モノビということはも使われるが、この、モノは、物忌のモノに通ずる語であるとされている。すなわち、この日は、神に対して忌みつつしむ日であり、仕事を休んで汚れを断つ日と考えられていた。このように年中行事は神祭りの日であった。つまり生産活動と深いつながりをもつ節に際し、静かに忌みつつしんで神を祭り供物をささげて、後に人々とともにこれをいただく行事が本来の内容である。

今日では、その本来の意味が忘れられ、仕事を休んでごちそうを食べ、楽しく遊ぶ日として、娯楽の日、レクリエーションの日のように考えられている。わが村における年中行事も、その意味は別として、続けられているものもあれば、次第に忘れられていくものも多くなっている。地域によって多少異なる点はあるけれども主なる行事をみてみる。我が村近辺では明治三〇年ころから太陽暦が用いられ、幾分年中行事の中にも、それが取り入れられるようになったが、ここに記載するものは主として太陰暦による。

第一節 正月行事

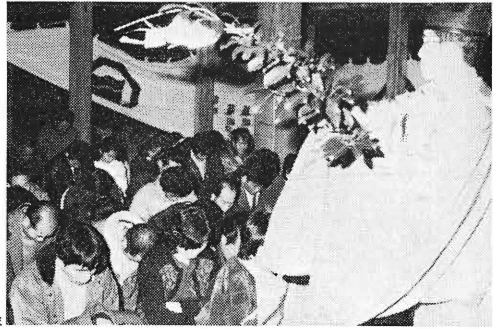
正月行事は年中行事の中で最も重要なものである。正月の神は、歳神としがみ、福德神と呼ばれるが、トシは、時間の区切りとしてのトシであるとともに、年穀ねんこくのトシである。したがって、正月の神は農耕神であり、正月行事は、秋の収穫により、いったん死んだ穀霊こくれいの復活を祈り、再び豊かな稔りを期待する呪術的じゆじゆつ、祈禱きとう的な農耕儀礼に起源をもつと考えられている。正月行事の重点は、元旦を中心とする大正月おほおほ、一五日を中心とする小正月こしんげにある。大正月は元旦から七日まで、小正月は一日から一六日までである。そのほか、この中間、小正月以後も続き、二十日正月により、正月行事は終了する。正月行事が、前年の一二月一三日の正月迎えから始まるとすると、正月は一か月以上も断続しながら続くことになる。このように昔はほとんど、正月は仕事をせず休んだようである。

若水迎え

一年の最初は、若水迎えをもって始まる。若水をくむのは男の役目で主にその家の家長である。元日の朝早く家長は、しめなわ・ユズリハ・ワカバなどを付けた桶を持ち、たいまつをつけて、船がわ（水桶のあるところ）へ水をくみに行き、その年の明方あきまつに向って、「福くむ、徳くむ、幸くむ、万の宝今くみとる」などと縁起のよい唱えごとをいいながら、桶に水をくみ取った。くんで来た水は、使いはじめの水として、茶をわかしたり、雑煮をたいたり、顔を洗うのに使った。

年 始

元旦の朝は、家族揃って、神を拝み、「明けましておめでとうございます」と新年のあいさつをする。お神酒をいただき、雑煮を食べる。子供たちは、隠居の祖父母にもあいさつしてお年玉を貰った。年始や年礼の行事が今日のように一般化してきたのは新しいことで、知人や同僚の間では年賀状などで行われるような



元旦の神参り（早虎神社）

ってきた。しかし、年始は、本来は一家一族の間で行われる礼儀で、親元、本家に集まり、自分たちの先祖を祀り、生きている親を祝福する儀礼であった。嫁入りした娘は、毎年、里の親へお年玉といって、かがみ餅をついて持ってあいさつをした。

正月礼

正月はどこの家でも、正月礼をするといつて、親子・親戚・友人の間で往来し、お寒酒を飲んで祝った。お寒酒の用意は、五入り（五升）・斗入り（二斗入り）といつてたる酒をどこの家でもかまえていた。

初め

年頭における仕事始めの儀礼で、正月二日に行い、ウチゾメともいう。畑に、一メートルほどに切った小さい竹を二つに割り、御幣をはさみ、その年の明き方に向って立て、立てた地面に、小さい土盛りを作り、しめ飾りをつけた松を一对と、紙に包んだ餅、干し柿、みかんなどを供え、畑を掘り返したりするところもあった。これによって、一年の仕事が順調に進められることを願うのである。

お日待 正月の三日ころまでにお日待が行われた（第三章の講を参照）。

七日正月 六日の夜から、七日の朝を一つの折目とし、七日正月は、大正月の神祭りの終る日、あるいは、小正月の準備開始の日と考えられていた。七日の朝は七草がゆをつくる。かゆに入れる七草は、セリ・ナズナ

など特に決つてなく適当に入れていた。七草がゆは神仏に供えてから食べた。

アワンボ

正月一五日ころ、アワンボを作り、これをエビスにそなえて、アワが豊作であることを願うのである。アワンボは、竹ベラの先を二つに割り火にあぶって曲げたものに、フシツクの木を、五寸位に切ったものを刺したものである。

鬼の金剛

一六日は、念仏の口あけと呼ばれ、年が明けて初めて念仏を唱える日だといわれている。オニコンゴウと呼ばれる大きなわらぞうりを作り、部落の入り口に近い、川か、谷渡しに大きなわら繩を張ってつるした。鬼がこれを見て、この部落には、こんな大きな草履をはく人間がいるのかと驚いて逃げ出し、また入ってこないようにして、その年の縁起を祝うという。またこの草履を、鉄砲でうつと、鬼をうったことになって、縁起がよいともいった。この鬼の金剛の行事は、今も続けている部落がある。

二十日正月

二十日正月は正月行事の終りの日であり、仕事を休む日となっていた。ヤイト正月ともいって、ヤイトすえるのによい日だとされていた。この日、ヒダル腹(空腹)でいると、年中ひもじい思いをするといわれ、餅などを腹いっぱい食べていた。



鬼の金剛 (本谷)

第二節 春から夏の行事

節分

立春の前日、節分の晩を、オオトシノパンあるいは、ドヨノサメ（土用）などと呼んでいた。この日は家の戸口に、タラの木を五寸位に切り、四ツ割りにして、先を割りヒイラギやヒビの木の小枝をはさみ、イワシノアタマ、スミなどを結びつけて、お飾りをつくりつるす。ヒイラギなど先のとがった木を使うのは、ユ

ルリの自在じざいから鬼が下りてくるのを防ぐためといわれている。家々では、ヒイヤ、ヒイヤギを燃して煎いった大豆を、一升ますに入れて、床前に供えた後、「鬼は外、福は内」とくり返ししながら、豆まきをする。家の中に病気や不幸が入らないよう、また作物が豊作であるようにと願ったのである。この豆を年の数だけ拾って食べると、夏病みしないといわれた。厄年の人は、豆を年の数だけ、四つ辻に持って行き捨てることで、厄落しをするなどの風習があった。その年家を新築する家々では、その敷地の回りにしめなわを張り、土地神に家を立てることをこの晩に告げるなどといわれた。

初はつ午うま 二月最初の午の日を初午といい、稲荷様を祭るところが多い。しかし、本来は、春の農事に先がけて、豊年を祈る祭りであるとい

われている。初午の日が早く来る年は、火が早い、火事が多いなどといわれ、アタゴサンを祭り、火災から守ってもらう日だともいわれている。



節分の豆まき（無量寺）

桃の節句

三月三日はひな節句とも呼ばれ、女の節句であるといわれ、ヨモギ餅などをつき、ひし形に切ったものを神に供える。また桃の花をお茶に入れたりして祝った。女の子が生れた家へは嫁の里から、ひな人形などを贈って祝うようになったのはごく新しいことである。

春の彼岸

春分の日を彼岸の中日という。「暑さ寒さも彼岸まで」といわれこのころから急に暖くなってくる。家々では、早くから墓掃除をし、山からハナシバをたくさん取ってきて準備をした。墓参りをハナオリといって、ハナシバを持った人たちの往来が多くなる。親もとへは彼岸やしないと行って、餅やだんごをつくって持っていた。

社日

春の社日は、立春から数えて五回目的戊（ツチノエ）の日で、春分の日前後となる。社日は農神が去来する日であるとする。春には、山の神が田の神となって野に降り、秋の社日に山の神となって山に還る日と考えられ、この日は農耕を休む習慣になっていた。

花まつり

四月八日は釈迦の誕生日であるとされ、花まつり、お釈迦さんなどと呼ばれている。人々は寺に参り、美しくレンゲの花に飾られた、釈迦の像に甘茶をそそぎ、子供たちは甘茶をもらってビンに入れ喜んでもって帰った。この甘茶にはなにか呪力じゆりきがあると考えられていた。

春祭り

四月中旬には、村内の各神社で春祭りが行われる。

五月節句

五月五日は、五月節句、端午の節句などと呼ばれる。菖蒲しょうぶ・カヤ・ヨモギを束ねて屋根にはうり上げ縁起を祝う。菖蒲は、勝負にちなんで強いものとされた。菖蒲を茶に入れて飲んだり、頭や腰に巻いたり、また菖蒲湯に入ったりして無病息災を願った。五月節句は男の節句とされ、かしわ餅などもつくった。

男の子の生れた家では、武者人形を飾り、鯉のぼりを新緑の空に泳がせる風景が、我が村でも見られるようになった。



オサンバイサン（高野）

たのはそう遠い昔ではない。

オサンバイサン

田植が始まる時、田の面に苗束をおいて、田の畦にオサンバイサンを祀った。田の神が山から降りて来られると考へ豊作を祈ったものである。干し柿・米・お神酒を供え、カヤとウツゲの花を一緒に立てた。

齒固め

六月一日に、正月の餅を乾してたくわえておいたのを、焼いて食べる。これを、齒固めといった。齒が強くなるためともいうが、六月一日を、豊作に関しては、麦朔日むぎのひとも呼ばれており、麦の収穫を祝う意味とも考えられる。

夏祭り

六月中旬、村内の各神社では夏祭りが行われる。

半夏至

夏至から数えて一日目が半夏至で、新暦の七月二日ころにあたる。半夏とは、毒草とされている植物の一種である。この草が生える意味での半夏至は、この草の毒気が充満しているものと考え、この日に穴のあいたものを食べてはいけない日とされていた。また農家では、ハンゲハゲアタマ・ハンゲダなどといって、この日までには田植えを終わらせるべきであるとされていた。

土用

土用は、四季それぞれに一八日間ずつあるが、一般には土用というと、夏の暑い土用をさす。過ごしにくい盛夏の無病息災を願い、夏病みを防ぐため、土用丑の日に、うなぎを食べる習慣もその一つで、川魚を取り、また薬草としてのゲンノショウコなど、この日に取れたものは、なんでも薬になると考えていた。土用中



七夕さん（柳小）

には、農家は作物の成育を願ひ、害虫を駆除するため、それぞれの部落ではお堂などに集つて、米を持ち寄り、かゆをたいて、サネモリサマに供え、念仏をあげて虫祈禱が盛んに行われた。

七夕 七月七日は、七日盆または七夕である。天の川で牽牛星と織姫

が、一年に一度だけ会うことができる日とされている。サトイモの葉の露をとり、それで墨をすつて、短冊に字を書くと、文字が上達するといわれ、天の川・七夕・牽牛・織姫などと書いて、若竹のササにつり下げて、縁側に立てる。タナバタサマは、初物が好きであるといわれ、新鮮な野菜などを供えた。七日盆には、部落によっては、お堂に集つてオセガケなどをするところもあった。

お盆

お盆は、正月とともに最も重要な年中行事とされてきた。盆とは先祖の霊を供養する仏教の行事である。七月一日を七月入りと呼んだ（第二章通過儀礼参照）。仏様迎えは、新盆の家では一三日、その外は一四日に行く。仏様の迎え、送りは地域によって少しは異つている。墓へ線香を持って行き、お参りして火をつけた線香を持って帰る。その線香と一緒に先祖の霊が帰つて来るとされている。オガラなど迎え火をたくところもある。

迎えてきた仏様は、仏壇とは別に、座敷にボンダナを作る。ボンダナには、ササのついた若竹・バショウ・クスバ・ハギなどを使った。供物は、トウキビ・ナス・キウリ・ソーメン・大きい煎り餅などである。一五日は仏様を送る日となつていて、迎えと反対に、家から線香を墓へ持つて行く、送り火をたくなどである。ボンダナも取り除いて

川や谷へ流した。盆踊りは、一五日から一六日にかけて、寺の境内や広場で、先祖の霊を慰めるために行われた。カネをたたいて念仏踊りが昔は行われていたようである。

第三節 秋から冬の行事

八朔祝はつぎい

八月一日を八朔といい、この時期は、稲作をはじめ農作業も一段落し、二百十日、二百二十日など、風

の害が心配されるところである。このような大切な時期にあたって、豊作を祈るため、米を持ち寄ってお堂に集まり、かゆをたいてお地藏さんに供え、念仏を上げてみんなで食べ八朔を祝うところもあった。

月 見

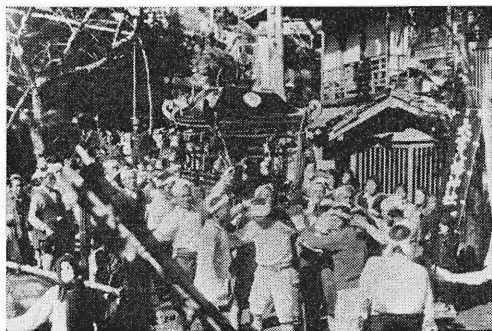
八月一五日、一五夜を名月と呼び月見をする。ススキや団子、サトイモを供える。イモ名月ともいう。

秋の彼岸

九月二三日秋分の日を、彼岸の中日という。先祖をうやまい、仏壇に供物をし墓参をする。盆から日も浅く、人々の墓参も、春の彼岸ほどの往来がない。

秋祭り

氏神様の祭りで、新暦一月一三日は、村内の各神社で祭典が行われる。一四日は、ニワと呼ばれ、神輿渡御が行われる。昔は、村内各神社の祭りは、一一月六日ころから始めて、一〇日まで、次々と行われていた。それぞれの家では、餅をついて供え、ごちそうをつくって、客の往来



秋祭りのみこし（昭和18年旭）

風

がひんばんに行われた。昭和三〇年大字中津の合併後、村内の祭りの日を統一することになった。

亥の子

一〇月の亥の日を亥の子と呼ぶが、初めての亥の子を初亥の子、二回目を一ニ番亥の子などと呼んでいる。亥の子は、農民の収穫祝いであり、亥神様を山に送り還す儀礼と考えられている。ダイコンを入れたまぜ飯などをたいて大黒様にお供えた。子供たちはわらを束ねてイノコをつくり、イノコツキといって、亥の子歌に合せてイノコツキをする。こんな風習は村内ではあまり盛んでなく、一時姿を消していたが、近年になって復活したところもあるようである。このころになると、北風が吹き始め、こたつを入れる準備など昔はしていたものである。

冬至

新暦一二月二二日の冬至を過ぎると、昼間の時間が毎日、ヤギ（山羊）の目の長さくらいずつ長くなってゆくなどといわれた。この日をもって尊いものの再生、復活が始まるという信仰があった。冬至にカボチャを食べると中風にならないといわれている。

年の暮れ

師走（十二月）になると、そろそろ、正月準備が始ってくる。一三日はオマツムカエといって、松の木を山から切ってくる。切りに行くのは一家の主人であった。松は家の裏に立てかけ、米の御飯をたいて松の枝に供えた。「お正月サマが門かどまでみえている。」といって正月の近いことを祝った。

このころから、正月の豆腐や、こんにゃくつくりが始められた。また餅つきのためのカシモノといって、餅の材料を洗って水につける。餅つきは、二四日ころから、二六日ころにかけて、隣近所が、イイをして行われた。

二〇日ころから、大字をはじめ部落の暮れ勘定が行われるようになってくる。神社・寺・学校・部落事業などに伴う、それぞれの出歩の過不足計算・負担金など益以後の半期分について決算が行われ、また役員の改選などが行われた。昔は予算をたてることなく、必要なだけ使って決算をした。今日では、ほとんどの部落が事業計画を立て、決算

も年末一回となっている。

大晦日の日までには、家の戸口に、一对の門松を立てお飾りをする。松の幹を八〇センチほどに切り、その松を割って束ね、竹の輪でしばった。これを、サイワイギと呼んだ。その中心に、三段の枝のついた一メートルほどの松と、ササのついた竹を、ショウミングエ（正面杭）と呼ばれる、門松を支えるための木に結びつけた。ショウミングエは、モミ・スギなどの木を使い、上方にしめなわを張った。しめなわは、七・五・三などの奇数にたらし、ダイアイ・ウラジロ・ワカバなどをつり門飾りとした。その外、大小のお飾りをつくり、水神様・荒神様・便所神様など、また一年間使った、スキ・クワをはじめ、農用具をきれいに洗って集め、お飾りをしてお供物をし感謝した。

正月にくる歳神を、トシトコサマ・トシトコハッショウジンなどと呼んでおり、大晦日から一月十五日ころまで、家々に滞在すると考えていた。歳神は年棚としだなと呼ばれる棚にまつられるが、我が村あたりでは、特別に棚はつくらず、荒神の棚と呼ばれる、ダイコクサン・エビスサンなどと一緒にまつられたようである。

年の暮れは、節季と呼ばれ、大晦日の晩までの忙しさ、あわただしさ、昔は、普通商人への支払いも、盆と節季の二回だった。商人への支払い、借金の取立て、利子払い、賃金の請求など、半年または一年間の総勘定であり、およそ現在の人々には想像のつかない年の暮であった。

第五章 芸 能

第一節 民 謡

昔の民謡には、ふるさとこの土とともに生きた、先人達の生活や感情が唄われていて、素朴であるが真実があふれている。特に我が村だけのものはないが、あらゆる日常生活や、山仕事、田畑の仕事には唄がついていて、これが唄い伝えられてきた。しかしながら、永い歲月の間には、これらの唄も、生活環境の変化に伴って、いつの間にか人から忘却されんとしている。昔を物語るこの唄は、村の歴史を示す史料であり、先人の遺産として、いつまでも後世に残したいものである。

ここに、仕事の唄・祝祭り唄・わらべ唄・踊り唄・万才小唄などについて、我が村で昔からよく唄われてきたような歌詞を拾って掲げてみる。

一 仕事の唄

○田植え唄

まだ今朝は霧の最中よ
静かに通れや石橋を

石橋は四十や二のもの
それとるのは二十一

山田の稲はあぜよりかかる
十七ノ八はとのによりかかる

日は暮れるいぬにいなれず
旦那さんの日はまだなり

早よ植えよつばにいるなら
よこてでとのごがささやく

五月水ほどばわれた私

今日は山田の落し水

○うすひき唄

うすも回れよ ひき木も回れ
師走二十日にや ひまをやる

うすは重たし 相手は眠る
眠る相手なら なけりゃよい

うすをひくとき 唄わにゃならん
唄でつかれを 忘れよう

うすよ回れよ 芯とろとろと
掛けたたすぎの 回るよに

○茶摘み唄

お茶も摘みます 芯みはどりに
取りて主さんに 飲ませたい

お茶も摘みしもた 田も植えしもた
後に残るのは しやくのたね

○木挽唄

木挽や挽け挽け お杣は削れ
深山天狗は 木をかやせ

木挽さんかよ 向いの山で
今朝も やすりの音がする

大工さんより 木挽が憎い
仲の良い木を 挽ぎわける

大工 木挽は 闇でもわかる
けやき もみ つが 風がくる

木挽さんなら わしやどこまでも
ついでいきます 竹槍で

木挽や こんびき こんさやつめりや
どこの山でもよー あげをするよ

木挽や米の飯 三升炊き食ろて
のこの柄のような くそたれた

咲いた桜に だれ駒つなぐ
駒がいさめば 花が散る

二 祝い・祭りの唄

○祝い唄
ここの座敷は めでたい座敷
鶴と亀とが 舞を舞う

○馬子唄
馬よ歩けよ 杵買うてはかそ
せめて三島の かたまでも

遠い山道 鈴の音するが
あれは恵原の兼さんか

三坂越えすりゃ 雪降りかかる
もどりや 妻子が泣きかかる

むごいもんぞえ 明神馬子は
三坂夜出て夜もどる

うれしめでたの 若松様は
枝も栄える 葉も茂る

○子守り唄

ねんねんころりよ おころりよ
坊やの守さん どこえ行た

あの山越えて 里へ行た
里のみやげに 何もろた
でんでん太鼓に 笙の笛

それをもろうて 何にする
吹いたり たたいたりして遊ぶ
坊やはよい子じゃ ねんねしな
ねんねんころりよ おころりよ

お前百まで わしや九十九まで
共に 白髪が生えるまで

十が九つ 思いごとかのうた
末は 鶴亀 五葉の松

○亥の子唄

お亥のこさんという人は
一に 俵をふんまえて
二に にっこり笑うて
三に 酒を造って
四つ 世の中よいように
五つ いつものごとくなる
六つ 無病息災に

三 わらべ唄

(一) 手毬唄

○てまりとてまり

てまりとてまりが行きおうて
一つの手まりが言うことにや
一年奉公しよじゃないか

七つ 何事もないように
八つ 屋敷を掘り広げ
九つ 小倉を建て並べ
十で とうとうつき納め

○胴掻き唄

ここの屋敷は よい屋敷
四方が高くて 中窪で
中の窪いに 木を植えて
一の枝には 米がなり
二の枝には 金がる

三の枝には 福がる
はあーもつともの綱もええー
ハアエイトナー

○嫁入り唄

可愛い娘を やるぞやもこに
打ちもたたきも ジャレもすな
嬉れし目出度の 若松様よ
末は鶴亀 五葉の松

一年奉公わしやいやじや
二年奉公しよじゃないか
二年奉公わしやいやじや
三年奉公しよじゃないか
三年奉公するからにや
朝もとうから起きやんせ

ちゃんちゃん茶釜に水ついで
おじさんおばさん起きやんせ
起きて茶茶飲んで髪結うて
てんてこ寺へ参りやんせ
てんてこ寺のきじ猫は
父より母よりほろろうつ

ほろろじゃあるまい傘じゃある
傘は何傘えちご傘

一に鏡台二に鏡

三人子供に帯もろて

帯はもろたがくけてない

くけておくれやあねごさん

くけてあげるは衆なれど

針がないからくけられん

針は針屋の絹糸で

くけてもろうて花見に行けば

お寺ぼんさにだきしめられて

帯がぎれるけはなしておくれ

帯がぎれるけはなしておくれ

縁がぎれたらつながらん

○うけとった

今日はきょうきょう

明日はだいたい

お台所のおてんまりを

お貸しなされや

お見せなされや
貸してもろうて

ついて汚して戻すときは

赤の糸や黄の糸や

金茶まじりの紫

おうやこうやと

おちどりもうして

○〇さんの小袖の下へ

お渡し申すががってんか

ヨシガッテン ガッテン

○わしのおばさん

わしのおばさん 窓から見れば

銀の屏風に

綿のふとん

こまい茶びんに

甘茶を入れて

誰にさそうや

お芳にさそう

お芳 芳 芳

吉田の生れ

生まれ落ちると

おばさんがかり

おばにかかりて

はや十年よ

奉公さそうか

縁づきさそか

縁はまだまだ

奉公が急ぐ

奉公さしても わきへもやらん
寺のおしよやの 機織り奉公

機は織っても

布織りいやよ

紬三反

木綿が二反

織って仕立てて

旦那に着せて

わしも一度

いにたいものよ

いぬる小道で

書いた紙ひろて

足でけり上げ

手に取って見れば

下の一字は

お色とござる

上の一字は

お万とござる

お色来い来い

お万をつれて

お色来たとして

やるものないぞ

筆に草紙に

歌の本

まだまだやりたい

長崎かもじ

いれていわして

後から見れば

つとん三尺

まきてが二尺

合せて五尺の

まげ島田

○一匁のいい助さん

一匁のいい助さん いの字が嫌いで

一万一千一百石一斗一升

お蔵くらにおさめて二匁にぶいに渡した
二匁にぶいのにすけさん・二の字にが嫌いで
二万二千二百石二斗二升
お蔵におさめて三匁さんぶいに渡した

(一〇匁まで続く)

〇おしよ正月

おしよ正月は 松立てて 竹立てて
年始としはじめの御祝儀ごしゆぎ いたしましよ
オチャチャカボン 茶々ちやちや持て来い
なんと 吸物すいぶつ 早はや持て来い
子供の喜よろこぶ お正月 お正月
ひいや ふうや みいや ようや
いーつや むーや なーや やーや
ここのや とーや
とうからおいでた お芋屋いもやさん
お芋一升 いくらかかぬ 八十七錢五厘よ
もちつとまからんか チャカランカポイ
おばさんのことなら まけてあぎよ
ざるを出し ますを出し

〇正月とえ

正月しょうげつとえ 障子しょうじあければ万才まんざいが
鼓つづみの音ねやら歌うたの声こゑ さあ歌うたの声こゑ
二月にがつとえ お宮参りみやまゐりや寺参り
あすは彼岸ひがしのお中日あひる さあお中日
三月さんがつとえ 桜さくらの花はなにはおひな様
きれいに飾かざった内裏様うちらさま さあ内裏様
四月しがつとえ 死しんでまた来きるお釈迦様しやくかさま
竹たけのひしゃくで茶茶ちやちやあがれ
さあ茶茶ちやちやあがれ
五月ごがつとえ ごんぼ紋しほりの前掛まえかけを
正月しょうげつ結むすほとのけといた さあまえかのけといた
六月ろくにとえ ろくに結むすばん前掛まえかけを
ころんで汚よごして腹はらが立つ さあ腹はらが立つ
七月しちがつとえ 質しつに入いれたり流ながしたり
質屋しつやのおばさん親切しんせつな さあ親切しんせつな
八月はちがつとえ 蜂はちまきにさされて目めが痛い
姉あねさん薬くすりはないかいな さあないかいな
九月くがつとえ 草くさの中には菊きくの花
姉あねさん一枝折いちえってんか さあ折えってんか
十月じゅうがつとえ 重箱じゅうげいさげてどこえ行く

おいべつさまのお使いおつかいに さあお使いおつかいに
十一月じゅういちがつとえ 十一じゅういちぐらいの兄あにさんが
鉄鉤てつこうかかついで鳥とりうちうちに さあ鳥とりうちうちに
十二月じゅうにがつとえ 十二じゅうにぐらいの姉あねさんが
私の肩掛かたかけけ編あんでいる
さあ編あんでいる

〇一かけ二かけ

一かけ 二かけ 三かけて
四かけて 五かけて 橋はしをか
橋はしのらんかんに 腰こしかけて
はるか向むかうを ながむれば
十七じゅうしち八はちのねえさんが
手てには花持はなもちち 線香せんこう持もち
ねえさん ねえさん どこえ行く
私は九州鹿兒島くわいしゅうかごしまの 西郷隆盛せいこうりゅうせい娘むすめです
明治十年の戦争せんそうで 切腹せきぶくなされた
父ちち上の お墓参りおぼろ参りに参まゐります

〇一れつ談判

一れつ談判だんぱん破裂はれつして 日露戦争にっろせんそう始はじった

さっさと逃げるはロシヤ兵
死ぬまで尽すは日本の兵
七月初七日の戦いに ハルピンまでも
攻めよせて クロバトキンノ
首を取り 東郷大将万々歳

○一番はじめは

- 一番 最初は一ノ宮
- 二で 日光東照宮
- 三で 讃岐の金毘羅さん
- 四で 信濃の善光寺
- 五つ 出雲の大社
- 六つ 村々鎮守様
- 七つ 成田の不動様
- 八つ 八幡の八幡宮
- 九つ 高野の弘法大師
- 十で 東京の明治神宮

(二) お手玉唄

○おじやみ

おじやみ おふた おみい およう
なんとかじゆ とんちな
おじやみざくら おふたざくら
おみざくら ざくら おようざくら
おななざくら おもがえし
おうまののりかえ おかごののりかえ
のりかえた おふた おふた
おうまののりかえ のりかえた
おみい おうまののりかえ のりかえた
およう おうまののりかえ のりかえた

○日本の乃木さんが
日本の乃木さんが 凱旋す すずめ
めじろ ロシヤ 野蛮国 クロバトキン
金の丸 マカロフ ふんどし 締めた
丹切り リコウンヨウのはげ頭
負けて逃げるが チャンチャンボ
棒でたたくが犬殺し

しわん坊主の柿の種

年があいたら帰ろうか
鍛冶屋の丁稚も暑かろう
お寺の小僧もお経よみ
皆さんこれでおしまい

(三) 羽子つき唄

○一や二
一や二 三や四 五や六 七や八
九や十

(四) 鬼あそび唄

○鬼ごと
鬼さんこちら 手のなる方へ
鬼さんこちら 豆いってかまそ
鬼が来るまで 豆いって待ちよろ

○かごめかごめ
かごめ かごめ 籠の中の鳥は
いついつ出やる 夜明けの晩に
鶴と亀が すうべった

うしろの正面だあれ

○坊さん坊さん

坊さん坊さん どこ行くの
わたしは 田圃へ稲刈りに
私も一緒に連れしゃんせ
お前が来ると 邪魔になる
このきんかん坊主 くそ坊主
後の正面だあれ

○中の中の弘法大師

中の中の弘法大師 なぜに
背が低いぞ 立てば立ってみせい
うしろの者 だあれ

(四) 縄とび唄

○大波小波

大波小波 風が吹いたら
まわしましょ 一 二 三
四 五 六 高一 高二
三リキ リキ リキ スッポンビ

○ゆうびんさん

ゆうびんさん 走らんか
もうかれこれ 十二時じゃ

時間がぎれたら ばっきんじゃ

○おはいり

おはいり はいよろし
ジャンケンポン
負けたお方は 出てちょうだい

(六) 子取り遊び

○子くれ子くれ

子くれ子くれ どの子が欲しい
この子が欲しい 連れて帰って
何食わす せんちのはたの
ぐいみ食わす それはあんまり
ほろぎしゃない 川端のぐいみ
食わす それはあんまり 水くさい
お米のまんまに じじ食わす
それなら やるから 連れて行き

(七) 手合わせ遊び唄

○夏も近づく

夏も近づく 八十八夜 野にも山にも
若葉が茂る あれに見ゆるは
茶摘みでないか あかねたすきに
菅の笠一

(八) 指遊び唄

○いびつく

いびつく にびつく さんが早い
お姫さんが 指つく らんちゃんほ

○一が刺した

一が刺した 二が刺した 三が刺した
四が刺した 五が刺した 六が刺した
七が刺した 八(蜂)が刺した
ブーン

(九) いらめっこ遊び唄

○だるまさん

だるまさん だるまさん
いらめっこしましよ

笑ろたら駄目よ うんとこ
どっこいしょ

(一〇) 関所遊び唄

○通りゃんせ

通りゃんせ 通りゃんせ

四 踊り唄

(一) 盆踊り唄

ハア 盆はナ(ヨイサ)

盆は嬉しや別れた人も

(アラセヨホホイ)

暗れてこの世へハア会いに来る

ここはどこの 細道じゃ
天神様の細道じゃ

ちよつと通して 下しゅんせ

御用のないもの 通しゅせぬ

この子の 七つのお祝いに

お札を納めに 参ります

行きはよいよい 帰りは恐い

恐いながらも 通りゃんせ

通りゃんせ

(二) 幼児の唄

○ちようち

ちようち ちようち

おつむてんてん

輪くぐり 輪くぐり

おつむてんてん

じいのみ じいのみ

(アラセヨホホイ)

憎や雲めがハア邪魔をする

ハア どんとな(ヨイサ)

どんと叩いた太鼓の音に

(アラセヨホホイ)

あの世この世のハア戸が開く

ハア りんねナ (ヨイサ)

りんねはなれて気も軽るがると

(アラセヨホイ)

まわる踊りのハア輪のまるさ

ハア 揃たな (ヨイサ)

揃た揃たよ皆手が揃た

(アラセヨホイ)

稲の穂のようにハアよく揃た

ハア 心ナ (ヨイサ)

心揃えば手振りも揃う

(アラセヨホイ)

お月様さえハア笑いがほ

ハア 歌いナ (ヨイサ)

歌いましょうよ声はり上げて

(アラセヨホイ)

国の栄えが身の栄え

ハア 足のナ (ヨイサ)

足の軽さよこの気の軽さ

(アラセヨホイ)

田植えすましたハア戻り道

(二) 盆踊り唄

年に一度のこの盆おどり

(ソレキタ ドッコイシヨ)

なんのはずしてなるものか

今夜がくるのを 今夜がくるのを

待っていた 待っていた

(ソレソレソラ ソレキタ

ドッコイシヨ)

響く太鼓にみなさそわれて

(ソレキタ ドッコイシヨ)

きたよきました盆踊り

くれば手足が くれば手足が

すぐはずむ すぐはずむ

(ソレソレソラ ソレキタ

ドッコイシヨ)

おじごおばごに姉娘に若衆ワカシラ

(ソレキタ ドッコイシヨ)

しなよく踊るがよい娘

なんではずかし なんではずかし

むこと嫁 むこと嫁

(ソレソレソラ ソレキタ

ドッコイシヨ)

月になりたや今宵コノヨの月に

(ソレキタ ドッコイシヨ)

可愛いあの娘がよく見える

空の上から 空の上から

よく見える よく見える

(ソレソレソラ ソレキタ

ドッコイシヨ)

いとしお方と揃うて踊る

(ソレキタ ドッコイシヨ)

極楽村ごくらくむらから母様ははさまも

にこりにこにこ にこりにこにこ

見てござる 見てござる

(ソレソレソラ ソレキタ
ドッコイシヨ)

なすの紫さうりの緑り

(ソレキタ ドッコイシヨ)

何をそなえましょ赤いもの

あたしの真心 あたしの真心

ちよっと添える ちよっと添える

(ソレソレソラ ソレキタ

ドッコイシヨ)

(三) 名荷踊り唄

○三ツ拍子

(ア ヨーイ ヨーイ ヨーイヤナ)

あ 東西や 東西南北ご免なれ

これより東やまだ東

所申せば肥後の国

大蔵の娘で名がおはん

おはんの器量と申するは

ものにたとえて云うなれば

立てばしゃくやく座ればぼたん

歩く姿は百合の花

それほど良い娘に生れしも

四百四病の病より

貧ほど悲しきことはない

泡と消え行く信濃屋へ

みずし奉公と入れられて

奉公のきめが五年半

おはんは毎日勤めする

宿の息子の名が義之丞

そこで義之丞に見染められ

十七八の初器量で

馴染重なりや身が重る

そこで義之丞の心が変り

おはんおはんと呼びいだす

何か御用でござんすか

ほかの事では無いおはん

明けて来春早々に

商の都合で上方へ

いつ戻るかほど知れん

おはん暇やるいんでくれ

わたしいぬのは安けれど

お腹に義之丞さんのややがいる

先を申せばまだ長い

ここでとめおくご免なれ

○ひけは

(ア ヨーイ ヨーイ ヨーイヤナ)

やれ東西やひけは踊りとはよかかれ

私 夫は美濃国 綿商売をおもとして

真綿千丸買いそろえ

木綿千丸買いそろえ

真綿木綿で二千丸

そのような綿と申するは

中国おもてに舟に積み

綿の間屋に乗りこんで

値段相場を聞き合わす

そろばん持たずの胸算用

とんとその綿売りとはす

胸のそろばんちと違うて

お主の金おぼちと使い

これでは国へは帰られん

国へ帰って親方に

勘定がたねば殺される
一人死ぬのは安けれど
一人で死んだら大死よ
二人で死んだら心中よと
帳やそろばん肩にかけ
かたわら屋へと急がれる
小千代やお竹を相手とり

○くりあげ

(ア ヤートコセーヨイヤナ)

国はヨホホ中国長戸の国に

関にや千間ヨ一並びはないか

並はヨホホあるあるけきよ屋もござる

けきよ屋娘のその名が小杉

年はヨホホ十八小柄な女

下女をひきつれお寺に参りや

寺のヨホホ御門で坊さんを見染め

見染め逢い染め早恋となる

下女をヨホホひきつれわが家に帰り

二階座敷の北窓開けて

すずりヨホホ取り出しジャコウ墨を

とろりとろりと墨すりながし
しかのヨホホまさ筆とろりとかんで
紙はよい紙奉書の紙へ

思うヨホホ文句をすらすら書いた

書くは書いたよ七ひろ八ひろ

紙にヨホホ封して上書きなさる

上に書いたは丹尚寺様へ

下にヨホホ書いたはけきよ屋の娘

文はできたがやるてがない

文のヨホホ使いは誰ぞと問えば

お寺戻りの寺衆や下人

寺のヨホホ下人が情もちなざる

扇子小骨に文さしのせて

お尚ヨホホさまにと文さしいだす

お尚手にとり拝見なさる

いかにヨホホ良く書く女の手すい

恋の事には相違はないと

丸木ヨホホ橋よと一筆書いて

すぐにその文小杉に戻す

小杉ヨホホ手にとりよくよく見れば

丸木橋かや文返されて

丸木ヨホホ橋とはわしや思わねど

致しかたなし落さじやならん

恋でヨホホ落ちねば命で落す

ねこも通わぬお尚の寝間で

お尚ヨホホお尚と二声三声

お尚驚きすぐ目をさます

聞けばヨホホ女の呼ぶ声がする

七つ八つから習うたお経

許しちやヨホホならぬと

手にじゅずかけてならぬ

ならぬとお経を唱え

○いよこ

(ア エイエイサツサ

エイサツサ)

ア東西やエイサイよこ踊りと

早よかかれ

(ア エイエイサツサ

エイサツサ)

ここで文句にかかるなら

伊予で松山たばこ山

たばこ山にて官区くわんくわり
官区くわんく停とまりのお千代と八兵衛
お千代の妹の名がお浜
お浜の病氣と申するは
へーもに瘡かさに猫癩にゃうらんで
三つの病氣のたたかいぞ
お浜が死んで今日七日
二人の親さん墓参り
後に残りしお千代と八兵衛
お千代は奥の間で真綿とり
八兵衛は玄関で三味げいこ
三味のけいこもさておいて
お千代お千代と呼びいだし
何か御用でござんすか
ほかなることではないお千代
四国西国たずねても
お千代のような器量はな
ものにたとえて言うなれば
ぼたんの花の咲きかけに
露を受けたる如くなり
一夜はお千代ねやお千代

第五章 芸 能

何を言わんす兄さんよ
私には夫がござんすえ
夜の夜中の丑うしの刻
裏のみかんの木の下で
上から下への白無垢しろむくが
それを殺してもらえたら
落ちるに落ちないこともない
そこで八兵衛は喜んで
その日の暮れを待ちかねる
先を申せばほど長い
ここでとめおく御免ごめんなれ
○つまたたき
東西南北とうざいなんぼくごめんなれ
つまたたき踊りにすぐかかる
国は讃州さんしゅうや金毘羅こんびらの
なかのごおりは象頭山ざうとうざん
小坂下り下り右手の
御参ごさんの前の花立に
枯れた竹には芽子めごが出る
枯れたしきびに花が咲く

参る下戸衆げとじゅうが申すには
どうで一夜のげじもある
お山のげじか内げじか
またはお家の災難か
手前よろしく暮せども
何の因果いんがか子がのうて
これより東の高松の
大黒屋とやうて名も高い
代々伝わる古ふるて屋の
二番息子にばんしよの名が正次まさじ
乳母うはの養子と貰われて
蝶ちょうよ花よと育てられ
育てられて十五まで
寺子屋通いをするうちに
石田屋お礼とばかりあい
お礼にもろたるちぎり文ふみ
茶屋の風呂場ふろばでつい落し
げんざい乳母うはに拾われて
正次正次と呼びつける
何か御用でござんすか
ほかの事ではない正次

石田屋通いをするそうな

石田屋子孫と申するは

人に言えない子孫なり

石田通いをやめんなく

乳母うばの養子は出て行けと

乳母うばの所は出てなりと

はなれまいぞえ正次さん

○ねずみのくせつ

棚のねずみのくせつを聞けば

アヨーオイセー ソーコセー

わたしは大黒様のお使いで

棚の上やら棚の下

暗い所で子をかやし

食わす物がないうえに

たんす おけ はちかじります

そうすりゃねこめに見つけられ

逃げよりやいたちにおわえられ

じごく落しのますこぶて

それほどわたしがにくいなら

十二の干支えとになぜ入れた

イヤコリヤコリヤ ヤートコセーノ

ヨイヤナー

○嫁入り

娘十八は嫁入り盛り

たんすや 長持 はさみ箱

揃えて持たせてやるからにゃ

二度とあとには戻るなよ

ととさん かかさん そりゃむりよ

云いわけするではないけれど

西が疊れば雨とやら

東が疊れば風とやら

千石積んだ舟でさえ

追風変れば出て戻る

○せんす

おしよのお庭でせんすを拾うた

せんすはめでたいわいと

足でけり上げて 手にとりて

開いて見たなら高松の

千両箱の重ね積み

めざしのお鶴が舞い遊ぶ

扇はめでたい末繁盛すえはんじょう

(四) 花取り踊り唄(柳井川本村)

柳井川土居のおもてを

流れる水は良い酒

住すまりたいは久主よ休場よ

まだ住すまりたいは柳井川

松木ご城下よ永野で目戸よ

五 万歳小唄

○豊年踊り

子とさえのさえのさ

年内 夫婦は 睦まじく

「また 仲良く」

暮すのが 福の神

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

丑とさえのさえのさ

牛こそ 農家の宝ぞや

「また 求めりや」

我が家の為となる

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

寅とさえのさえのさ

隣の宝を招くよに

第五章 芸 能

「また 我が家に」

宝を招かんせ

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

卯とさえのさえのさ

運づくものとは云うけれど

「また 稼ぐに」

おいつく 貧乏なし

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

辰とさえのさえのさ

やれ立つそれ立つ今も立つ

「また 国々」

まわりて 稼ぎ立つ

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

巳とさえのさえのさ

皆さん寄りて夜話しに

「また 今年は」

世がよて 米さかる

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

午とさえのさえのさ

うまうま浮世を暮すのは

「また 十七」

八から 二十まで

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

未とさえのさえのさ

末の難などき油断なく

「また 心に」

渡世を もたしやんせ

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

申まとさえのさえのさ

さるとは親にも孝行な

「また 男の」

子なら持たしやんせ

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

酉うとさえのさえのさ

やれとるまたとる今もとる

「また 伊勢宮いなみやの」

河原がわらで鯉こいを取る

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

戌いとさえのさえのさ

ぬくいところに奉公して

「また つとめりやあ」

我が身のためとなる

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

亥いとさえのさえのさ

いよいよ五穀ごこくが成就じゆうじゆして

「また これから」

世の中 豊ゆたかなる

やれ豊年かいな

「チョイト 豊年じゃい」

○才藏舞唄

徳若とくわかにや ご万歳は

三坂さんさかにかかる白雪は

とけて流れて重信むねのぶの

御手洗みたらい女郎ぢやうらうの化粧けしょうの水

まことに目出度めでたう

候さうらいけれど

徳若とくわかにや ご万歳は

伊予の松山名物名所

新立しんたてぐちの堀端ほりはたの

八ツ股やんぱ榎えのきがこれ名所

まことに目出度めでたう候さうらいけれど

徳若とくわかにや ご万歳は

正月吉日しんげつきちつの初夢はつゆめに

めでたい年の夢ゆめを見た

門かどに門松かどまつしめ飾かざりり

祝いわいの松まつのそでの下

鶴つると亀かめとが舞まい遊あそぶ

まことに目出度めでたう候さうらいけれど

○宮島心中

一つさえの 一つとのさ

器量きりやうよし自慢こゝろのお初はつさん

通とほいつめたが徳兵衛とくべゑさん

この馴染なじみようかいな

二つさえの 二つとのさ

文ふみでよ知らして忍しのび逢あい

出合す所は思案橋

心もあせるお初さん

この話そうかいな

三つさえの 三つとのさ

宮島育ちのお初さん

連れて渡るか二十日市

私しゃいずこの果までも

この行きまするわいな

四つとさえの 四つとのさ

四方山因果なわしが身を

まま母がかりのその中で

見つけられたる腹帯を

このどうしようかいな

五つさえの 五つとのさ

いろいろ気嫌もとの山

願かけて親の返事待つばかり

この待ちましようかいな

六つさえの 六つとのさ

無性矢鱈に親様が

二人仲おば引き分けて

たとえ宮島立つとも

この別れまいぞいな

七つとさえの 七つとのさ

泣く泣くお初は東町

長屋の門にて物案じ

泣いて明かすよな浜千鳥

このあわれさよな

八つとさえの 八つとのさ

刃や無常のはしがみよ

死ぬるよその日の装束は

恋に好んだ白どんす

この死にましようぞいな

九つとさえの 九つとのさ

この年月までも育てられ

親に御恩も送らずに

親にさきだつ不幸者

このどうしようかいな

十とさえの 十とのさ

とうとう来たかや徳兵衛さん

死ぬる所はここかいな

綾や錦で身を飾る

この行きたいわいな

○義経千本桜

一つといのさ 一つといのさ

人はよ士 木は松

千本桜と云い伝え

迷いやすぎが恋の道

義経公かいな

二つといのさ 二つといのさ

夫婦の仲もにこにこと

戦の門出のお杯

早や開陣と待ち受けて

広めようかいな

三つといのさ 三つといのさ

見染め逢染め思い染め

かほど由緒の大身を

我が君様と思ひ染め

身の果報かいな

四つといのさ 四つといのさ

義経公が大将で

屋島の浦の舟戦

平家はめいめい共々に
討死かいな一

五つといのさ 五つといのさ

いっぞや御恩のせつなさに
関の局がもの案じ

天皇様にもう一度

花咲かせたいわいな一

六つといのさ 六つといのさ

無理にやおさえてなでさすり

お里がつけた愛のすし

風味がよくて味わいな

良かりようかいなあ一

七つといのさ 七つといのさ

なんとまあきれいなよい殿ご
寿司屋のお里がほれらりよか

子は親様の義理もある

はずかしいわいな一

八つといのさ 八つといのさ

やさしき女子の寝入りばな
見れば枕が二つある

都のことも吾がことも

しのぼうかいな一

九つといのさ 九つといのさ

雲井に近き御方の
惟盛さまとはつゆしらず

思いこんだが恋の道

どうしようかいな一

十といのさ 十といのさ

とうとう源氏の梶原が
権太にほうびの陣羽織

惟盛さまにもう一度

花咲かせたいわいな一

○柱揃え

一本の柱には「二天が世界しよ」
治まる御代のしるしかや

二本の柱には「ここに笑たが大黒さん」

若えべす

三本の柱には「左近が右近じゃ」

花たちはなの しるしかや

四本の柱には「四天がまふくしよ」

内の悪魔をはらい出す

五本の柱には「五葉まします」

五葉の松

六本の柱には「六つの拍子もそろた」

千石舟の港入り

七本の柱には「七福神としよ」

裏は七浦七えべす

八本の柱には「八つ棟作りしよ」

八棟作りや黄金草

九本の柱には「九葉はさかずきしよ」

九葉のさかずきさずけられ

十本の柱には「寿じゃ 福寿じゃ」

萬々歳こそ目出度けれ

○お半長衛

やれ 一つとえ まだ一つとえ

一番名高い京の町

お半さんははるばる伊勢参り

こいつも笑いぐさ

やれ 二つとえ まだ二つとえ

二人が出会す坂の下

お前さんは帯屋の長衛さん

こいつも笑いぐさ

やれ 三つとえ まだ三つとえ

見れば信濃屋のお半かや

よい道連れじゃとお手をとる

こいつも笑いぐさ

やれ 四つとえ まだ四つとえ

宵の泊りは市兵衛屋

勾欄越えての奥座敷

こいつも笑いぐさ

やれ 五つとえ まだ五つとえ

色の始めに思い染め

ばらりと咲いた梅の花

こいつも笑いぐさ

やれ 六つとえ まだ六つとえ

無理に立つたが早京都

第五章 芸 能

とろ石御門や東門

こいつも笑いぐさ

やれ 七つとえ まだ七つとえ

名主は帯屋の長衛さん

軒をへだてて信濃屋へ

こいつも笑いぐさ

やれ 八つとえ まだ八つとえ

やりたいお半の留守のまに

油屋の幸次といれませて

こいつも笑いぐさ

やれ 九つとえ まだ九つとえ

この母さんはどうよくな

これも因縁約束と

この笑いぐさ

やれ 十とえ まだ十とえ

得心なされや長衛さん

ほかなる殿御はわしじゃない

こいつも笑いぐさ

○なぞづくし

やれ 一つとせえ

広い世間はどこまでも

なぞと人情のかけくらべ

かけて解くのがおもしろい

やれ 二つとせえ

風呂屋のけんかとかけてまして

上野の戦と解くわいな

ぬき身でさわぐじゃないかいな

やれ 三つとせえ

三つ子の夜ばいとかけまして

石重丸と解くわいな

ちちを深すじゃないかいな

やれ 四つとせえ

よごれたふんどしとかけてまして

無心の手紙と解くわいな

ヒヤヒヤ書くではないかいな

やれ 五つとせえ

いがんた材木とかけてまして

郵便さんと解くわいな

はしらにゃならんじゃないかいな

やれ 六つとせえ

無理な姑とかけてまして

七〇五

西洋文学と解くわいな

ようめにくいじやないかいな

やれ 七つとせえ

夏の夕立とかけてまして

雷さまと解くわいな

ふるなるひかるじやないかいな

やれ 八つとせえ

破れた障子とかけてまして

冬の鶯うぐいすと解くわいな

はるを待つではないかいな

やれ 九つとせえ

紺屋の娘とかけたなら

上手な将棋と解くわいな

つめてが黒いじやないかいな

やれ 十とせえ

豆腐屋の娘とかけたなら

日清戦争と解くわいな

からを攻めるせじやないかいな

第二節 獅子舞い

秋祭りといえは、獅子舞い、神輿みこしとともになくてはならないものとされていた。昔は秋祭りも盛大で、祭前まつりまえの秋の夜になると、獅子舞いを馴ならす太鼓の音が静かな山合いにこだましていたものである。

獅子舞いは、その昔中国から伝来し、もとは舞楽から出たものといわれている。後世において、神楽かぐらなどで、五穀ごこく豊稷ほうじくを祈願、悪魔払いとして行われるようになったといわれている。

我が村における獅子舞いは、松木・小村・西村に古くから受け継がれていて、郷土芸能として定着しており、村では、これらが無形文化財として指定している。

本村祭獅子ほんむらまつりじし (松木)

この獅子舞いは、明治三八年、当時の弘形村(美川村)に住んでいた、恵比須瀧・津田某の兩人より、松木の若い衆、梅井金五郎(昭和四〇年死亡)、大窪八蔵(昭和二年死亡)、相原音四郎(昭和三七年死亡)らが、祭りの娯楽として

伝習したのが始まりだといわれている。その後、大正末期には小坂卯太郎、小坂重弘によって、また昭和四〇年には、小坂幸雄をはじめ部落の若い者によって承継されている。

この獅子舞いの舞いぶりは、小太鼓と大太鼓に合わせて、獅子頭を前後二人が使って舞う。各演目ごとに、しぐさ、もの言いなどがあつて演技が行われる。本村獅子の演目は、三番叟・エチゴ・オヤジ・トテン・ドンツク・イキツカイ・三作・トントコ・山サガシ・忠臣蔵・狐・アコギ・富士山などと豊富である。

ここで、本村獅子の太鼓を少し聞いてみよう。

道行（演技のはじまり）

太鼓 ドンパラパン ドンパラパン ドンパラ ドンパラ ドンパラ スットコ ドン

パラ ドンパラパン

三番叟

大太鼓 シヤカシヤン シヤカシヤン シヤン シヤン シヤン

小太鼓 シヤカシヤン シヤン シヤン シヤカシヤン シヤン

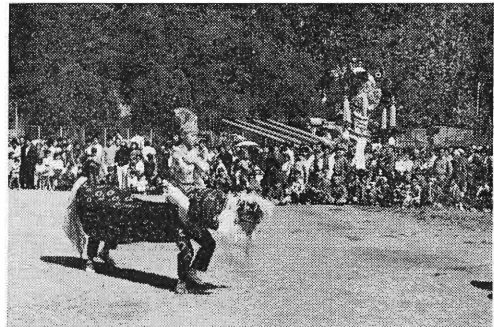
オヤジ

大太鼓 トコトンテン トンテンテン トントン

小太鼓 トコトンテン トンテントン チキチッチキ トンチキ チッチッチ

獅子おこしのことば

父 やーい三作、かく身をやつし、せっしょうするは立身の望み、向うの茂りに宿るはじじゅう、汝ひそかに追い出せよ。



本村祭獅子

三作 あいトトさん、獅子追い出すはやすけれど、もしトトさんのなんぎとなろう。
父 これが知れたら百年目、後かまわずさはよう。

おさらば、さらば。(西東に別れて行く)

三作が、獅子を打ちころがし、その上に乗り、トトさんてがらができました。

父 大けい、めじか撃とうと思うた、なんのこれしき、にわかよな、ハッと獅子を起し大回りして入る。

忠臣蔵

大太鼓 トントントン トントントン トンチキ トンチキ トンチンチキチッチ トコトントントン

小太鼓 トントコ トントコ トン トン

小村獅子(小村)

小村獅子は、明治三八年、当時の弘形村有枝(美川村)の上杉某より、小村部落の、長沼喜蔵(昭和四五年死亡)土居佐市(昭和四五年死亡)など、若い者が伝習したのが始まりである。当時、獅子頭をはじめ、多くの衣装などは、組内の有志、岡田清次郎などによって寄附されている。その後、高橋義一(昭和五七年死亡)、山本勘三郎らが継承した。現在は、その振興をはかるため、保存会を結成して、竹内義則・長沼元・山本朝男・山崎勝太郎などによって継承している。

小村獅子は、小太鼓と大太鼓に合せて獅子頭を前後二人が使って舞うものであり、各演技ごとに踊りなども行う。演目は、三番叟・片足アゲ・片オロシ・オヤジ・狐・オタフク・サル・カリウド・マゴ・イモホリなどあつて、いつの時代



小村獅子

も、のどかな秋祭り、神社や、部落の広場で行われる演技は人々の心をなごませた。

この伝統をいつまでも伝えるよう、村では無形文化財に指定してその振興をはかっている。

西村獅子（西村）

明治の末期から伝えられているといい、大正年代までは久主地域では、中田・窪田・岩川にも獅子舞いが行われていたというが、時代の移り変りに伴って、いつの間にかなくなり、西村獅子だけが永く伝承されてきた。

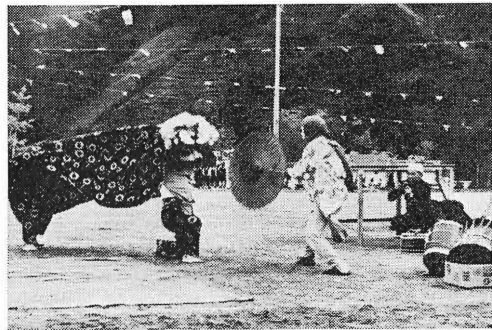
現在は保存会が結成されて、長谷恵男・西野今朝幸・田内一敏・西野剛二などによって継承されており、村ではこれを後世に伝え残して行くよう無形文化財に指定してその振興をはかっている。

西村獅子の演目は、笹食ささくい・男獅子・ていすい・狐などで、勇壮なところの多い獅子舞いである。

第三節 踊り

一 盆踊り

盆踊りは、古く江戸時代から伝えられてきたものである。もともと盆に招かれたる先祖の霊を慰め、またこれを送



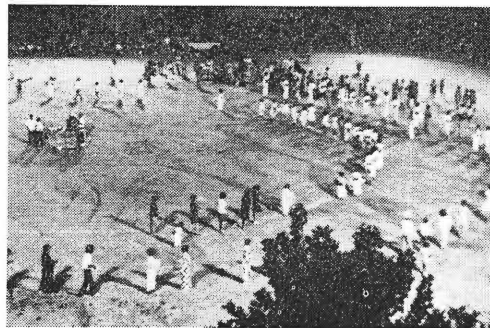
西村獅子

る踊りと考えられて、それぞれ寺の境内や、村の広場などで盆の一六日へかけて、老若男女ともに大勢が集って踊られる。盆踊りは、供養踊りとして素朴であり、一面哀愁を感じさせるものも多かったようである。

踊りは、手踊りをはじめ、ボンデンヤ、センス、手拭などを持って踊るもの、またはなやかな衣装を揃えているところもあった。踊り歌もいろいろあって、これらが拍子をとるもの、また首頭をとるものによって楽しく踊られ、娯楽に乏しいこの時代の大きな楽しみであった。仏の供養が目的で始まったこの盆踊りも、時代の流れに沿って、いつしか若い男女のまじわりの場となり、明治、大正の時代にあつては、風俗を乱すという理由により、きびしい取締りが行われた。しかしそのなかにおいても、あちこちで受け継がれて、昭和の初期までは盛んに踊られた。

最近では、都会、田舎を問わず盆踊りは、人々のふれ合いの場として見直されてきている。盆は、我が村でもふる里への墓参などで帰って来る人々たちによって、一番活気づく時である。毎年の盆踊り大会を、一層意義あるものになければならない。

今郷土に残されている踊りは、祖先があらゆる時代に感情をこめて踊り伝えてきたものであり、ほとんど人々から忘れられようとしているが、一つでも多く後世に伝えてゆきたいものである。



盆 踊 り (柳谷中学校校庭)

一一 名荷踊り

名荷踊りは、明治の初期に阿波の国(徳島)から、島之助という、田掘りを職とする人が名荷の舟戸の奥へ住んでいて、虫除け、農年踊りと称して、若い者に教えたのが始まりだといわれている。人々は島之助踊りと呼んでいた。

当時の若い男女は、この踊りを習うことに熱中した。しかし、教える島之助とて働かねば食えない。若い男女は、習うためには、仕事の手間がえで田掘りもする、島之助が作っていた大豆が、早く取り入れないとはいじいてしまうと大豆引きも手伝ったり、踊りの先生の面倒をみながら習ったものだという。

舟戸の奥には、練習をする踊り場も造られて、昼間でも人目をはばかりながら、練習する太鼓の音がきこえたといわれている。名荷踊りは、明治、大正、昭和の時代へと、村里に娯楽の少ないこの時代、唯一つの楽しみとして、人々の心をなごませた。踊りは、歌が中心であって、いつの時代も歌い手がこの踊りを、ひき回してきたようであり、たくさんの歌詞を全部まる覚えして歌っていた。歌詞を書いたものは何もない、承継者はこれを聞き覚えというだけで、長い間に、ほとんど忘れられ残り少なくなっている(第一節民謡参照)。

名荷踊りを習いはじめた人たちは、天保・安政・万延と古い生れのの人たちであるが、踊りの全盛時代を通じて、歌い手としてまた踊り子として、この踊りを盛り上げてきた主な人で、わかっている人たちを記しておく。



名荷踊り

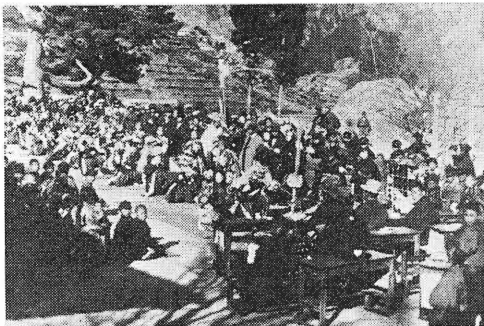
小崎伊勢太(本名は処平であるが、大変芸人であり、伊勢参りからはじめて、伊勢おどりも踊ったのであろうか、伊勢太と呼ばれるようになったという。大正七年死亡)・山本禮太郎(昭和一〇年死亡)・古川丑太郎(昭和九年死亡)・大上文蔵(昭和二八年死亡)・小崎シナ(昭和三八年死亡)・藤岡テル(本名はマン。昭和三年死亡)・大上ハナヨ(昭和四八年死亡)・大崎ケサミ(昭和三九年死亡)

承継者は、明治三五年ごろからは、大上文蔵、大正九年ごろから山本郡四郎(昭和三三年死亡)、昭和八年ごろから、小崎杉夫(昭和五七年死亡)・大上今朝四郎(昭和五四年死亡)、昭和三〇年ごろから、大上高千代・村上栄喜・村上勲らによって保存会を設け、その承継につとめている。

村では、この永い伝統のある名荷踊りを、後世に伝えるため、無形文化財にしてその振興をはかっている。

三 花取り踊り

花取り踊りは、明治から大正の時代にかけて、村内でも各部落に、それぞれあって盛んに踊られたようであるが、いつの間にか消えてしまって、現在では全くその名残りを留めているものがなく、歌詞も人々から忘れ去られてしまった。花取り踊りは、鉦や太鼓をたたいて踊る供養踊りで、お寺や、お宮の庭で踊られたようである(柳井川本村の花踊りで唄われていて残っている一節を、第一節民謡に記す)。



花とり踊り、はなやかなりしころ(中津小学校校庭)

第四節 万 歳

上浮穴郡に万歳が伝わってきたのは、明治時代の初期、松山近郊に万歳が始まってしばらくしてからといわれる。松山藩主久松定行（真常院）が在世中（一六三九—一六五六）に、上方から万歳太夫を招き、年の初めを祝って松山で演じさせたのが始まりといわれる。すなわち今から三〇〇年余り前のことである。初めは、柱揃え・三番叟^{さんばそう}など、めでたいもの尽しが唄い舞われていたが、やがて地方芸能に発展した。

その後文化・文政時代（一八〇四—一八三〇）になって、村の祭礼などでも興行されるようになり、舞の種目や内容も多様になって、人気を博するようになった。

温泉郡道後溝辺村^{みそのべ}の溝辺万歳、これが伊予万歳の発祥であると伝えられている。やがてこの万歳が、郡内では、当時の弘形村（美川村）大川、父二峰村（久万町）父野川に伝えられ、久万山万歳となって郡内に普及した。

我が村でも立野万歳・永野万歳が誕生し、一座を組んで農閑期などには村内の巡業などをしていた。また中久保万歳も盛んで遅くまで伝えられていた。

万歳舞いの鳴物は三味線、小太鼓・拍子木^{ひょうしぎ}、踊り子は五、六名、そしてその中心的役者は、次郎松・才藏である。

特に次郎松は、一座の道化役でその身ぶりや、口上がこっけいで人気を呼んだ。次郎松、才藏の掛合いは、三河万歳の流れであるが、小唄・踊りは、多分に伊予万歳独特のものである。歌詞にしても、関西から岡山、広島（備前・安芸）、四国地方の物語りを取り入れたものである。踊り子はすべて男子縞の着物の着流し、ただ一人の女形は、頭から黒のベールを被り口隠し^{くかく}をする。万歳はなやかな時代にあつては、どこの部落でも、それぞれ太鼓や三味線、踊り

の名人が居て、祝いごとなどでは必ず踊られそれはにぎやかなものであった。この万歳も太平洋戦争後は、歌詞も踊りも次第に人々から忘れられようとしているが、現在では、立野万歳だけが承継されて昔の名残りを留めている。

一 立野万歳

立野万歳は、明治三〇年ごろ、当時の父二峰村(久万町)二名にみょうの職人で、作太という人が、村々を「白うすの目めぎり」の仕事で回っていたとき、立野の若者の山本七五三太郎(昭和二五年死亡)、西森勝(昭和三〇年死亡)・山本新太郎(昭和三七年死亡)・松岡宮重(昭和二五年死亡)らが習って始めたものである。この人たちの器用さと、努力によって生まれた立野万歳は名声を博し、一座を組んで、明治、大正、昭和へと、娯楽のない時代の人々を楽ませたものである。昭和三年、松岡寛が主となって承継したが、太平洋戦争によって中断したけれども、若者の努力によって戦後復活し、現在に及んでいる(立野万歳の踊りの歌詞は民謡の万歳唄参照)。

村では、この立野万歳がいつまでも承継されるよう、無形文化財に指定して、その振興をはかっている。



立野万歳

第六章 伝承と俗信

第一節 伝説

伝説は、われわれの先人がつくったものであり、無形の文化遺産である。そのほとんどのものが、誰がつくったともなく、またいつからともなく、語り伝えられているものである。

伝説は、山、川、滝、淵などの自然や、神社、寺、人物などの歴史に、その神秘性や偉大さ、信仰や思惑が結びつき、さまざまな話しが生れているものである。

我が村の伝説は、自然に関するものでは、草木よりも、滝や淵に関するものが多く、これに関連して、八金の龍王をはじめ、龍神、大蛇に関するものが多い。

歴史的な伝説では、史実に乏しいものとして伝わっているものがほとんどであり、その内容は民話的なものが多い。これら歴史伝説のなかで、平家の落人に関連するものが多いのも特徴といえよう。また人物的なものでは、稲村弾正、兵衛の太夫にまつわるものが非常に多いようである。

我が村に伝わる多くの伝説の中から、その一部を述べてみる。

一 自然伝説

井野早太の大杉

久主大宮八幡神社の境内に、樹齡千年もたったかと思われるほどの、大きな杉の木がある。その昔、土岐頼政の家臣、井野早太が植えた木であるといわれている。井野早太は、都の戦で敗れ自刃した、主君頼政の位牌を、久主の大寂寺へ納めた。その時主君頼政の冥福を、大宮八幡宮に祈って植えたものであり、かつては、回り一〇メートル余り、高さ四二メートルもある巨大なものであった。地上一メートルくらいの高さから、二大支幹になっていたが、昭和一八年の火災で一方は焼けてしまった。

早虎神社の大杉

柳井川松木に鎮座する、早虎神社の境内に、樹齡五〇〇年余りと思われる大杉が並んでいる。その昔、平家の落人が、お早と、お虎という二人の娘を連れて、立野の岩穴で住んでいたが、ある日、お早とお虎の二人が死んでしまった。平家の落人は大変悲しんで、二人を大窪谷のふもとの方へ祀って早虎神社とした。

お早とお虎が現われて、お神楽を舞っていると、鬼が出て来て、「松木へ上ってくれ」と頼んだ。するとお早とお虎は、「松の木はいけん、杉の木を植えたら上ってやる」といった。それで杉の木が植えられて、早虎神社は、いまフルミヤと呼ばれているところから松木へ上って行ったといわれている。この大杉は、その時のものであると伝えられている。

弾正が嶽

稲村の先場部落に、河野弾正の前膳のお堂があり、そのすぐそばには、弾正の母と家来の墓と称する二つの塚がある。また、そこから急な坂道を一キロほど上ると、神宮寺の跡に祠がある。お堂の中には、高さ四〇センチほどの、不動明王が一体安置されている。昔は、弓や刀、その他の武器があり、また弾正が飯をたい

法印さんを権現滝から谷底へ押しこかした。それから七日七晩、その谷で鉦かねが鳴り続けた。それから権現滝の滝つぼ



権現滝

百ヶ市の在所をすぎたから、奈良藪の方へ川向いの山を見ながら行くと、大きな滝があり、滝から落ちる水、青葉、紅葉、また樹水など、四季の変化を美しく見せる滝、これが権現滝である。

昔、法印さんがどこからかやって来た、どうしたことから村人は、「もうちよっと向こうへ行けば在所がある」と言って連れて行き、

ケ原の合戦に敗れて、この地に身を隠し、生涯を送ったのだと伝えられている。



弾正ヶ嶽（国道33号線より稲村を望む）

ていたという、足の長さが六寸の金の鍋があったが、いつの間にかなくなってしまうという。

古くから、旧暦の二月八日と八月八日の二回、部落の人々によって、お祭りが行われている。日清、日露の戦争の時は、戦の神として多くの兵士が参拝していたという。そのすぐ横に岩のほら穴がみられ、弾正の住い跡とよく間違えられるのであるが、この地点から、険しい谷合いを二〇〇メートルほど登ると弾正が嶽である。東から西に抜ける穴があり、そこが弾正が住んでいたという鍾乳洞である。国道三三号線、落出から稲村を見ればこの嶽たけがよく見えている。

南北朝のころ、河野弾正、土居備中守らは、宮方に属して戦い、桑村郡千町

には、片目の魚が住んでいたという。

赤 滝

西谷の入口の部落である郷角の向い山に、赤さびの現われている大きな滝が見られる。この滝を人々は、赤滝と呼んでいる。昔、昔いつの頃か郷角に、お金をたくさん持っているお婆さんがいて、その金を隠すために、お婆さんは、滝に下っていた大きいかずらにつかまって滝の岩の中へ入れた。この金を、人が盗みに行ったら困ると思って、お婆さんは、このかずらを切って落してしまった。ところが、自分もその金をとりに行くことができなくなって、お婆さんは気が狂ったようになり、滝に向かって、「金よ戻れよ、金よ戻れよ」と毎日呼びつづけて、とうとう滝に飛び込んで死んでしまったという。この隠されたお金のさびで赤くなり、赤滝と呼ばれるようになったといわれている。

蛇が石

本谷の上の方に、大きな石があり、人々はこの石を、仕事の往き返りの休み場にしていた。その昔、この石に大蛇が七巻半巻いているのを、本谷に住んでいた弓の名人、兵衛の太夫が、郷角から、弓で射ち落したという。その時、大蛇から出た血のためか、いまでもこの石は、赤味を帯びており、蛇が石と呼ばれている。

イナキ石

中津旭にある。縦一メートル、横一メートルくらいの石で、この石には、昔、弘法大師が疲れてここを通りかけ、頑張らなくてはいけない、どのくらい力が残っているかためそうと、力を入れたため、下駄の跡がつき、そのまま残っており、イナキ石と人々は呼ぶようになったという。

八釜の龍王様

その昔、昼なお暗き幽谷深淵の秘境、無気味な渦を巻いて流れる八釜の底深いところに、大蛇が住んでいたという。おとなしい大蛇で、人々に害を加えるようなことは、全くなかったという。

この大蛇が、ここに住んでいるおかげで、どんな日照りが続いても、この地方では水が枯れることもなく、人々は安心し、ほんとうにありがたく思っていた。しかしこの大蛇は、クズヅルと金物が大嫌いだった。このことは人々も

よく知っていて、この附近で金物類を使うようなことは、決してしなかった。ところがどうしたことか、ある日突然この淵に、クズヅルの巻きついた鎌が流れこんできた。さあ大変、この鎌を見た大蛇は、驚くと同時に腹を立てて怒った。大蛇は、恐しいうなり声をあげ、水面に高く首をつき出した。目は真赤に燃え、大きな口からは炎を吐き、一天にわかにかき曇って、雷鳴とどろきあらしを呼んだ。激しい大粒の雨、風はうなりをたててほえ狂った。あらしはいく日たってもやもうとせず、八釜一帯は、ついに大洪水となって、人々は大いに驚き悲しんだ。この時大蛇は、狂ったように大きな尾で鎌を激しく打った。すると、鎌は八つに折れて、四方に飛び散り、そのまま見えなくなった。それと同時に、いままで続いていた激しいあらしは治まり、八釜は、再びもとの静けさに戻ったという。

人々は、お宮を作り、この大蛇を龍神として祭り、八釜の龍王様と呼んだ。龍王様は、女の神様で、大野ヶ原の小松ヶ池から、いつの間にか移り住んだともいわれている。龍は、山で千年、川で千年、海で千年の修業を終って、昇天するという。龍王様の縁日は、昔から二八日で、縁日には、近郷の人々が集い、夏の日照りには、「お水もろう」といい、雨乞いの祈願をして、そのおかげを受けていたという。この雨乞いは、近代になってからも続けられていて、龍を見たという人、またその気配を感じ腰を抜かさんばかりに驚いたという人が多くいて、八釜の龍王様にまつわる神秘は、いまなお信じられているものもある。

竜の川

川之内の前の仁淀川を竜の川と呼んでいる。そこには、松の木の生えている大きな岩がある。昔、その岩が鉄砲岩と呼ばれている。撃たれた大蛇の腹は、一、三メートルもさけて、蛇の子が出てきたという。大蛇の血は流れ、それから、七日七夜、川は血の海となり荒れ狂ったという。人々は大蛇を龍神、水神様として祀った。竜の川、昔は竜の子川と呼ばれていたが、これがなまって竜の川となったという。



龍宮淵(小村)



竜の川(川之内)

龍宮淵

道路のまったく発達しなかったその昔、

西谷の古味方面で切り出した木材は、黒川の流れを利用して、落出の方に運ばれていた。そのために人々は大変助かっていた。ところが、ある日突然に木材が一本も落出まで着かなくなり、いくらたっても木材は流れてこなくなった。どこかで全部なくなってしまった。

村の人たちは、不思議に思い、木材のゆくえを確かめるために、流れに沿って川を下ってみた。するとどうか、

古味から流れ出した木材は、小村が見えるところまではすいすいとくるのに、そこにある大きな滝の下にある深い淵に全部すいこまれている。みんなびっくりしてしまった。「これは大蛇がいて飲みこんでしまうのだ」、「いや何でもすくい主がいてじゃましているのだ」「川底に大きな穴があり、それが地の底へつづいているのだ」とか、いろいろな意見が出た。「不思議だ、不思議だ」ばかりくり返してただため息をついているだけだった。

この時、郷角の部落に住んでいたひとりの大工が、たまりかねて、「ひとつ、わしがその淵をさぐってやろう」と思った。そうして材料の吸いこまれている淵にザンプと飛びこんだ。

どのくらいたったのだろうか、ふと気がつくと、大工はりっぱな御殿のすばらしいふとんの中に、寝かされていた。話しに聞いた龍宮とそっくりである。美しい魚がまわりを樂しそうに泳ぎまわり、ガラスのように透明な御殿は七色にまばゆく光っていた。そのうち美しい乙姫様もでて来て、大工は夢を見ているような気持になってしまった。すばらしいもてなしを受けた大工は、ついに何日も何日もすごしてしまった。ある日のこと、ふと建物の向うを見るとたくさんの木材が沈んでいるのに気がついた。大工は急に郷角の部落のことを思い出した。乙姫様に頼んで、今まで沈められていた木材を全部もらって大工は郷角へ帰って来た。郷角はすっかり変っていて、大工の知っている人も、大工を知っている人もひとりもいなかった。大工に会った人はみな、大工をみて何かひそひそとささやくばかりだった。大工の家のあったところは、大きな竹やぶに変わり、家もなくなってしまうていた。

大工は、しかたなく乙姫様にもらって帰った木材でお宮を建てた。郷角に立派なお宮が建ったので、村人たちもだいぶん集まってきた。しかし大工の姿はどこにも見えなかった。今郷角のところにあるお宮のはじまりは、この大工の造ったお宮だということである。

湯ゆの成なり

本谷の上の方に湯の成という部落がある。昔、そこに住んでいた、おばあさんの所へ、ある日、弘法大師さんが通りかかった。おばあさんは、弘法大師さんとは知らなかったけれども、親切にしてあげたので、弘法大師は、大変よろこばれて、「お礼に湯をわかつて進せよう。」といって、持っていた杖を地に立てたら、不思議にもそこから湯がふき出した。それから湯の成へは、人がどんどん集まって来るようになったので、意地の悪いおばあさんがねたんで、ある日、馬のふんを湯の中へ投げ込むと、それから湯が出なくなってしまうという。

お大師穴

昔、炭焼きの始まりのころ、炭窯すすがまをついて木を中に入れて、火をつけようとしたが、どうしても中へ火がつかない、炭焼きは困って思案していた。そこへお大師さんが通りかかって、炭窯を眺めていたが、

しばらくして、「炭窯のすみに、穴をあけてみよ」といわれて立去った。炭焼きは、不思議に思いながらも、言われたとおり穴をあけると、すぐに火がついて、炭がよく焼けるようになった。空気を調節するこの穴を、その後、お大師と呼ぶようになった。

お大師さんとムカデ

お大師さんが、ムカデがあまりきれいなので、手にのせているとかみついた。それで、お大師さんは、一日にムカデを七匹殺すと、神様に一回お参りしたのと同じくらい御利益ゴリやくがある
と人々におっしゃられた。お大師さんは、かみついたムカデにお茶をかけた。それからムカデにお茶をかけると死ぬといわれ、そのお茶を「お大師茶」という。

一一 歴史伝説

トキドと逆さわらじ

昔、安徳天皇が土佐の都へ落ちのびられるため久主を通り、そのとき食事をされた場所がいまの旭のトキドであり、食事をしたので、トキドと呼ぶようになったという。また休場では、敵の追手をのがれるために、わらじを前後反対向きにはいて歩いたと伝えられている。

モリモリダ

休場のモリモリダという山は、源平の古戦場で死んだ平氏の塚になっていて、鎧よろいや冑かぶとが埋めてあるのだと伝えられている。また休場には約七〇〇の古い墓があるという。

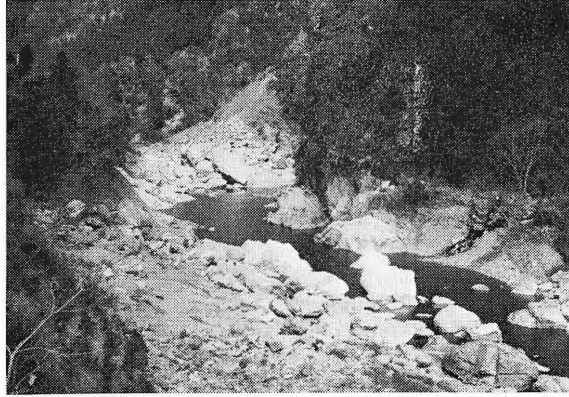
塩売りさん

小黒川はむかし平家の落人が逃れて来た地という。そこへ源氏の追手が、塩売りに変装してやって来たが、結局、正体を見破られて、後から切りつけられ殺されたそうである。そこにある古いお墓を、源氏の追手のお墓として、いまもなお土地の人々は、塩売りさんと呼んでいる。

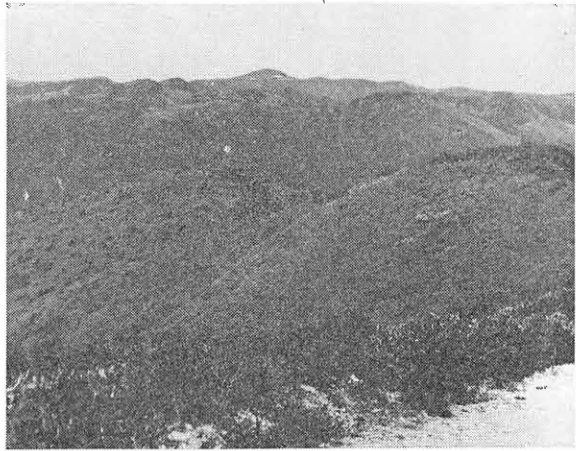
稲葉弾正と
兵衛の太夫

中津稲村の山中に住む稲葉弾正は、実に立派な弓の名人であった。猪も熊も、すべてのけものがいっぺんで射殺された。村人たちは、弾正こそ日本一の弓の名人だろうとうわさし合っていた。ところが、西谷の山中に住む兵衛の太夫もまた弓の名人で、村の人たちは、兵衛の太夫こそ、日本一の名人だと自慢していた。この二つの村の人たちが集ると、必ずと言っていいほど、自分の方を日本一だといいはり、ついには大げんかになるという始末だった。稲葉弾正も、兵衛の太夫もそんな人々のうわさなど、まったく気にかげず、毎日山で、弓の腕をみがき、大すきな狩りをしては、楽しく暮していた。

矢 淵（落出）



しかし、あまり人々の口がうるさいので、いつとはなしに二人とも、相手の男はどんな男だろう。どんなに弓がうまいのだろうか、たしかめてみたくなった。稲葉弾正は、ある日こっそり山を登りはじめて、とうとう西谷の山、笠取山が望める中津明神山（二五四メートル）の頂上に立っていた。兵衛の太夫もまた同じ日に、どんどん山を登り、とうとう笠取山（二五六メートル）の頂上に立って、はるか明神山を望んだ。二つの村の東西に相對する大きな山と山、その頂きに立った二人の勇者、向い合った二人の目からは、はげしい火花がとびかった。どちらが言い出したともなく、あすの朝、日の出を合図に弓の腕くらべをしようとする約束してわかれた。朝が来た。身仕度をした二人は、明神山と笠取山の頂上に立って、互に相手の心臓をねらい合って弓を引きしぼった。美しい、大きい真赤な太陽が二人をさした。同時に「ヤッ」という気合が二人の



明神山頂（1541m）より笠取山（1562m）を望む

口から発せられ、矢がはなたれた。矢はうなりをあげて、相手の胸をめぐけてとんでいった。名人の二人、ねらいがあまりにも正確であったため、二本の矢は、二人の中間で、ぶつかり合ってしまった。激しい火花を散らした二本の矢は、そのまま、下を流れる仁淀川へ落ちていった。

空を仰ぎ、笠取山と明神山のふもとで、かたずをのんで見守っていた村人たちは、思わず、どよめきの声をあげ、二人とも、いずれおとらぬ立派な弓の名人であると、ほめたたえた。それから二本の矢が落ちこんだ淵を矢淵と呼ぶようになったという。矢淵は、落出の部落はずれ、国道三三三号線沿いの仁淀川にあって、真黒く神秘的な水をたたえた大きい淵である。

鉢窪の大蛇退治

昔、鉢の山の中に、お花が池と呼ばれる大きな池があつて、その池には大蛇がすみそのほとりを

通る旅人や、村人を襲うので大変恐れられ、人々は困っていた。そのころ、峠を一つ越えた稲村の山中には南朝の落武者、河野弾正をはじめ、土居備中守らの武将が身を隠して住んでいた。これを聞いた武将たちは村人のため、大蛇を退治してやろうということになり、それぞれよろいかぶとを身につけて、池の回りに集まった。京都から七人の法印を迎えてきて、大蛇が現われるよう祈禱をはじめたが、法印は次々とたおれてしまった。ところがその時、一天にわかにかき曇って、雷鳴とともに、池の面が大きくゆれ始めたかと思うと、体長五〇メートルほどもある大蛇が、水

面高く現われ、怒り狂って勇士たちをめぐがけ、襲いかかっていた。勇士たちはいっせいに矢を放ち、刀で切りつけた。いきおいあまって弾正のかぶっていた、金兜の鉢がちぎれて池にとんだ。勇士たちは、ながい奮戦で遂に大蛇を退治した。それ以後この地は、人々が安心して暮せるようになり、村人たちは、大蛇を退治してくれた一人の名將勇士の恩に感謝して、ながくこの地にとどまってもらい、死後はそれぞれ祠を建てて祭り、天正一八（一五九〇）年に、それぞれの社を合わせて祀り九社神社と呼ぶようになり現在に及んでいる。

勇士たちの奮戦で金兜の鉢が落ちた所を鉢窪と呼び、この里を鉢と名付けられたという。

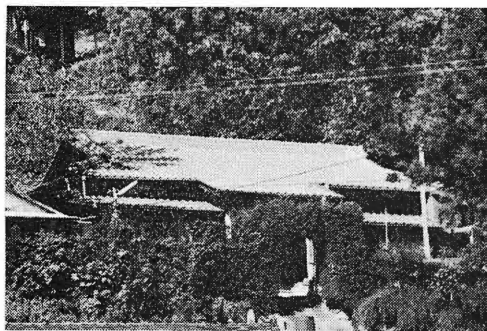
勇士の一人、土居備中守は、その後鉢に住み村人のためにつくしたので、村人からは氏康様とあがめられてきた。

備中守義満の墓は、鉢の上場部落うばたかの民家の庭先にある。石碑の正面には「備中守義満」、側面には「庚辰文政三年二月八日」とある。

また、鉢窪は、上場部落から西の方向、小谷を一つ越えた尾根にあるが、かやが生い茂り一滴の水さえない空池が、昔の名残りを止めている。その中ほどに、石を積んだ小さい塚らしいものが見られるが、これが大蛇を埋めたところで、蛇じの墓と呼ばれている。

仁平のころ（一一五一―五三）朝臣頼政の母は、伊予の浮穴四郎為世の孫、河野氏長者親孝の庶大寂寺と頼政の母

兄、寺町判官宗綱の女で源仲政の妻となり、頼政を生んだと伝えられている。母は常に我が子で頼政が成長して、天下無双の弓取りとなるよう、朝な夕な神仏に祈った。ことに頼政の母は教養深く、歌の道にも秀でていたといわれている。頼政が、々昇るべき道もなければ木の下に、椎いを給いて世を渡るかな々と詠進し、感銘されて三位昇殿が許されるようになったという。この母あつての栄進であった。頼政は、浮穴郡の里分、山分とも領地を給わり、土佐の国への押えとして、久栖（久志）に城を築き館やかたを構え、城代として、土岐・由井の二氏に母を護ら



大寂寺(窪田)

せて伊予の国に帰し、久栖の館に住まわせていた。そのころ母親は、二籠ふたごの奥にある赤蔵ガ池の辺りに自生する矢竹を家来に取らせて、この竹で矢を作り、手柄をたてるようにと、毎年数万本を都の頼政へ送っていた。また毎日赤蔵ガ池に行つて水ごりを取り願をかけて、源家の再興と、我が子の立身出世を祈っていた。そのあまり、遂には乱心の様子となつて、久栖の館には帰らぬようになり、池のほとりに、わずか雨露をしのぐほどの、小屋を作らせ、頼政の領地に鎮座する、四十余社の諸神にどうか加護を垂れ給えと、一心不乱に祈るその挙動は、全く鬼神のようであり、そばに居る者は恐しくなつて近寄る者もなくなつた。ところが不思議に、この池が急に鳴動を始め、池の中から黒煙がもうもろと上り、帯筋を引いたように京の都へ通じた。一方都ではそのころ毎夜怪鳥が、御所附近に出没し、京人をなやませていた。鳴声は鶴つるの様で、「ヒョーヒョー」と無気味であり、人々は非常に恐れおののいた。頼政は、勅命を奉じて、弓術がま墓目の法を修業して漸く怪鳥を射殺した。この時、伊予の国から、頼政のもとへ母の死去が知らされた。怪鳥を射殺したのと同日同刻なので、非常に不審をいだいた。怪鳥は、頭は猿、胴は虎、四足があり、羽があつて、尾は蛇とこの世にまたと類のないものであつた。この怪鳥は、我が子に手柄を立てさせるために、母親がこのように変化して矢にあたり死んだもので、母親の死去により、池の鳴動もやみもとの静けさにかへつたという。

赤蔵ガ池に伝わる、子を思う母親のまことにあわれであり、また美しい伝説である。

頼政はこの功績によつて、さらに土佐の国の一部の領地を加増され、ますます文武両道にすぐれた武士として忠誠

を励んだ。頼政は、平の清盛の横暴が日々加わるを見て、後白河法皇の第二皇子、以仁王を奉じて、兵を挙げ、諸国の源氏に平氏討伐の王の令旨を伝えた。しかし、宇治川の戦に敗れて、以仁王は薨じ、頼政もまた力尽き、埋れ木の花咲く時もなかりしに、身のなる果ぞあわれなりける」と辞世の歌を残して自刃した。名将頼政七六歳の最期であった。しかし、王をはじめ、頼政父子の首級をあげた者がないために、いろいろな風説が伝えられ、王と一緒に吉野に逃れたともいい、あるいは、頼政の子仲綱が奉じて、奥州へ、走ったともいわれている。頼政の墓もまた東西各所に散在している。この地の伝えによると、家臣、井野早太が主君頼政の位牌を奉じて、久栖に潜行して、大寂寺に安置したといわれている。この位牌には表に、「大寂寺殿土岐清源公大居士」とあり、裏には、「治承四年四月五日」とあったという。

大寂寺は、治承四（一一八〇）年頼政が、久栖の館跡に、母の菩提所として創建した寺といわれており、今の中津小学校の地にあったが、昭和三年の大火で焼け、学校のすぐ上に新しく再建されたものであるが、その時に頼政の位牌や遺品も焼失した。寺の西方には、頼政の墓所があり、ここを御所と呼んでいる。また、忠臣井野早太の墓地と呼ばれるところが最近まであったという。

大正八年一月、中津村在郷軍人会は、武士道をたかめるために、寺の庭に「大寂寺殿従三位土岐頼政公碑」と題する記念碑を建立している。

久栖のはじまり

久主の地名の起りを問えば、古人は、「久栖は樟、小宮に福木、前の小川は深こうござる」と、このように歌っていたという。久主は、昔は久栖だったが、いつの時代から変わったものである。

この歌の、「久栖は樟」とは、川ノ内の佐賀宮に、昔、樟の大木があつて、その地を久栖と呼んだ。「小宮に福木」とは、樟の大木の尊称である。「前の小川は深こうござる」とは、川ノ内の前の龍の川を指したもので、昔は水量が多



佐賀宮の森

く豊かな流れであり、その深さは三丈（九メートル余り）以上もあったといわれている。

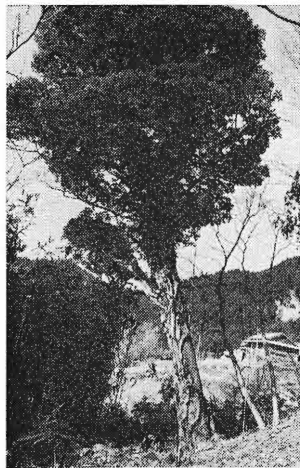
久栖の開けはじめは、川ノ内といわれ、その開祖は、佐賀家の大祖先で、現在の佐賀宮には、その祖先を祀り、佐賀大明神と称号したものであると伝えられている。

関奥の起り

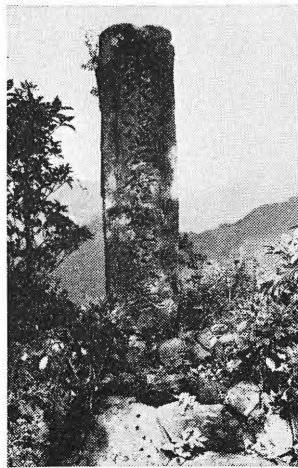
昔は、西谷の古味組（古味・萱行・中畑）、高野組（高野・猪伏・中久保・横野）をふつう両組と呼び、これを総称して古味と称し、関奥と呼ばれていた。関奥の起り。その昔、まだ各部落の境もはっきりきまっていなかったころのこと、古味と名荷の境をきめるといふことになって、その方法が話し合わせ、結局、夜明けの一番鶏を合図に、名荷方は牛で、古味方は馬で同時に出発し、出会った所を境とすることに決った。

さあ、いよいよ当日になって、古味方は、馬だと思つて油断したのか、ぐすり寝すぎてしまった。名荷方は、一番鶏が鳴くのを待ちかねて牛を追いたて、もう滝野の入口までやって来た。それでは困ると古味方は、名荷方を現在のせぎと呼ばれているところまでせぎ返した。そうしてその地点を境と決めてそこに関を設け、それから奥を関奥と呼ぶようになったと伝えられている。

この説のほかにもう一説あり、昔、古味方面は、大洪水によって、入口がせかれ、現在の川崎神社の高さくらいまで埋まってしまったことがあり、せぎ奥と呼ばれるようになったともいう。



猪伏のシキビ



鈴木源左衛門重幸の墓

本村組の開祖

立野の開祖は、相原佐州左門守だといわれている。

大窪谷の開祖は、鈴木源左衛門重幸だといわれ、紀井熊野の出身で、平清盛の家来だったという。およそ三〇〇年余り前、大阪石山城の戦に敗れてこの地に住みついたといわれ、後から尋ねて来た、北新左衛門ほか八人にも土地を分けてあたえたという。六人地、八人地と呼ばれ残っていたという。大窪谷、鈴木家の大先祖であつて、墓地もあり、石碑が建っている。その系図は七〇年余り前に山崩れにあつてその時なくなったという。

松木の開祖は、中平七左右衛門といわれ、およそ三〇〇年余り前、松木の大地に住み、二代で絶えたという。ある年、芝居を催した時、芝居者に手抜きをしたといつて論争となり勝つたけれども、芝居の三番叟をサカサマに踏まれたので子孫が絶えたと伝えられている。

猪 伏

猪伏の部落に樹齢三〇〇年くらいと思われる大きいハナシバ(シキビ)の木が立っている。いつころ誰によつて植えられたのであろうか、猪伏の昔を物語っているようでもある。その附近には古い墓があり、猪伏の大祖先に違いないだろう。猪伏は、平家の子孫なりと伝えられてきた。しかし、さだかなものはないけれども、猪伏の人々は自らもそう信じているのではないだろうか、そう思つてみると昔から、猪伏の人は、風

ぼう態度など、どこかにそんな風を持たせるところもあると感じている人もまた多かつたようである。また猪伏では、昔から、「蓑」を編むことを伝えていて、それは、京都奥地産のものとよく似ているといわれている。猪伏は、平家の落人が金をたくさん隠したという歌も残っている。「朝日、夕日のさす所、櫓の元に金千両」と。

猪伏の大先祖を祀つてある、伊吹神社については、次のような言い伝えがある。昔、高野と猪伏では、ときならぬときに鶏鳴があり、人々は不思議に思っていた。昭和の初め高野の大火が起る前にも、毎夜のごとく続いたという。

ところが、その後も続くので、人々はいいがたい恐怖におののき、代表の者が、土佐の四万川に行き、龍王様に参つて、神のご神託を乞うたところ、「それは組中、どこかに神、あるいは大切な先祖をおろそかにしているためである」。このままにしておく、まだまだどのようなことが起るかわからないとのことだった。人々は驚いて、相談の結果、昔、川崎神社へ合祀され、古宮となつて大崎神社を、適当な地に奉遷することとして、これを猪伏と定め、当時まで猪伏においては、入らずの森と称せられて、そこに入る者は神徳にふれると信じ、また幾人かの人はそこに入ってより病み患つて死んだと伝えられていた地を、人々是最適と定め、神を祀るためであると、今までの恐怖も消えて、入らずの森を切り開き、掘り起した。ついにそこから刀剣その他の道具を発掘した。これこそ我れらが先祖、平家落武者大将の墓所に相違あるまいと、その刀を御神体として、そこに小さい祠堂を建て、伊吹神社と称え、前の大崎神社と共に祀つたものである。

猪伏の裏山にはひそが成といわれている所がある。大野ヶ原の源平の戦で敗れた、大野氏の一族主だった一二人が、ひそんでいたが、ある時、白さぎの羽ばたく音に、敵が攻めて来たとおびえ、今はこれまでと、自分らの姿を木に刻んで川に流し、自刃した所と伝えられている。川に流れたお姿は、一二箇所に流れつき、そこには木造りの御神体が祀られてあつたといわれている。

猪伏には大野姓を名乗るものがほとんどである。

池ノ宮神社の由来

昔、窪田の池ノ宮に、大きな蛇がいて人々はこれを恐れていた。それを聞いたお遍路さんが、大きい蛇に向って「性根があるなら、ちょっとムカデになってみる」というと、大蛇はみるみるうちに、小さいムカデになった。お遍路さんは、そのムカデを殺し、それを祀まつったのが池ノ宮神社であるといわれている。

平家落人の行方

大野ヶ原の源平の戦で、源氏は、源氏ヶ駄馬の立っている石に鎧をかぶせ人と見せたので、平氏はとうていかなわなれないと思ひ逃げた。大野ヶ原から、中久保、横野を通って猪伏へ逃げ、ここでそれぞれ別れたといひ、永野には、中村氏、小黒川には、ヌタノウノ源左衛門、大窪谷には鈴木氏、奈良藪には大野氏が逃げて行ったという。

木地師

木地師は、ある京都の公家さんが、ライ病をわずらい奥山に住みついたもので、生きるために官山の木は、自由に切ることが許されていたという。そして、木地皿、木地鉢を作り、近くの百姓と食物の交換をしていたという。西谷方面の深い山、名荷の木地、奈良藪などには、キジャシキ、キジャトコなど地名がある。また、猪伏の奥の山の頂上には、木地師の墓がある。オサトの墓と呼ばれている。オサトさんは、木地師であるヒョウベイ(カヒョウベイ)という人の妻であった。その墓は夫のヒョウベイが山の下に作っていたのだが、上から石が落ちてくるといけないということで、山の頂上へ持ち上げたのである。そしてその周囲には入ってはいけないといわれ、墓にお供え物をする、オサトサンがその人を慕ってついて来るといふことである。その隣りには夫ヒョウベイの墓もあるという。

ヤジロウサン

昔、八人の山賊が本谷を襲ったところ、兵衛の太夫さんが怒って山賊を追い払い、ドダン坂という坂を登って逃げる者たちに向って、八本の矢を射かけた。するとその矢は八人の山賊に当たり、みんな坂道を転がって、銀杏の木の根元に集まったという。そこに村人がお社をつくって祀り、ヤジロウサンと呼んでいる。

お百婆さん

その者、天正年間（一五七三―一九一）のころだろうか、松木にお百婆はばと呼ばれる婆さんが住んでいた。そのころ、村の庄屋が、松木の大和地、ここが大変日当たりがよいので、庄屋所をここに建てよう

と云うことに決めた。これを聞いたお百婆は、こと一大事、「ここに庄屋所を建てたら、土地がなくなってしまうし、松木の百姓共は成り立たん、やめてくれ」。と大庄屋所である大川（美川村大川）の庄屋まで抗議をする決意をした。ただひとり、松木を登り、けわしい大城山、昼なお暗い原始林の大笹のある中を、松木の百姓共のためにと、必死で越えて大川に下り、庄屋へ抗議を申しこんだ。その時、お百婆は、往復山の中で迷わぬよう、用心深く、糸を巻いた杵しほを頭につけて引いて歩き、これを目印にした。途中糸がなくなり、杵を取り替えた、その杵を立てた所、いままもワクタテガナルの地名が残っている。しかし、お百婆のこの願いは、取り上げてくれるよしもなく、大和地に大工小屋が建てられ、庄屋所建築の木取りが始められた。お百婆は怒り、この上は死をもって抗議するほかないと覚悟をきめた。「松木に災難がある時は、白い鳥になって飛んで知らせてやる」といって、その大工小屋に首を吊つって死んでしまっ



義人お百婆之墓

た。これは縁起が悪いと、大工小屋は大窪谷に移され、庄屋所は変更されて、大和地は、お百婆の死によって、松木の百姓共から守られたのである。土地の人々は、お百婆さんを、早虎神社に祭って拜んだのである。

その後、松木では、大正、昭和の時代になっても、白い鳥が飛んだことがあって、人々は、お百婆さんによる不吉なしらせではないかと、早虎神社や、辻堂地藏尊に集まって、なにごともないようにと祈願をしたこともあるという。部落の人々は、お百婆さんを偲び、「松寿院徳豊妙開大師」としてあがめ、石碑を松木の諸人堂に建て、毎年七月の盆には、御施我鬼の法要を続けていると言う。

きゅうざい六兵衛

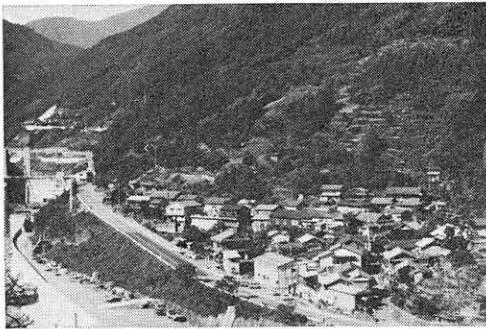
むかし、名荷の開けはじめのころだろうか、きゅうざい六兵衛といわれる人がいて、上名荷の開祖だとも伝えられている。人々は六兵衛さんと呼んでいた。六兵衛さんの威勢は大したもの見して、「敵が来たぞ」と大声を上げて叫び、次々に伝達される、すると六兵衛さんは、たちまち鎧かぶとに身を固め、槍を取って立ち上り、「だんだん」と、武者振いをすれば、敵はこの威勢に恐れて逃げていったという。六兵衛さんは、武勇にすぐれているとともに、大変思いやりのある太っ腹の人で、人々からしたわれていた。

ある日、家来たちに、シモバタへ、イモ植えをするよう命じた。家来たちは多くのイモ種の中の一俵を、こっそりイデ(ユデル)と一緒に現地へ運んでいた。ところが、六兵衛さんが見回りにやって来て、並べてあるイモ種の俵に腰をおろした。それがたまたまイデイモの俵であった。六兵衛さんは何食わぬ顔で立ち去った。それから数日立って、また見回りに来た。家来共をかえりみて「イデイモが生えたぞ」といったという。それから家来共はなお一層、六兵衛さんのために働いたという。人々はその後、「きゅうざい六兵衛の世盛りには、イデイモが生えた。」とその威勢の高かったことを伝えてきた。昔から部落の人々の伝えによると、このきゅうざい六兵衛の位牌は、上名荷の稲田家に

祀られており、同家の前あたりに墓もあったというが、現在はわからなくなっている。稲田家では、祖先に「お茶と」をするとき、幾つかのお茶との中で、一つを「きゅうざい六兵衛さん、お上りなされ」といって、差上げると、寒中でほかのお茶とは全部凍るのに、六兵衛さんのお茶は、絶対凍ることがないと伝えられている。

かまとこ

ずっと昔のこと、西の谷（旭）へひとりの娘さんがやって来た。家出をしたのか追い出されたのか、娘さんは、ふつうではないようすが、ただ黙ってゆっくり歩いていた。西の空は夕焼けで真赤に燃えていた。西の谷の人たちは、この娘さんをおかしい家に泊めてやろうとしたが、娘さんは黙って首を横に振るばかりで、やがて部落の下の川原の方へおりて行ってしまった。



昔の西の谷はすっかり変わった（旭 昭和58年）

そのころ三軒ほどの家しかないこの部落にも明るい朝がやってきた。ひとりの若者がたきぎとりに出かけて行った。若者は、自分でも気がつかないままに、いつもの山とは反対の川原の方に足が向いていた。そして若者は見えない糸にでもひかれていくかのように、まっすぐ川原へ進んで行った。娘は、夜が明けたのも気がつかないかのように、川原の岩のそばでぐっすり眠っていた。小さなふろしき包みがただ一つ、ぼつんとそばにおいてあった。若者は、そつと娘のそばによって行った。娘は、若者の気配に静かに起き上がり、やさしい目でじっと見上げた。ふたりは目と目があったとき思わずにっこりと笑った。若者は仕事をやめて娘を自分の家へ連れて帰った。家についてからも、娘はただ黙ったままで、一日中、若者と向い合ってすわっていた。若者もまた何も聞かずにじっとすわっていた。

やがて夕方になり、あたりがうす暗くなったとき、娘は、はじめて口を開いた。娘は若者に、「あの庭のすみの釜にかかっている「こしき」（三粒をむす大きな桶）に入れて寝させて下さい。」と云って頼んだ。そうして「一週間たったら開けて下さい。」とくれぐれも頼みこしきの中へ入った。

それから若者は娘のいうとおりにして、一日、二日、三日、……と気長く待っていた。しかし、その間、こしきの中の娘のことが気になって、いく度もあけようとしたが、娘のことばを思い出して開けるのをこらえて、じっとがまんしていた。仕事にも行かず、じっとこしきのそばで待っていた。六日目、若者はとうとう待ちきれなくなって、部落の人たちを呼んで来て、「一日くらいなら、早く開けてもいいだろう。」と相談した。部落の人たちは誰も反対する者はなかった。若者は思いきってこしきを開けた。とどうか。こしきの中にはいるはずの娘の姿はどこにも見当たらず、へびのからや、犬の死がい、くさった魚などがいっぱいはいっているだけだった。

若者はもちろん、みんなびっくりした。なんのこともかさっぱりわからない。あわててもとにかえして、みんなは帰ってしまった。しかし若者はかまのそばで動こうとせず、すわり続けていた。七日目がきたが何ごともなかった。六日目のままで、娘はどこにもいなかった。若者は、いつか娘が帰ってくるかもわからないと考え、そのままにしておいた。でも、ついに若者のところへ帰って来ることはなかった。娘がかまのこしきの中を寝床にしたので、いつのころからか、そこを「かま床」と呼ぶようになった。

三 その他の伝説

山やま 姥おば 昔、おんば坂といわれる坂が落出の上の方にあつて、その近くの岩屋に山姥やまおんばが住んでいた。山姥は、毎年正月の餅つきをするようになると手伝いに来た。そして山姥は、餅つきの日は毎年同じ日にするよ

う、変えてはいけなと言っていた。しかし、ある家では、山姥が来ると、シラミを落してきたなくてしょうがなく、定めていた日の前日に餅つきをすませてしまった。するとそれ以来、山姥は来なくなったけれども、その家では、正月の餅がくさって食べられなくなったという。それから、不幸がないかぎり、正月の餅つきの日は、変えないものだと言われるようになった。

山ヤマ犬イヌ

山犬は、普通の犬とほとんど変わらないが、変った毛が耳まではえており、暗やみで目が光る。また山犬は狼様の使いであり、願いごとは狼様に頼むと叶えてもらえするという。しかしその人が死んだときには、山犬がその死体をとりに来るといふ。

エンコの恩がえし

むかし、むかし、瓜うりをたくさん作っている百姓のはたけから、毎晩瓜をもいでゆく者がいた。百姓は、きつと子供のしわざだろうと思ひ子供を叱ったが、その子供が言うのに、「頭に皿をかぶった赤い人が来て食べている」といふ。それで夜見張りをしていると、エンコが瓜を食べに来た。主人はそのエンコに、「お前は無断で瓜をなぜ食べた」と言つて怒り、エンコの頭の皿の水をかえし、「瓜を食べるからばちが当たんだ」と言つた。エンコは悪かつたと謝つて、水をくれたら何でも願いごとをかなえてあげると言う。「助けくれたら、軒の下にカギを吊つておけば、欲しいものは何でも掛けてやる」といふので、主人はエンコの皿に水を入れて逃してやつた。するとそれから、エンコは毎晩軒の下のカギに欲しいものを掛けておいてくれるようになり、そのおかげで百姓は、大変ぜいたくな生活ができるようになった。ある日、その百姓は木のカギではいけない、もっと丈夫なカギをと思ひ、代りに鹿の角を吊しておいた。その晩も、エンコはいいものを、たくさん持つて来たが、鹿の角を見るなり驚いて、キャーと叫び、持つてきたものを投げ出してしまった。それからエンコはまったく来なくなつてしまつたといふ。

第二節 俗信・俚諺

俗信は、古くから信仰と呪術じゆつによつて生れているものが多いが、一面、人々の長い生活経験によるものもまた数多くみられる。「秋の夕焼け橋渡り行くな」、「秋の夕焼け鎌をとげ」など、これらは人々の、久しい自然観察の結果によつて生れたものであり、科学知識ともいえるものである。こうした多くの諺などが、生活の知恵として伝えられている。いまこれらの俗信を、予兆・禁忌・呪術・その他に分類してその一部を記してみる。

一 予兆

① 天候に関するもの

夏の夕焼け橋渡り行くな。

秋の夕焼け鎌をとげ

トンビが夕方鳴くと、次の日の午後雨が降る。

月にカサがかかっていると雨が降る。

蜂の巣が木の高い所にできるとシケ(台風)がなく低いところにできるとシケがある。

カツボ(ブト)や羽アリが多くでると雨が降る。

春の雷の一つ鳴りは大シケがある。

春の雷の一つ鳴りは大雪がある。

春の雷の一つ鳴りは大雪がある。

朝曇り太陽あさひの元(晴になる)

朝てっかり、あてにはならん(雨が降る)

朔つぎ日日和、三日より内雨となる。

猫が朝顔を洗らうと雨が降る。

コオロギが鳴いたらシケがやむ。

梅雨に雷が鳴ったら、梅雨があがる。

山姥やまばなが子をはらむと、その冬は暖い。

嫁入りの時天氣がよかったら、その人は生れた時もよかった。

死んだ時天氣がよかったら、その人は生れた時もよかった。

② 夢に関するもの

人が死ぬ夢をみると、赤ちゃんが生れる。

赤ちゃんが生れる夢をみると人が死ぬ。

牛の夢をみると氏神様にお参りしなければいけないというお告げ。

蛇の夢を見ると縁起がよい。

葬式に会う夢はよい。

結婚式に会う夢は悪い。

初夢は、一富士、二タカ、三ナスビがよい。

先祖の夢は悪い。

朝方の夢は、夢があう。

魚の夢は悪い。

歯のぬけた夢は悪い。

家を建てる夢は悪い。

大勢の客を相手にした夢は悪い(人集り)

③ 動植物に関するもの

竹に花が咲くと将来悪いことがおこる。

作物が普通よりよくできると、別れの作といって悪い。

カラスが家の近くで鳴くと、悪いことがある。

ねずみが家に急にいなくなると、火事がおきる。

庭木に桜を植えると、桜の木が枯れたときその家は滅る。

三毛猫の尾ばちの長いのは化けてでる。

青梅がくさったり、味噌がすっぱくなったら人が死ぬ。

夜の蜘蛛は、親に似ていても殺せ。

朝蜘蛛は鬼に似ていても殺すな。

鬼門の所に南天を植えるとよい。

ニワトリの朝鳴きは良いが、夜鳴きは悪い。

④ 場所・日時・方向に関するもの

正月元旦の朝早く女の人があると縁起が悪い。

へび年生れは一生金に不自由しない。

棟上げの時、雨が降ると「降り込む」といって縁起よい。

元旦の日に、ミソサザエを見ると、その年は縁起がよい。

夜覆物をおろすと縁起が悪い。やむを得ぬ時は墨をぬる。

午の日に火をたくと火事になる。

子の年は豊作。

ひのえ午の女をとると男の命が短い。

女の人が正月に死ぬと、その年はたくさん人が死ぬ。

おてんとうさんがお隠れ(日食)になっているときは毒が降る。

建築・縁談は友引が良い。

結婚式は大安が良い。

結婚式の日、式が始ってからの雨は良いが、始まる前の雨は悪い。

七夕の日に雨が降るとムギヨ（収穫）が悪い。

二十日正月にひもじい思いをするとその年は、年中ひもじい思いをする。

寅年生れの人は向う気が強い。

卯年生れはやさしい。

丑年生れはがまん強い。

⑤ その他に關するもの

結婚は同じ年は良い。

目のふちにホクロがあると泣きぼくろといつて悪い。

嫁さんが妊娠していたら、主人のすることなんでもうまくいく。

庚申の日に身ごもつた子は盗みをする。

嫁に出ていく時には「シャクシを買いに行け」といつて出すと良い。

人の死ぬのは潮が引く刻で、人が生れるのは潮が満ちる刻である。

鏡を割ると縁起が悪い。

妊婦がすべりこけたらへソの才をまいた子供が生れる。

人が来て長居をしている時、ほうきを立てると帰る。

病人の横足がはれると、その病人は先が長くない。

病人が寝ていて手を見るようになったら、先が長くない。

みけんが狭い人は氣短かである。

えりアザのある人は着る物にめぐまれるといつて幸福になる。

妊婦の顔がきついと男の子が生れる。

爪をやいたら氣ちがになる。

便所をきれいにしていたらきれいな子が生れる。

二 禁 忌

① 死に關するもの

北枕はいけない。死人を北枕にするから。

御飯の上に箸を立ててはいけない。死人の御飯に立てるから。

着物を左前に着てはいけない。死人の着物は左前だから。

身内の者が死ぬと一年間神社にお参りしてはいけない。

一本線香を立ててはいけない。

一膳飯を食べてはいけない。

骨を渡すときに箸から箸へ渡すので、ふだん箸と箸でつかみ

合ってはいけない。

死人を一人で寝かせてはいけない。山犬が食いに来る。

他人の葬式に出た場合、一週間神に参ってはいけない。

友引の日に野辺送りをしてはいけない。友を引くから。

死人に猫を近づけてはいけない。死人が起き上がる。

四十九日が三ヶ月にかかると悪い。早くする。

葬式の時、座敷を掃く場合、ほうきを使ってはいけない。わからで掃き出す。

葬式の時、ものをたくのに、鍋にふたをしたらいけない。

死んだ人と相年ならば葬式に立ち会ってはいけない。

死人には大人も子供も、着物を反対にかける。

初七日まで死人のに使った鍋を用いてはいけない。

洗濯物を北向きに干したらいけない。死人の着物を北向きに干すから。

死体は縁側から出すのでふだん縁側から出入りしてはいけない。

い。

② 日常生活に関するもの

ヘソのゴマを取ると腹がいたくなるので取ってはいけない。

ほうきをまたいではいけない。大きくならない。

元旦の朝は福が来る。だからほうきにふれてはいけない。

山師は仕事始めに「サル」ということばをいってはいけない。

い。

女がシヤクシに口をつけたら嫁入りの時に犬にほえられる。

秋ナスビ嫁に食わずな。

人を見送るとき、見えなくなるまで見送ってはいけない。

ほうきで子供をたくとほうき子ができるといわれるのでた

たいてはいけない。

朝、針仕事をしてはいけない。

食後すぐころけてはいけない。牛になる。

焼畑で女の人が火をつけたらいけない。

一升もちはずいてはいけない。四九日の時などに一升もちを

つくから。

ますをたたいてはいけない。

さわらぬ神に祟りなし。

ヤカンのふたをあけて、お湯をわかしてはいけない。

節分の豆を踏むと足の裏にマメができる。

③ 場所・日時・方向に関するもの

八月一六日に川に行くとエンコが足をひっぱる。

北向きに便所を作つてはいけない。

正月一日に蔵の戸を開けてはいけない。

秋葉様の祭りの日に味噌を焼いてはいけない。

橋の上で杖をついてはいけない。昔、弘法大師が橋の下で寝たことがあるから。

晩に子供を泣かすな。シバ天狗に盗まれる。

便所に唾をはいてはいけない。

三隣亡には旅に出てはいけない。

旧節句に田植えをしらない。

雷がなつた時は金物を持つな。

山姥のお産の日は山に入つてはいけない。

水の中で小便をすると水神様の祟りがある。

家の中で口笛を吹くと悪魔が七里近よってくるので、家の中で吹いてはいけない。

正月の一六日に畑をうつてはいけない。地獄の釜のふたがあくから。

ハンゲに穴のあいたものを喰べてはいけない。

マケバタケを買つてはいけない病気になるから。

旧正月二〇日の山の神祭りに女の人は出てはいけない。

山で「イタチ」ということばをいってはいけない。

七夕にはキュウリを食べてはいけない。キュウリの水で流れるという。

④ 動植物に関するもの

ハナシバは家の近くに植えてはいけない。仏壇に供えるから。

山の神をまつている所のそばの木を切つてはいけない。もし切つたりすると命をうばわれる。

イチヨウは、お堂・お宮のものだから家に植えてはいけない。

蛇を指さしてはいけない。指がくさる。

庭にビワを植えてはいけない。

蛇をみて「大きな」といってはいけない。太いという。

猿は人間より三本毛が少ないのだから人間の生れ変わり、よつて猿を殺してはいけない。

ミソサザエをとつてはいけない。

同じ年に生れた家畜がいると子供が育ち負けする。

(5) 婚姻・出産に関するもの

産後一週間は梅干とおかゆ以外食べてはいけない。

妊娠している時、山の動物を食べてはいけない。

産後は青魚(サバなど)を食べてはいけない。
妊婦は牛の荷綱をまたいではいけない。
彼岸の日は結婚してはいけない。

三 呪 術

① 民間医療法

⑦ 薬物に関するもの

切傷にフキをつぶしてつけるとなおる。

ヤケドにはアロエ。

ヨモギ・フキは血どめとなる。

腹くだしにはウツゲの木をかむ。

カンの虫には柳の木にいる虫を食べさせる。

ハメ焼酎はどんな病気にもきく。

竜王さんに祀ったものを食べると夏病みしない。

熱さましには白南天

黒豆は咳にきく。

イボには山コンニャクの汁がよい。

鼻血が出たら首ねっこの毛をぬくとよい。

赤ん坊にはまずフキの汁を飲ます。バイキンを殺す。

食あたりをした時は、足の小指の外側にヤイトをすえるとよ

い。

しびれにはつばを頭につけるとよい。

タヌキの骨や肉は傷にきく。

カンノ虫にはヤイトを背中の大きな骨の下のかほみにすえるとよくきく。

火傷にはメリケンコをぬる。

ハゼ・ウルシ負けにはカニを布で丸めてつぶしてその汁をつける。

大ケガには猿の頭のシオカラがよくきく。

ミミズのほしたのは熱さましによくきく。

火傷にはキュウリの汁。

冬至の日にかぼちゃを食べると中風にかからない。

風邪をひいた時には里モジの木の皮とカンゾウを混ぜて飲むとよい。

シャクナゲは虫よけになる。

イチジクの白い葉の汁をつけたらイボがとれる。

① まじないによるもの

災難が直前にせまっている時、「三月三日の桃の花、五月五日のヤキシウガ、九月九日の菊の花、いただいておるぞよ

アピラオンゲンソアカ」というと災難を免がれることができ
る。

魚の骨がノドにかかったとき、「天竺の龍三川のタイの骨、
七瀬落ちる間に早ぬけた」というとよい。

目にゴミがはいったとき、「天竺の白き山のオゴロモチ（モ
グラ）目もの入りたりアピラオンゲンソアカ」といってふく
とゴミがとれる。

ホロセがでたらお地藏さんを拝む。

火事の夢をみたら家の四角に水をかける。

「カラス鳴く、ヨイスの神の使いかや」というまじないをと
なえると、その人に災難がかかるのが除かれる。

「ハメにコショウ（傷がついたこと）オドロの下にカギワラ
ビ」ととなえるとハメにかまれない。

「ニンが四、シニが八」というと血が止まる。

歯痛には「伊勢の庭の黒タンの木に虫があつても菜を食わぬ」
というとよい。

赤ちゃんのカン虫には手のひらに筆で字を書いて握らせて開
いたら、指先から白毛みたいな虫が出てくる。

火傷したとき、「天竺のサルサの川に大蛇がおぼれ死にその
水をくみかえ、かけかえすれば、ウミウみず、ふくれず、あ

とつかずアピラオンゲンソアカ」と三回いうとよい。

赤ん坊が夜泣きするとき「シノタノモリの白ギツネ、昼は
泣いても夜は鳴くな」と三回いうとよい。

乳歯が抜けたとき上の歯は床の下に投げ「ねずみの歯より早
う生え」下歯は屋根へ投げ「すずめの歯より早う生え」と
なえる。

② その他に関するもの

⑦ 雨乞

山伏が音頭をとり、「テンジクテンの竜王はアーム（雨）を
たもれりリュウグンドウ」と念仏をとなえながら部落のみんな
が龍ノ川におり、大きな松の木のそばの竜王という石の下
で拝む。

八釜の龍王様へ村の男達がお参りし、三、四回拜んでも、雨
が降らないときは、ひもをつけた釜を測の中へ入れ、雨が降
ってきたらそれを引き上げる。

① 虫送り・虫供養

ヨネブツといい、盆の一七日に地藏さんのお祭りをする。お

寺で書いてもらった旗を笹のついた竹につるして、夕方、鉦や太鼓をたたき念仏をとなえながら仁淀川に下りて行き旗を川に流す。

部落のみんなが米一合の持ち寄りでお堂に集まる。おかゆをたいて、実盛まねもりさまに供え、馴れた古老が音頭をとって、鉦と太鼓に合せて念仏「ナーマイダーア、ア、ナーマイダー、ナーマイダーブツナーマイダ」と繰返す。朝から夕方までつづける。一回ごとにつばきの葉を一枚ずつおいて回数をかぞえる。つばきの葉は持って帰って竹にはさんで畑に立てる。

⑦ 願かけ及びその他

大黒柱の下にお金を入れると「大黒柱に余裕の金がある」といってその家は栄える。

子供をさずかりたい時、子安地藏に参るとよい。

年まわりが悪い時、お薬師さんにお参りするとよい。

付 俚 諺

暑さ寒さも彼岸まで。

桃栗三年柿八年。

瓜うりのつるにはなすびはならん。

桜切る馬鹿梅切らん馬鹿。

犬は三日飼えば三年恩を忘れん。

猫は三年飼っても三日こそ恩を覚えてない。

大取りおほより小取り。

オンビキ飛んでも休みが長い。

のらの節句働き。

紺屋こんやの白袴しろばかま。

器用貧乏村宝。

彼岸過ぎての表の肥。

遠くの親類より近くの他人。

義理と禪まじしかかねばならん。

馬鹿は風も引かん。

馬鹿の三杯汁。

両方よいのは頬ほかぶり。

うまいものは宵に食え。

雀百まで踊り忘れん。

男やもめにうじがわき、女やもめにや花が咲く。

うそは盗人のはじまり。

火の無い所に煙は立たん。

亀の甲より年の却。

若い時の苦勞は買うてもせよ。

ウドの大木杖にもならん。

人のうわざも七五日。

火を見たら火事と思え、人を見たら盗人と思え。

親の意見と茄子の花は千に一つのあだがない。

茶ばらも一とき。

無い子にゃ泣かん。

雨降って地固る。

出る釘は叩かれる。

内の米の飯より隣の雑炊。

寝る子はふとる。

仰向いて唾を吐く。

赤子の手をねじる。

商は牛のようだれ。

虻蜂とらず。

有りそうでないのが金。

一を聞いて十を知る。

命の洗濯。

いやで幸いすかれちや困る。

色気より食い気。

言わぬが花。

牛は牛連れ馬は馬連れ。

氏よりそだち。

生みの親より育ての親。

遠慮ひだるし伊達寒し。

思い立ったが吉日。

鎌を禪にかく。

壁のそくたいは泥でせよ。

枯木も山のにぎわい。

兄弟は他人のはじまり。

金銭に親子なし。

過は不足の元。

果報は寝て待て。

下戸の建てた蔵がない。

けつのすがせまい。

乞食三日すりゃ止められぬ。

算用合って銭足らず。

智恵と道具はいる時使え。

仲裁は時の氏神。

ちよつと来いに油断すな。

角を矯めて牛を殺す。

処かわれば品かわる。

取らぬ狸の皮算用。

ない袖は振れぬ。

なる程ちぎる秋茄子。

人の事云えばごご敷け。

貧すりゃ鈍する。

三つ子の心百まで。

味噌汁が頭へ上る。

物は言いようで角が立つ。

物言えば唇寒し秋の風。

山の峠で日を見るな。

雪は豊年の貢ぎ物。

弱り目に祟り目。

利は元であり元は腕にあり。

類をもつて集る。

やけのやん八日やけの茄子。

瓜で火を灯す。

捨てる神あれば拾う神あり。

一に看病二に薬。

往きがけの駄賃。

石車と口車に乗るな。

第七章 方言

第一節 愛媛の方言と当地方の方言

四国方言圏（阿波・讃岐・伊予・土佐）の特殊性は、東北方言圏、あるいは九州方言圏などの特殊性に比較して濃厚でなく、不思議にも海を隔てて近畿方言圏的色彩が極めて強く、いわゆる京都方言の中の言語現象が大きく投影していると言われている。

伊予の方言を分類してみれば、

(一) 東予・中予方面の言葉。

中予は、松山及びその近郊の言葉と、久万山地方の言葉。

(二) 南予の言葉。

大州地方の言葉と宇和島地方の言葉。

(三) 瀬戸内海における、四国本土よりの二・三の島を除いた島の言葉は、山陽方言、安芸の広島言葉に近い。

中予のうち、小田町・中山町・広田村は、肱川の支流沿いの地域で、しかも地勢上大州言葉またはそれに近い。久万山言葉も、仁淀川の上流であり、古来、人や物資のひんばんな交流があつて、土佐弁の影響を大きく受けて、土佐言葉が多く入っており、特に我が村では土佐なまりが濃厚である。

方言は、国語教育の普及、情報文化の進歩や発達などによつて、次第に失われる運命にある。これは世界観の拡がりをみる今日当然のことであるが、方言はその地域に発生した独自のものです、人々の生活に大きな役割を果たしており、ごく自然の形で生きているのもたしかである。いっどうして誰がつくりだしたということもなく、いつの間にか、先人が日常語としてきたこの言葉を後世に残したいものである。

ここに、明治、大正、昭和を通じ当地方で、一般に話されてきた方言の語彙を表記することにする。

| 方言 | 意 | 味 | 方言 | 意 | 味 |
|--------|--------|---|-----------|------------------|---|
| アイコ | 勝負なし | | アジモソツケモナイ | 大変まずい | |
| アイナカ | あいだ・途中 | | アズル | 苦しむ・あがく | |
| アイマグイ | 間食 | | アスコ | かの所 | |
| アガリハナ | あがり口 | | アダタン | 間にあわん・きりが無い | |
| アガツタリ | 駄目になる | | アダ | 無駄 | |
| アギト | あご | | アツカム | うるさがる | |
| アクサイツク | 飽いてしまう | | アツカマシイ | うるさい | |
| アケザニ | ざっくばらん | | アツツケ | 間接にいやみをいったりしたりする | |
| アゲル | へどを吐く | | アドエル | あわてる・とまどう | |
| アザトイ | 粗雑である | | アブナア | 危い | |
| | | | アノネヤ | 呼びかけることば | |
| | | | アマス | もてあます | |
| | | | アマル | 落雷する・残る | |

(ア)

アラカタ
アリヤー
アレミー
アロウ
アワイ
アワレル
アワヌク
アンキナ
アンマリ
アンキマゴロク
(イ)

ほとんど
あれー
あれを見よ
洗う
あいだ・差
こぼれ落ちる
仰向く
のんきな
あまり
のんき者
床の下
行かないか
大声で叫ぶ・むずかる
ゆがむ・曲がる
行かない
いきむ
行きがけ

イキシモドリ
イキアタル
イキヨルカエ
イケル
イケズ
イコロ
イシガケ
イシワラ
イジクサリ
イソシイ
イタム
イタア
イチズニ
イチマキ
イデル
イデシイ
イッチョライ
イツゾ
イツツケ
イッテコーワエ

行き戻り
衝突する
行っていられますか
埋める
いたずら
体のいきおい
石垣
石の多い土地
意地悪
よく働く
くさる・こわれる
痛い
一心に
一族
ゆがく
長持ちする
上等なもの
いつか
いつも
行って来ます

| 方言 | 意 | 味 |
|--|--|---|
| イッテミヨワエ イツナゴロ イナゲナ イナス イニガケ イニシナ イヌル イネイネ イヤジリ イビ・イビワ イラレ イラバカス イロウ イロネ インマナ インマヨ インデコウワエ インマガタ | 行つて見よう いっごろ 奇妙な・変な・いやな 帰す・離婚する 帰る時 帰る途中 帰る もともと・あいこ 作物を連作する 指・指輪 気忙しい人 からかう さわる 顔色 またのちに さよなら 帰つて来ます 先程・少し前 | |
| (ウ) | | |
| ウサル ウズク ウズム ウズレル ウセタ ウソノカワ ウタグル ウチカタ・ウチトコ ウドム ウモナイ ウラ、ワシ ウリヨラン ウルイ ウロタエル | なくなる 痛む 抱く むし暑い いやな人がやって来た うそ 疑う わが家 苦しみるなる うまくない 僕・私 売っていない しめり・雨 あわてる | |

(エ)

エエカゲン

エエセーソ

エッポド

エテ

エラソーナ

エンコ

エンベツ

(オ)

オエル

オオツゴモリ

オーカン

オーケナ

オードナ

オーバシイ

オカー

でたらめ

出来ない

よほど

得意

生意気な

カッパ ずるい人

えんびつ

男根が立つ

晦日

道

大きな

だいたんな

かさばる

母

オカイ

オガス

オカシン

オカンシユ

オキレ

オゲ

オケンタイ

オコツル

オゴル

オゴロ

オコラエヤ

オサギ

オジョウズモン

オジル

オシマイタカ

オシマイタカエ

オセ

オセラシイ

オチヨウシ

オチャト

おかゆ

堀おこす

お菓子

お正月の客に出す酒さかな

たき火の残り火

ほらふき やし

あたりまえ

からかう

叱る

もぐら

かんにんして

うさび

お世辞の上手な人

こわがる

今晚は

他家へ行き今晚は

大人

大人らしい

おどける

仏前に供えるお茶

| 方言 | 意 | 味 |
|--|---|---|
| オツ オツサン オツポ オツケ オツクバミ オト オトツイ オドケル オトドイ オトロシイ オドロ オトミ オドロク オトンボ・オトゴ オトコシ オドレハ オナゴシ オナゴパス オノレバイ | お汁 寺の住職 おんぶ 背負う もうすぐ きちんとすわる 父 一昨日 ふざける 兄弟姉妹 恐しい 草むらの繁った所 ちよつとした返礼品 眠からさめる 末っ子 男たち お前はと叱るとき 女たち 女の卑称 野生 | |
| | | |
| 方言 | 意 | 味 |
| オノレバエ オバチ オヤガタ オヤスミヨ オラブ オラン オルカエ オワエル オンシ オン・メン カイ カイ カイモク ガイナ カカリゴ カク | 自然に生えたもの 尾 兄 夜の訪門引きあげのとき 叫ぶ いない 他家へ行き今日は・今晚は 追いかける おまえ 雄雌 かゆ かゆい 全く 元気な 強い あととり息子 かつぐ | |

(カ)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|----|-----|------|------|-----|------|-----|-------|-----|-----|-----|-----|------|------|------|-----|-----|------|
| カケヅル | カケル | カザ | カゾム | カタツラ | カダブク | カタシ | カツエド | カツボ | カジガイク | カプト | カブル | カマン | カヤス | カラケツ | カラゲル | カラスミ | カルウ | カワソ | カンドリ |
|------|-----|----|-----|------|------|-----|------|-----|-------|-----|-----|-----|-----|------|------|------|-----|-----|------|

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|--------|-----|----|-----|------|-----|-------|----|-------|-----|-----|------|------------|------|-------|----|-----|------|----|
| かけまわる | 水などを注ぐ | におい | かぐ | 片一方 | かたむく | 樁の木 | かつえた人 | プト | 火災が起る | 木の株 | かむる | 構わない | 返す・たおす・こぼす | からっぽ | 上にまくる | 木炭 | 背負う | カワウソ | 理解 |
|-------|--------|-----|----|-----|------|-----|-------|----|-------|-----|-----|------|------------|------|-------|----|-----|------|----|

| | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|-------|-----|------|--------|-----------|-------|-------|------|------|-----|-----|-----|
| キイキイ | キサンジナ | キシヤナイ | キセリ | キタカエ | キビスガエエ | キヤイクソガワルイ | ギョーサン | キヨロマツ | キリブサ | キンリヨ | クエル | ククム | ククル |
|------|-------|-------|-----|------|--------|-----------|-------|-------|------|------|-----|-----|-----|

(キ)

(ク)

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|----|-----|--------|-------|----------|------|-------|---|-----|-------------|-----|-----|
| ねずみ | 手際よい | 汚い | きせる | おいでなさい | 気味が良い | 残念でたまらない | たくさん | あわてもの | 踵 | はかり | 崩れる・「山がクエル」 | ふくむ | しぼる |
|-----|------|----|-----|--------|-------|----------|------|-------|---|-----|-------------|-----|-----|

| 方言 | 意 | 味 |
|--|---|---|
| クダ クチタタク クチヘンジ クチビロ クジクル クツイ グツガワルイ クド グドツク クベル クラスマ クラワス グルリ クロナツタ | 食った よくしゃべる 抗弁 くちびる 不平文句をいう。子供がむずがる。 きゅうくつな 具合・調子が悪い かまど 不平をいう 火に入れて燃やす 暗い所 なぐる まわり 暗くなった | |
| (ケ) | | |
| ゲサクナ ゲスイタ | 下品な ふろの底板 | |
| 方言 | 意 | 味 |
| ケック ケツル ケブタイ ケブリ ケンケン ケンタイ ケンド ケンベキ ゲンゲ | 結局・つまり ける けむい けむり 片足とび 当然の権利 ふるい・けれども 肩のこり れんげ | |
| (コ) | | |
| コイサ コイヨニ コイヤ コウテ コウロク コカス ゴキ | 今夜 このように 来ないか 買って 労働の奉仕 倒す 猫などに飯など入れてやる木の器 | |

| | |
|-------|-----------|
| ゴクドサレ | 放とう者・怠けもの |
| コケル | 転ぶ |
| コサエル | こしらえる |
| ゴザレヤ | 来てください |
| コシクレル | 途中で挫折する |
| コシヤクナ | 生意気な |
| コシラエ | 準備・仕度 |
| ゴジャ | 間違い |
| コスイ | ずるい・要領のよい |
| コソバイ | くすぐったい |
| コソバカス | くすぐる |
| コタウ | 弱る・疲れる |
| ゴータイナ | なんぎな |
| コットイ | 牡牛 |
| ゴツツオー | ご馳走 |
| ゴツイ | 分厚な |
| コナイダ | この間 |
| コブル | 混ぜる |
| コネクル | 混ぜてねる |
| ゴネル | 無茶をいう |

| | |
|----------|------------|
| コバンコ | 半人前の子供 |
| コマイ・コンマイ | 小さい |
| コヤライ | 子供を育てる |
| コラエジョー | 忍耐力 |
| コラエル | がまんする・ゆるす |
| ゴロタヒク | いびきかく |
| コンコ | はったい粉・つけもの |
| ゴンゴウ | ごごう(五合) |

(サ)

| | |
|---------|------------|
| サイキョロヤク | 干渉する・でしゃばる |
| サイサイ | たびたび |
| サカツベ | 頭の方から転げる |
| サカシ | さかさま |
| サカル | 発情する |
| サガス | 散らかす |
| ササホーサ | めちやくちや |
| サス | 天びん棒 |
| サゲ | 桶 |

| 方言 | 意 | 味 |
|---|---|---|
| サドイ サダチ サバク サネ サブシイ ザマナ サッチニ サプイ サプイボ サラ サライ サワス サワル | すばしこい 夕立 ほどく・解体する 種、果物の種子 さみしい みっともない 強いて・是非共 寒い とりはだ 新しい 四ツ楸 柿のしぶをとる 病気になる | |
| (シ) | | |
| シアサツテ シー シカム | 明後日の次の日 小便(小児) 縮んでしわがよる | |
| 方言 | 意 | 味 |
| シギョイ シコタマ シコナ シジロク シタミ シツコイ シテル シヌクイ ジバ シビル シプトイ シメシ シモタ シャガム ジャレル シラザッタ シラレン ションベ ジョウリ | 間がつまっている・たびたび うんと・たくさん あだ名 しりぞく ざる 執拗・頑固 捨てる やりにくい 普段・平生 冷える 強情な・しつような おむつ しまった・失敗した 体を低くする ふざける 知らなかった してはいけない 小便 草履 | |

ス

ジルイ
 シャセブ
 シャンシャン
 ショウコトナン
 ショツパチ
 シワイ
 シユウ
 シワク
 シユウコホル
 シユウゲン
 シユミコム
 ショイノミ
 ジョーブクロ
 ジョシコ
 シンキナ
 シンドイ

(ス)

穴

ぬかるみ
 ぐいみの一種
 てきばき
 しぶしぶ
 最初
 強情な
 友達の名の下につけて呼ぶ
 たたく
 根ほりはほり聞くこと
 結婚式
 しみこむ
 ひしお
 封筒
 女の子
 退屈な
 疲れた・くたびれた

スイノ
 スイリン
 スエル
 スクバル
 ズク
 スケ
 スコベ
 スソゴ
 スッコメル
 ズツナイ
 スネル
 スバル
 ズブ
 ズブトイ
 スネグロ
 スマザッタ
 スマ
 スリビ
 スワブル
 スンダ

網の目の細かいふるい
 水にもぐる
 くさる
 動かなくなる・嫌がって動かない
 熟柿
 子供を背負う帯
 音のない放屁
 末っ子
 引込める
 すべない・くるしい
 不平で人の言うことを聞かない
 しなびる
 うつ伏せに寝る
 ずるい
 田舎者
 すまなかった
 隅
 隣寸
 しゃぶる
 終る

| 方 | 言 | 意 | 味 |
|---|-----|--|---|
| セイデエー セイヨ セクル セグル セコイ セセカマシイ セセクロシイ セツク セツトル セナンダ セバイ セブル セル センカ センゴ センチ | (セ) | しなくてよい しなさい 吐く 運ぶ 苦しい うるさい 狭い・うつとうしい つつく こみあっている しなかつた 狭い ねだる 押しあう しないか 物の背 便所 | |
| ゼンセ センバ セワナイ ゾータン ゾーサナ ゾーヨ ソクタウ ソクル ソグル ソコマメ ソツ ソメル ソリヤー ソレナリ ソロウテ ソン | (ソ) | 銭 稲をこぐ道具 苦もなくてできる 冗談 めんどうな 雑費用 修繕する・繕う 失敗する 精製する・「ワラをソグル」 足の裏に出る 無駄 慣れる・「行きソメル」 それは そのまま 揃って 血統 | |

ゾンゾンスル
ソンド

(タ)

タイガイ
タイギナ
ダイコ
ダイブ
ダイバン
タキモン
タクレル
タコツル
タゴ
タゴータ
タゴル
タシナイ
ダスイ
ダダビロイ
ダダボリ

悪寒をおぼえる
それで

おおかた
めんどうでいやな
大根
たくさん
お祭に出る鬼
燃料・薪
おくれをとる
なぶる・しぼる
肥桶
関節がはずれる
咳こむ
少ない
ゆるい
大変広い
ひどい雨もり

タチクラミ
ダテコキ
タテル
タニコ
タノキ
ダマシニ
タマゲタ
タユウ
ダヤ
ダラシイ
ダンダン
ダレンマリ

(チ)

チート・チッポシ
チギル
チグハグ
チヂカマル
チビ

めまい
おしゃれする人
戸をしめる
小谷
狸
急に・いきなり
驚いた・びっくりした
神主
牛馬の小屋
疲れてだるい
ありがとう
誰にでも

少し
もぎとる
ふぞろい
委縮する
小さい人

| 方言 | 意 | 味 |
|---|---|---|
| <p>チビル チマメ チャンスル チャガマル チヨロマカス チリゲ チリゾーリ チンチクリン チンマイ チンチマンマ</p> <p style="text-align: center;">(ツ)</p> <p>ツイ ツイシタラ ツエル ツカアサイ ツカミアイ ツガイ</p> | <p>すりへる ちくび 坐る(小鬼) 動かなくなる ごまかす えり首 わらぞうり 着物の小さいこと 小さい 米の飯</p> <p>同じ もしかしたら 崩れる ください とつくみあい 鳥などの雌雄そろったもの</p> | |
| 方言 | 意 | 味 |
| <p>ツギ ツグ ツケ ツケアガル ツコウテ ツヅマリ ツヅル ツッコカス ツッパリ ツバエル ツベ ツベカヤリ ツベクソホド ツベノス ツメル ツヤス ツラマエル ツロウ</p> | <p>きれ・ぬのぎれ 飯などをよそう 掛売り 増長する 使って 結局・つまり 虫がついてすをつくる 突き倒す 支柱 じゃれる そばえる 尻 頭を逆にしてひっくりかえる ほんの少し 肛門 しめる(戸を) つぶす 捕える ろう</p> | |

| ト | ト | ト |
|-------|--------------------|----------------|
| ト | 品種・血統 | トツモナイ |
| テ | 種類とか型の意味 「あのテ、このテ」 | 早くから・さつきから |
| テガウ | からかう | ふるい |
| テケル | 出来る | どうにかこうにか |
| デコ | 人形 | たたく |
| テベント | 手持ち弁当 | どうにかこうにか |
| デボチン | 額の出ているところ | どういったらよいか |
| テンゴスナ | いらぬ手出しをするな | 地固め |
| テンテ | 手ぬぐい (小児) | ますかき |
| テンテン | たたく (児) おつむテンテン | 頭髪のかみがたの一種 (男) |
| テンデニ | めいめい | 友だち |
| デンチ | 袖なし | とがらす |
| テンマ | 鬼ごっこなどで休むとき | どうこう言っても |
| テンプナ | 危険・大げさ・むてっぽうな | びり |
| (ト) | | 分量 |
| | | 寝る |
| | | そこらここらにない |
| | | 背骨 |
| | | 優秀ない |
| | | いずれにしても |
| | | てっぺん・頂上 |
| | | 思いもよらない |

| 方言 | 意 | 味 |
|---|---|---|
| ドバ ドベ ドマグルル トメル ドモナラン ドヤス トロクサイ ドロベタ トント トンボガエリ | ひきがえる どぶ とまどいする たずねさがす どうにも仕方がない なぐる うとい 土の上 酒 湯のふつとうする様子 | |
| (ナ) | | |
| ナアンチャ ナインチ ナイナイ ナカシイ ナガセ ナガタチ | なんにも・少しも うちにしまう(児) 泣きたい 梅雨 長いままのもの | |
| 方言 | 意 | 味 |
| ナスクル ナニエ ナニサマ ナバ ナマカ ナマラ ナマジ ナヤスイ ナラシ ナル ナルテン ナンセ ナンポニモ ナンジャロカ | なする・ぬる なんですか なにしろ きのご類 無精 大体 むしろ たやすい 衣掛竿 平地 南天 なにしろ・とにかく どうしても 何でしょうか | |
| (ニ) | | |
| ニエクリカエル ニエル | 煮立つ へこむ・青あざ | |

| | |
|-----------------|----------|
| ニー | 荷物・兄・奉公人 |
| ニツク | 似合う |
| ニツチモサツチモイカ ン | どうにもならない |
| ニナウ | かつぐ |
| ニヤクラカス | なぐる |
| ニワ・ヌワ | 土間 |
| ニンゲ | 人間 |
| ニンニ | 煮る(兎) |

(ヌ)

| | |
|----------|-----------|
| ヌイモン | ぬいもの |
| ヌイヤゲ | ぬい上げ |
| ヌカスナ | 言うな・しゃべるか |
| ヌカル | 手落ち |
| ヌクイ・ヌクメル | 暖かい・暖める |
| ヌケサク | まぬげもの |
| ヌケル | 卒業する |
| ヌスル・ヌスクル | なする・盗る |

第七章 方言

| | |
|-------|------------------|
| ネー | 根・姉・女中・嫁 |
| ネイリバナ | 眠ると間もなく |
| ネキ | そば・近く |
| ネクジ | 子供のねむい時のむずかり |
| ネコジタ | 熱いものを食べられない人 |
| ネサス | 寝かす |
| ネタロ | ねぼろ |
| ネタバケル | ねとぼける |
| ネブル | 眠る・なめる |
| ネブカ | ねぎ |
| ネブタイ | ねむい |
| ……ネヤ | ……ね(同等以下に使う言葉) |
| ネラム | にらむ |
| ネンガケル | 気を配る・目をつける・ねらう |
| ネンガリ | 木で、くぎたて遊びのようにする遊 |
| ネンツム | び |
| | つねる |

(ネ)

七六三

| 方言 | 意味 | 方言 | 意味 |
|---|---|--|--|
| <p>(7)</p> <p>……ノ ノ一ナル ノガマ ノケトク ノサクナ ノツケ ノバン ノノサン ノビル ノフゾナ ノラ ノンダクレ</p> | <p>……ね なくなる・死ぬる 風傷のことで、意外に大きな裂傷を 生じること しまっておく ぞんざいな 最初 のびない 神様・仏様 のぶ ぞんざいな なまげもの 大酒呑み</p> | <p>(8)</p> <p>ハイ バイヤイ ハガイタラシイ ハグルル ハサケル ハシカイ ハシリヤイコ ハスニ ハタカル ハセトク ハチワレル バックリ パッチ パツパ パツポ</p> | <p>はえ うばい合い はがゆい はぐる・はなれる・見失なう のけものにする もみなどがついてかゆい感がある・ 短気な かけっこ 斜めに 股をひろげる はさんでおく 割れる だけ、のみ(そればかり) ももひき たばこ(小兎) 餅</p> |

ハズム

調子ずく・ふんばつして金を出す・

ハブ

おごる

ハネガイ

歯ぐき

ハナヤリ

交互

ハナヲシユム

牛などたずなで導くこと

ハリゴ

鼻をかむ

ハリマース

めだか

パンゲ

なぐる

夕方

(ヒ)

ヒイトイ

一日

ヒトヨサ

一夜・一晚

ヒガイル

暑気あたり

ヒガナイチンチ

終日

ヒキサガス

散らかす

ヒキマキ

まんと

ヒキワリ

とうもろこしのひきわったもの

ビキ

蛙

ヒグラメ

夕ぐれ

ヒコズル

ひきずる

ヒサアニ

久しく

ヒダケル

日が高く昇る

ヒダリギツチョ

左きき

ヒダルイ

ひもじい

ヒチメンドクサイ

面倒な

ヒックリカエス

裏がえしにする

ヒツシコ

いっしょうけんめい

ヒツツカマエル

捕える

ビシヨヌレ

ずぶぬれ

ヒナチ、ヒナチダスリ

日、日がたつのを待つ

ヒネル

もむ

ヒノリワ

前庭

ヒヤイ

冷い・寒い

ヒューキダケ

火吹竹

ヒヤガル

かわく

ヒョーロクダマ

あわてもの

ヒヨコグサ

はこべ

ヒル

たれる・出す・放出する

| 方言 | 意 | 味 | 方言 | 意 | 味 | |
|---|--|---|---|---|---|--|
| <p>ビンダレ ヒンノム</p> | <p>不潔な人・しまりのない人 のみこむ</p> | | | | | |
| (フ) | | | | | | |
| <p>ブ ブアツイ フィンナル ブエン フクラ フスベル フスポル フセル ブチマワス ブッテシマウ フルセ フルツク フンドシラカク ブンブ</p> | <p>歩合・分前 厚い 駄目になる 生魚 ふくらはぎ いぶす くすぶる 埋めておく なぐる もれてしまいう・水が…… 古いもの(動物) ふくろう ふんどしをしめる 水・湯・風呂(小児)</p> | | | | | |
| | | | <p>ヘーサシ ヘートモナイ ヘコタレ・ヘコダスイ ヘズル ヘタクソ ヘチコチ ベッピン ヘドマス ヘバル ベベ ヘラ ヘラコイ ペロ ヘンシモ ヘンジョウコンゴ ヘンビ</p> | <p>久しい なんともない 意気地なし 減らす 下手な 間違い・反対・あべこべ 美人 叱る・やりこめる いやがる・よわりこむ 着物(小児) 脇・横 おうちやくな・ずるい 舌 すぐに 不平をだたら言う形容 蛇</p> | | |
| | | | (ヘ) | | | |

(ホ)

| | |
|-----------|-----------|
| ホール | 投げる |
| ホーチヤクスル | 化濃する |
| ホーベタ・ホーゲタ | ほほ |
| ホイト | こじき |
| ホカ | しか・だけ |
| ホケ | 息・ゆげ |
| ボ一 | 男の子 |
| ボクト一 | 木の棒 |
| ボケサク | 馬鹿 |
| ホザクナ | 言うな・しゃべるな |
| ボジレル | 体の具合が悪い |
| ホゼル | ほじくる・つつく |
| ホタツク | あちこち歩きまわる |
| ホトビル | ふやける・ほとぶ |
| ホロセ | じんましん |
| ホロケサク | まじめでない人 |
| ホンコ | 本勝負 |

(マ)

| | |
|-----------|----------------|
| ホンソゴ | 愛児 |
| ホンデ | それで |
| ホンナラ・ホシタラ | そうしたら |
| ボロイ・ボロクソ | 悪い・粗末な |
| ボンボ | 腹(小児) |
| マイノキ | まゆ毛 |
| マギル | じゃまになる |
| マクバル | 公平に分配する |
| マケル | かぶれる |
| マザル | 混じる |
| マゼクル | 混合する・かきまわす |
| マタクラ | 股間 |
| マツコト | ほんとう |
| マツサラ | 本当に新しい |
| マツボリ | 余分に働いて貯える・へそくり |
| マドウ | 弁償する |
| マドロコシイ | じれったい |

| 方言 | 意 | 味 |
|---|--|---|
| マバイ マホコ マメナカエ マン マンマ (ミ) | まばゆい 真正面 元気なか・達者なか 運・拍子 ご飯(小児) | |
| ミー ミズクサイ ミセーヤ ミセビラカス ミセモン ミゾイ ミテクレ ミバガヨイ ミミン ミヨウナ ミヨレ | みよ 他人行儀 見せてくれ 見せまわる 見せ物 短かい 外観 外見がよい 針の穴 変な 見ておれ | |
| ムカワレ ムグ ムゲル ムゴイ ムシクル ムツコイ ムラ (メ) | 一周忌 むく むげる かわいそう むしる 油濃い そろっていない 氣を失う まぶたのはれもの ざるの一種 大体の見当 目あて めす(雌) | |
| メン メド メツソ メゴ メイボ メーマカス | | |

メンドイ
メンドウ
メンメー

(モ)

モ一
モ一チート
モ一マー
モエル
モガウ
モゲル
モシヤグル
モタシカケル
モノイ
モメゴト
モル
モロブタ
モロータ
モンタ

めんどうな
あらそい
にらんで叱る (鬼)

牛 (鬼)
もう少し
程なく
ほてる
さかろうて言う
取れる
もんでしわにする
立てかける
ことば
争いごと
もぐ (いちごをもる)
餅を入れる重ね箱
もらった
帰って来た

モンテクル
モブリメシ

(ヤ)

ヤイト
ヤオイ
ヤケハタ
ヤスケリヤア
ヤゼン
ヤッサモッサ
ヤネコイ
ヤバイ
ヤマコ
ヤマゾウ
ヤヤ
ヤヤコシイ
ヤラシイ
ヤラレル
ヤンダニ

帰って来る
五目飯

きゆう
やわらかい
やけど
安ければ
昨晚
大さわぎの形容
むずかしい
手におえない
きよせいはる
田舎者
赤子
複雑な
いやらしい
叱られる・やり込められる
やたらに

| 方言 | 意 | 味 | 方言 | 意 | 味 |
|-------|-----------------|---|------|---------------|---|
| ヤンチャナ | 汚い・むさくるしい・いたずらな | | ヨモダ | まじめでない | |
| (ユ) | 湯・ゆず | | ヨモチ | 世帯持ち | |
| ユー | ゆうれい | | ヨモクル | よもだを言ったりしたりする | |
| ユーレン | ゆすぶる | | ヨリ | 集り | |
| ユスクル | すずぐ | | ヨンベ | 昨夜 | |
| ユスグ | 遺牌 | | | | |
| ユハイ | いろいろ | | ランキョ | らっきょ | |
| ユルリ | | | (リ) | | |
| (ヨ) | たくさん | | リグル | 念を入れる・文句をつける | |
| ヨーケ | やっど | | リコイ | りこうな | |
| ヨーヨー | 晩まで会わぬ朝の別れのあいさつ | | リンリキ | 人力車 | |
| ヨウサヨ | よいだろ | | (ル) | | |
| ヨカロ | けちんぼう | | ルスモリ | 留守番 | |
| ヨクンボ | よっぱらい | | | | |
| ヨタンボ | | | | | |

| | | | | | |
|--------------|-------------------------------|---------------------------------------|----------------------------------|---|---------------------------|
| <p>ワカイシ</p> | <p>(ワ)</p> | <p>ワカダマ ワカデナシ ワッポ</p> | <p>(ロ)</p> | <p>レン レンジ</p> | <p>(レ)</p> |
| <p>若衆・青年</p> | | <p>ろくに 普通でない・つまらない人 筒袖の上衣</p> | | <p>…いけない・…できない すりこぎ</p> | |
| | <p>ン ンーン</p> | <p>(ン)</p> | <p>ワヤク ワヤク・ワルサ ワヤクチャ</p> | <p>ワク ワケス ワザト ワシ ワタ</p> | |
| | <p>はい(返事) んにゃ(そうではない)</p> | | <p>無茶若茶</p> | <p>私 ぞうもつ いたずら</p> | <p>間引き わけ 故意に</p> |

第八章 ふるさとの文化財

我がふるさとの文化財は、我々の祖先が歩んだ足跡のひとつひとつであり、後世に大きく寄与する貴重な文化遺産である。これらを通じて、祖先の生活をうかがうことができ、先人との心のふれ合いを感じさせられる。

古きものを伝承する心は、新しき文化への創造につながる。ふるさとを愛し、うるおいのある村づくりには、文化遺産を保護する精神が最も大切である。

我が村には、国指定の特別天然記念物をはじめ、県指定、村指定の文化財があり、村では文化財保護条例を制定して、文化財保護委員会の発足により、文化遺産の発掘と保護に取り組んでいるが、日も浅くまだまだであり、今後さらにすすめていかなければならない。

第一節 国指定の文化財

八釜の甌穴群（特別天然記念物）

所在地 柳谷村大字柳井川

指定 昭和二十七年三月二十九日（国指定）

仁淀川の支流である里川の河床に、長年にわたる浸蝕作用によって、巨大な甌穴をなしているもので

あり、県下唯一つの特別天然記念物である（詳細は、第四編の観光参照）。

第二節 愛媛県指定の文化財

四国カルスト （県立自然公園）

所在地 柳谷村大字西谷

指定 昭和三九年三月二一日県指定

（第四編 産経通運・観光参照）

第三節 村指定の文化財

一 天然記念物

(一) 大宮八幡神社の大杉（昭和五八年三月一四日指定）

所在地 柳谷村大字中津西村

所有者 大宮八幡神社

根回り 一七・〇メートル

目通り 六・三メートル



大宮八幡神社大杉

樹高 三〇・〇メートル

樹齡 七〇〇年（推定）

神社の境内、社殿の前にあつて、樹齡七〇〇年と推定される老杉である。かつては、地上一メートルの所から、二大支幹になつて、樹高四二メートルに及ぶ巨大なものであつたが、昭和一八年、神社の火災によつて、一本が焼け現在は一本立ちとなつているが、樹勢やや衰退の傾向がある。

この杉は、仁平年間、朝臣頼政の家臣、井野早太が植えたといわれる伝説がある（第六章、伝説参照）。

(二) 大宮八幡神社のモミの木（昭和五八年三月一四日指定）

所在地 柳谷村大字中津西村

所有者 大宮八幡神社

根回り 四・二〇メートル

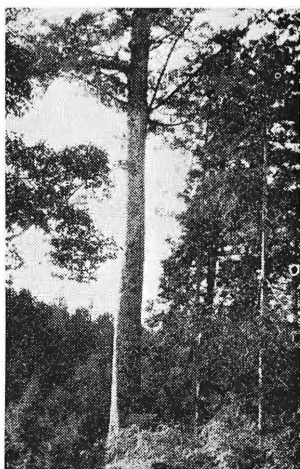
目通り 三・五五メートル

樹高 三五・〇メートル

樹齡 三〇〇年（推定）

大宮八幡神社の境内木として、真道ぐ伸びて樹勢も旺盛でありモミの木では珍しいものである。

(三) 大宮八幡神社のトチの木（昭和五八年三月一四日指定）



大宮八幡神社のモミノキ

所在地 柳谷村大字中津西村

所有者 大宮八幡神社

根回り 五・八メートル

目通り 三・七メートル

樹高 二五・〇メートル

樹齢 三〇〇年(推定)

大宮八幡神社の境内木であり、木全体は斜めに伸びていて、地上一メートルの所から支幹が出ており、大支幹の方が、目通り三・七メートルである。

(四) 中津御所のサンゴジュ(昭和五八年三月一四日指定)

所在地 柳谷村大字中津窪田

所有者 鈴木トク

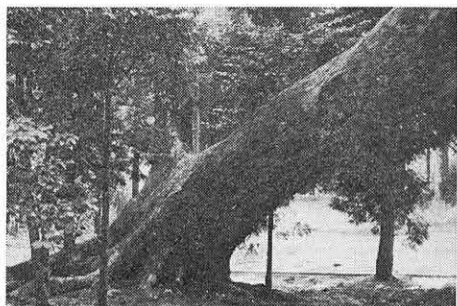
根回り 一・六五メートル

目通り 一・四五メートル

樹高 五・〇メートル

樹齢 二五〇年(推定)

地上一・六メートルの所で三本に分岐して、樹勢は旺盛である。



大宮八幡神社のトチノキ

(伍) 西村大師堂のシダレザクラ (昭和五八年三月一四日指定)

所在地 柳谷村大字中津西村

所有者 大西富繁

根回り 二・〇メートル

目通り 一・八メートル

樹高 九・〇メートル

樹齢 二〇〇年 (推定)

地上二メートルで三分岐している。樹勢はやや衰えているが、毎年美しい花をつけている。

(六) 岩川六社神社のツバキ (昭和五八年三月一四日指定)

所在地 柳谷村大字中津岩川 六社神社境内

所有者 六社神社

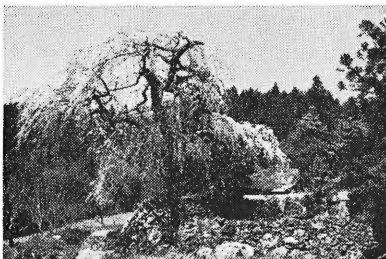
根回り 一・四五メートル

目通り 一・三二メートル

樹高 一〇・〇メートル

樹齢 二〇〇年 (推定)

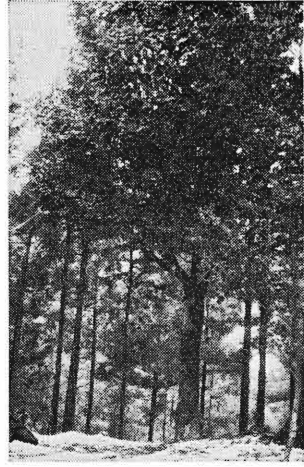
直径一メートルに及ぶツバキはきわめてまれで、真直ぐに伸び



西村大師堂のシダレザクラ

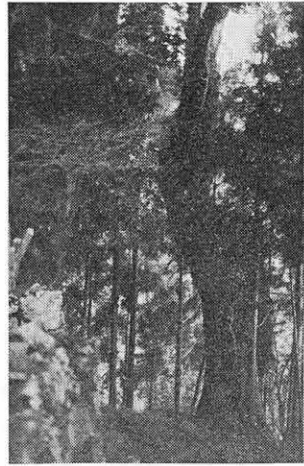


中津御所のサンゴジュ



岩川六社神社のツバキ

傘状を呈している。樹勢もきわめて旺盛である。



鉢のアカガシ

(七) 鉢のアカガシ (昭和五八年三月一四日指定)

所在地 柳谷村大字柳井川鉢 九社神社境内

所有者 九社神社

根回り 四、〇メートル

目通り 三・八メートル

樹高 二〇メートル

樹齢 五〇〇年 (推定)

境内に三株あり、同じ大きさのものが三株揃っているのは県下でも珍しい。二株は樹勢が旺盛であるが一株は、衰退している。

(八) 鉢のシイノキ (昭和五八年三月一四日指定)

所在地 柳谷村大字柳井川鉢 九社神社境内
所有者 九社神社

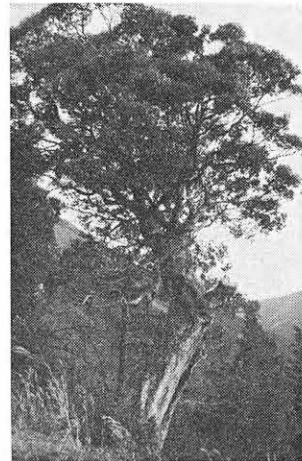
根回り 六・八メートル

目通り 五・二メートル

樹高 一七メートル

樹齡 五〇〇年 (推定)

落雷で一枝が折れ、幹の三分の一が枯れているが、樹勢は旺盛である。シイノキとしては県下でも珍しい巨樹であり、その附近に、シイノキの小群落も見られる。



鉢のシイノキ

(九) 鉢のヒメコマツ (昭和五八年三月一四日指定)

所在地 柳谷村大字柳井川鉢 九社神社境内

所有者 九社神社

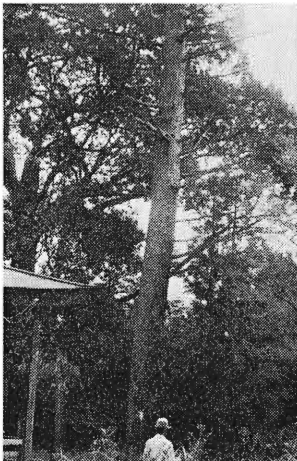
根回り 三・七メートル

目通り 二・七メートル

樹高 二三メートル

樹齡 二五〇年 (推定)

植栽したものと見られるが、ヒメコマツ (五葉松)



鉢のヒメコマツ

としては大きいものである。樹勢は旺盛。

(㉑) 郷角のエドヒガンザクラ (昭和五八年三月一四日指定)

所在地 柳谷村大字西谷郷角

所有者 丸山芳一

根回り 四・〇メートル

目通り 三・三七メートル

樹高 一八・〇メートル

樹齢 四〇〇年 (推定)

樹勢は衰退しているが、毎年花を咲かせている。サクラでこのように古いのは珍しい。根元は空洞になっていて、地蔵様が祀られており、七人塚の一つと伝えられている。

(㉒) 本谷の乳イチョウ (昭和五八年三月一四日指定)

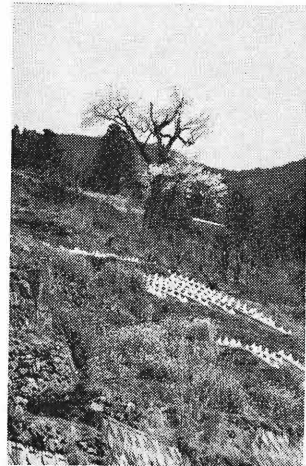
所在地 柳谷村大字西谷本谷

所有者 渡部理一

根回り 四・〇メートル

目通り 三・四二メートル

樹高 一八メートル



郷角エドヒガンザクラ



本谷の乳イチョウ

樹 齡 二五〇年（推定）

地上七メートルから幹が分岐し、よく繁茂して枝張りも見事である。樹間から垂下している柱状瘤を乳と呼んで、この木に願をかけると乳がもらえると伝えられ「乳イチョウ」と呼ばれている。樹勢は非常に旺盛である。

(二) 奈良藪のトチの木（昭和五八年三月一四日指定）

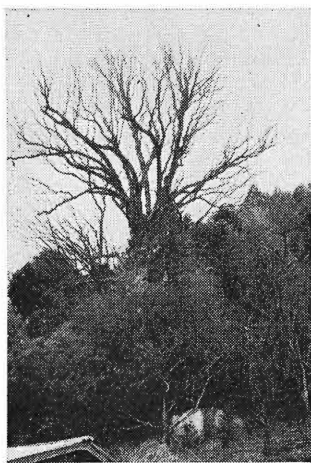
所在地 柳谷村大字柳井川奈良藪

所有者 小栗教男 藪 藪

根回り 六・二メートル

目通り 四・五メートル

樹 高 二五メートル



奈良藪のトチノキ



古味大師堂の大杉

樹 齡 五〇〇年（推定）

地上一〇メートルで六分岐して、傘状を呈している。トチノキとしては大きいものである。根元には山の神が祀られ、神木として崇拝されている。

(三) 古味大師堂の大杉（昭和五八年三月一四日指定）

所在地 柳谷村大字西谷古味

所有者 森岡英男

根回り 六・〇メートル

目通り 五・一メートル

樹 高 三八メートル

樹 齡 六〇〇年（推定）

枝張りは広く各方向へ、五〜八メートルに及び形態は壮大であり、樹勢は旺盛である。

(四) 早虎神社鎮守の森（昭和五八年三月一四日指定）

所在地 柳谷村大字柳井川

所有者 早虎神社

根回り 五・五メートル



早虎神社鎮守の森

目通り 四・八メートル

樹 高 三〇メートル

樹 齢 五〇〇年（推定）

早虎神社の境内木として、樹齢五〇〇年のスギを頭に、スギ二六本、ヒノキ一本の計二七本がある。落雷により四本のスギが破損しているが、その他のものは樹勢旺盛である。なおこの鎮守の森のスギの木がなぜ植えられたのか、この木にまつわる伝説がある（第六章 伝説参照）。

二 無形文化財

(一) 本村祭獅子（昭和四七年三月二五日指定）

明治三八年ころから、柳井川松木に伝えられている獅子舞いである（第五章 芸能参照）。

(二) 小村獅子（昭和四七年三月二五日指定）

明治三八年ころから、西谷小村に伝わる獅子舞いである（第五章 芸能参照）。

(三) 西村獅子（昭和四七年三月二五日指定）

明治末期から中津西村に伝えられている獅子舞いである（第五章 芸能参照）。

(四) 名荷踊り（昭和四七年三月二五日指定）

明治初期、阿波の国（徳島）から名荷の舟戸の奥へ、田掘りに来ていた、島之助という者によって、伝えられたという（第五章 芸能参照）。

(五) 立野万歳 （昭和四七年三月二五日指定）

明治初期、当時の父二峰村（久万町）父の川の作太という者が立野の若者に教えたのが始まりだといわれている（第五章 芸能参照）。

第四節 その他の文化財

一 神社（第七編 生活安全参照）

- | | |
|------------------|------------------|
| (一) 早虎神社（柳井川松木） | (五) 五社神社（西谷名荷） |
| (二) 総高地神社（柳井川高地） | (六) 川崎神社（西谷古味） |
| (三) 九社神社（柳井川鉢） | (七) 大宮八幡神社（中津西村） |
| (四) 五社八幡神社（西谷郷角） | (八) 河内神社（中津休場） |
- 二 寺（第七編 生活安全参照）

- | | |
|----------------|---------------|
| (一) 無量寺（柳井川落出） | (二) 円福寺（柳井川鉢） |
|----------------|---------------|

第八章 ふるさとの文化財

(三) 宝王寺(西谷大成)

(四) 大寂寺(中津窪田)

三 史 蹟(第二編 歴史参照)

(一) 古城址(柳井川立野)

(六) 明神氏の墓(柳井川松木)

(二) 古城址(中津岩川)

(七) 西谷村庄屋所跡(西谷本谷)

(三) 古城址(西谷小村)

(八) 西谷村庄屋の墓(西谷本谷)

(四) 古城址(西谷横野)

(九) 久主村庄屋所跡(中津窪田)

(五) 柳井川村庄屋所跡(柳井川大窪谷)

(三) 久主村庄屋の墓(中津窪田)

四 常夜燈

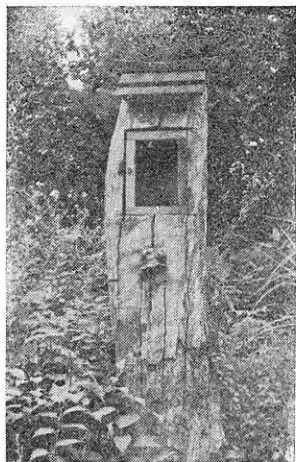
(一) 立野の常夜燈(柳井川立野)

この常夜燈は、いまでも毎夜火がともる常夜燈として、県下でもめずらしいものである。

建立年月日は不明であるが、五百年くらい前から、部落の住民が、「村中安全、部落中安全・通行人の安全」を金毘羅さん、秋葉さん、愛宕さんに祈願して始められたと伝えられ、現在も部落の一五戸が当番制によって、毎夜この火をたやすことがない。

(二) 休場の常夜燈(中津休場)

休場の寺屋敷跡にある。建立年月日は不明であるが、明治初期から金毘羅さんを祀っていたといわれる。



小村常夜燈



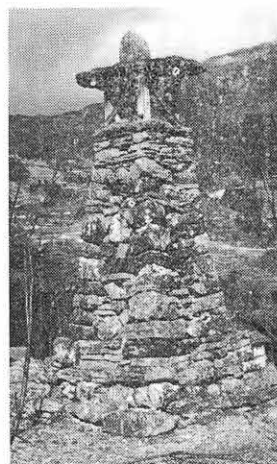
西村常夜燈

(三) 小村の常夜燈 (西谷小村)

建立年月日は不明であるが、明治初期より、部落を火災から守る「火ぶせきさま」として祀られてきた。



立野常夜燈



休場常夜燈

常夜燈としては、村内の他のものより規模も大きく、石積みで造られている珍しいものである。



中田常夜燈



土居備中守義満の墓

毎月五日と二〇日には当番制によって、ローソクの火がともる。現在の常夜燈は、昭和三五年に再建されたものであるが、木で代々創られてきた常夜燈は珍しい。

(四) 西村の常夜燈（中津西村）

明治初期に、明神山の山の神を祀る燈として、建立されたといわれているが、建立年月日は不明である。自然石で創られた常夜燈では村内最大である。

(五) 中田の常夜燈（中津中田）

明治初期から、松岡八幡様のおひかりとして建立された。建立年月日は不明であり、また位置も、昭和四三年道路改良によって変更された。

五 墓 碑

(一) 五輪塔(鉢)

この五輪塔は鉢の開祖といわれる「土居備中守義満」の墓である。この石碑の正面には、「備中守義満」、側面に、「庚辰文政三年二月八日」とある。土居備中守は南朝の落武者で、河野弾正らとともに、鉢窪の大蛇退治をしたとつたえられ、地元の人達は八幡様と呼び、旧盆一五日にお祭りをしている。(第六章 伝説参照)

六 記念碑

(一) 記念之滝の碑(中津川之内)

記念の滝は、県道土佐街道(現在の国道三三号線)開さくの際、時の県知事、関新平が命名した。この碑は、故関新平氏の県道開さく事業の功績をたたえ、明治二九年九月、六代目小牧県知事が碑文を記し、故関県知事の同郷佐野常民伯に「記念之滝」の題碑をもとめ、久主部落民の出夫によってこの地に建碑された。

(第二編 歴史参照)

(二) 大寂寺殿従三位土岐頼政公碑(中津窪田)

大寂寺は、治承四年(一一八〇)四月、頼政が久栖(久圭)の館跡に、母の菩提所として創設した寺と伝えられる。頼政は、文武両道に秀でた武士として忠誠を盡くし、戦い敗れて京にたおれた。忠臣、井野早太が、頼政の位牌を奉じて帰り、大寂寺に安置したと伝えられる(第六章 伝説参照)。

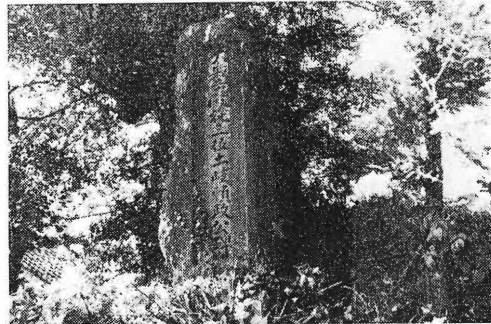
これらの伝えによって、大正八年十一月、中津村在郷軍人会は、武士道を鼓吹^{こすい}するため、寺の庭に、「大寂寺殿從三位土岐頼政公碑」と題するこの碑を建立したものである。

この碑は、自然石で、幅〇、八メートル、高さ二、〇メートルである。

(三) 千代ヶ橋の碑（柳井川川前）

天保一五年（一八四四）三月、黒川の千代ヶ橋（現在の黒川橋より約五〇メートル下流）架設を記念して建てられたものであるが、流れて川岸に埋っていたのを、昭和五六年、川前の高橋文夫によって発見された。この碑の大きさは、幅〇・四五メートル、高さ一・二メートルの自然石であり、「千代ヶ橋」の題字のほかに、世話人、彦左衛門・伝太、石工、久谷村七次郎・大州大瀬村仲次と記されている。

昔の黒川は渡しだったといわれ、人々はこの橋の架設を、いかに喜びこの碑を建てたことだろうか。現在の黒川橋が架設されたのは、大正一三年であり、そうすると千代ヶ橋は、八〇年余り黒川の渡しをしていたことになる。

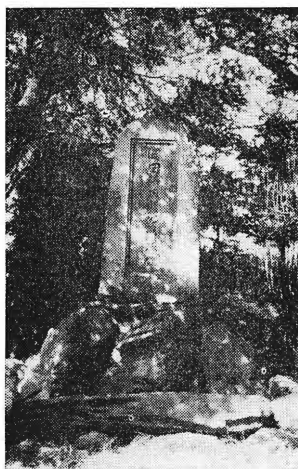


大寂寺殿土岐頼政公碑

(四) 岡田清次郎翁頌徳碑（西谷小村）



千代ヶ橋碑



岡田清次郎翁頌徳碑

岡田清次郎翁は、明治一四年、松山の三津から三坂を越えて久万山に入り、小村に居所を定めて雑貨商を営んだという。清次郎翁は大変慈愛にみちた人で、同情心厚く、他人の苦しみを自分の苦しみとして考え、村内各地で、水害・火災・病氣などがあれば見舞って歩き、貧しい人には惜しげもなく金品を送ったという。しかし、家庭生活はきびしく、常にぜいたくをいましめ、物を粗末にしなかつたといわれる。また清次郎翁は公共心に富み、多くの人たちの信頼を得て、村会議員として村の政治にもつくした。

特に信仰心が深く、小村の人々と共に、新四国八十八ヶ所をつくり、村人に信仰心を広めた。

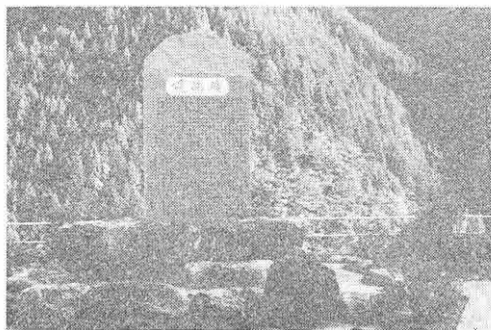
このような業績をたたえるため、昭和一二年一月、人々は翁の胸像を西谷小村に建立した。この胸像は、昭和一八年、太平洋戦争の時供出され、昭和三四年六月、再び人々によってこの頌徳碑が建立された。

(五) 西谷教育後援会頌徳碑（西谷大成）

この頌徳碑は、教育の振興をはかるため、財団法人西谷教育振興会のいしずえを築いた、先人の遺徳を偲び、これをたたえて、昭和五六年一月、西谷公民館前の広場に建立されたものである。碑文によって、西谷教育の振興に想を寄せ、情熱を燃やした先人たちの偉業が偲ばれる。

碑 文

昭和二十年一月二十六日 村長丸石繁頼 学務委員永井百蔵 稲田政之 近澤政弘 村会議員高橋教馬
上義春 西森義元 地元委員宮部宗晴 高橋義一 学校関係者鈴木
幸栄校長 大西清馬教頭等 西谷ノ最高指導者ハ西谷小学校ノ統合
ヲ画策シ 西谷住民ノ納得工作ヲ進メテイタガ 合意ガ得ラレ学校
用地ト実習地ヲ買収スルタメ関係地主岡田作太郎 西川政次郎 高
橋柳蔵 山本源松 高橋安丸等ヲ集メ売渡シニツイテ 折衝シタ結
果西谷有史以来ノ大事業ヲ理解サレ 先祖伝来ノ土地ヲ手放シ譲渡
ノ承諾ガ得ラレタ 本校 名荷分校 古味分校ヲ西谷ノ中心地ココ
大成ニ統合スルコトト決定シ 用地買取代金ハ寄付金ヲ募ツテ之ニ
アテタ 特別寄付者日発五千元 森岡悟一五千元 ソノ他西谷住民
ニモ応分ノ寄付金ガ割リ当テラレ式万数千円ガ集メラレタ 昭和二
十年六月二十八日 柳谷第二国民学校ニ發起人 学校関係者 特別
寄付者 土地譲渡人等ガ招集サレ土地買取代金壹万八千六百五拾五



財団法人西谷教育後援会頌徳記念碑

村

円也ヲ地主ニ支払ツテ感謝記念祭ヲ行イ統合ノ気運ハ最高潮ニ達シタコノ会場デ財団法人西谷教育後援会ノ設立ガ決定サレタ 終戦ノ混乱デ小学校統合ハ一時挫折ヲシタガ学制改革ニヨッテ新制中学校ガ大成ニ統合開校シタ 本会ノ役員ハ実習地ニ植林ヲシテソノ収益デ学校施設ヲ充実シ育英事業ヲ推進シ西谷教育ノ振興ヲ図ルコトトシタ ソノ後西谷住民ハ大字役ト称シテ無償デ労力ヲ提供シ植林ノ管理育撫ニカメ収益拡大ノ基礎ヲ造ツタ 創立三十六周年ヲ記念シ本会ノ基礎ヲ築カレタ先輩ニ感謝シ多クノ業績ヲ沿革史ニ記シテソノ遺徳ヲ偲ビココニ頌徳碑ヲ建立シ顕彰スルモノデアル

昭和五十六年十一月吉日

財団法人 西谷教育後援会

この碑の建立とともに、沿革史「あしあと」を発売し、西谷の学
校統合に至る戦前戦後を通じての動きを記している。

(六) 大田正志の歌碑（西谷姫鶴平）

放牧の牛が自らつけし道

有刺鉄線の柵沿ひに伸び

歌壇「青垣」に所属する久万町出身の大田正志氏が五段高原の放牧
の情景を詠んだものである。

この歌が、昭和四一年一月、明治記念総合歌会に入選し、これを
記念して昭和五一年八月村が主宰して顕彰会とともに姫鶴平に建立し
たものである。



大田正志の歌碑

(七) 逗子八郎の歌碑（柳井川永野）

黒川溪蒼き樹林の底深く

ものの命を見せて行く水

東京在住の歌人、逗子八郎（本名井上司朗）氏が、昭和五四年七月三〇日「四国カルスト草地開発牧道未成分一〇〇〇メートル」に関する自然保護問題裁決のため、天狗高原に一泊し、翌三一日面河に向う道すがら黒川溪谷の情景を詠まれた一首である。

歌碑は県道一号線が、国道四四〇号線に昇格したことを記念し、村が昭和五六年一月三日国道四四〇号線沿いに建立した。

七 地 蔵

(一) 福地藏（柳井川永野）

この地藏が祀られるようになった年代は不詳である。昔この地藏のある部落では、人々がこぞって怠惰にふけり、土地財産は他部落へ流出し貧乏部落であった。その気風を一新するため、時の指導者が、この部落に福をもたらす地藏として、お祀りするよう人々に言い渡したことから、福地藏と名付けられたという。

福地藏は、昔は旧西谷街道の傍に祀られていたが、県道開通によってそのほとりへ、しかし道路の改良によって、転々として近年現在地に祀られた。縁日は八月二四日で多くの人たちが参拝する。

(二) 小村新四国(西谷小村)

明治四一年、岡田清次郎が中心となって、小村の人々を主とした信仰のある有志によってつくられた。

国道四四〇号線から、はるか上部に、お大師山が望める。一段一段と急な石段を登って行くと、千変万化の岩かげや岩の上には八八体の地蔵が祀られている。途中にはお堂もあり、旧暦三月二一日と七月二一日が春秋二回の縁日で、昔はこのお堂で、「おこもり」などもしていたという。



福地蔵



小村新四国

(三) 古味大師堂(西谷古味)

この大師堂の建立年月日は不明である。堂の中には、高さ七〇センチ、彩色の施された立像の地蔵が安置されている。昔は盆の一日の縁日には、古味の人々全員が集ってお祀りをしてしたが、現在では役員だけが集ってお祀りをしている。由来などは不明である。

八 石造物

(一) 黒川薬師の手洗鉢（柳井川川前）

奉、天保一五年三月吉日と刻まれている。最初は黒川薬師堂にあったものであるが、明治四五年、川前大師堂に移転、大正二年川前公会堂新築に伴い再移転して現在に至る。これと同じものが早虎神社の境内にもある。

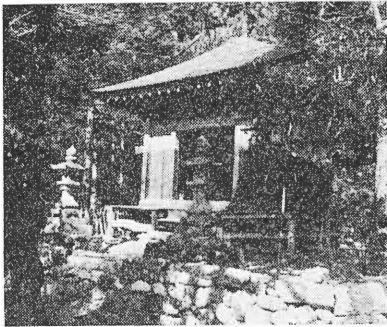
(二) 力石（中津西村・西谷小村）

力石は部落のお堂など人がよく集まる所に置いてあった。昔は、若連中とか若い衆連中と呼ばれる青年の集りがあり、この若い人たちの間で人氣があったものに力比べがあつて、この力石が使われた。米一俵（六〇キロ）が基準にされた。この力くらべは、昭和一五・六年ころまでは若い者の間で行われていた。

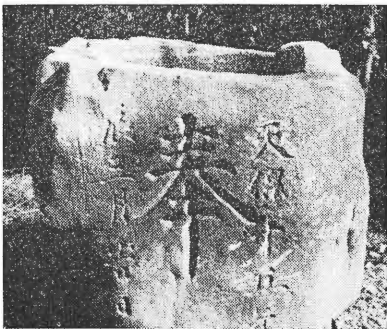
西村大師堂力石。小村集会所跡力石。

九 絵 間

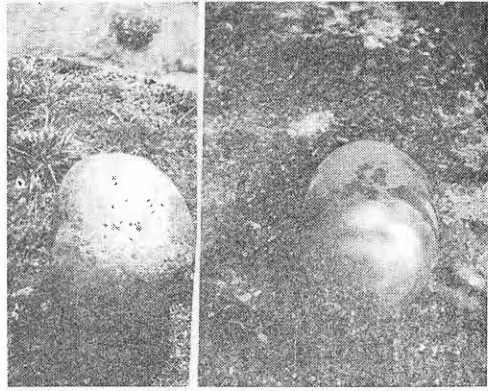
早虎神社をはじめ、各神社等に奉納されている。古味大師堂並びに中久保三仏堂にある絵間は、慶応元年に洞泉が画いたもので、他に比べて新しく保存の



古味大師堂



黒川薬師の手洗鉢



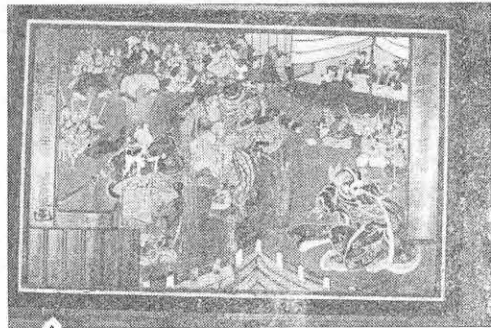
力 石

程度もよい。

その他の絵間はそれぞれ、これよりも古いもので貴重であるが、剥げたり、色あせたものが多く、今後十分な保存が望まれる。

一〇 久主の野取図（中津窪田）

明治九年九月、久主の惣代亀井利平が組頭梅木勝太郎・助勤矢野小平・和田弥蔵により測量が行われ、愛媛県三大区拾式小区周布郡今在家村、塩崎久兵衛によって創られた、久主村の野取図である。



中久保三仏堂の絵間



久主村野取図（八木定實所蔵）

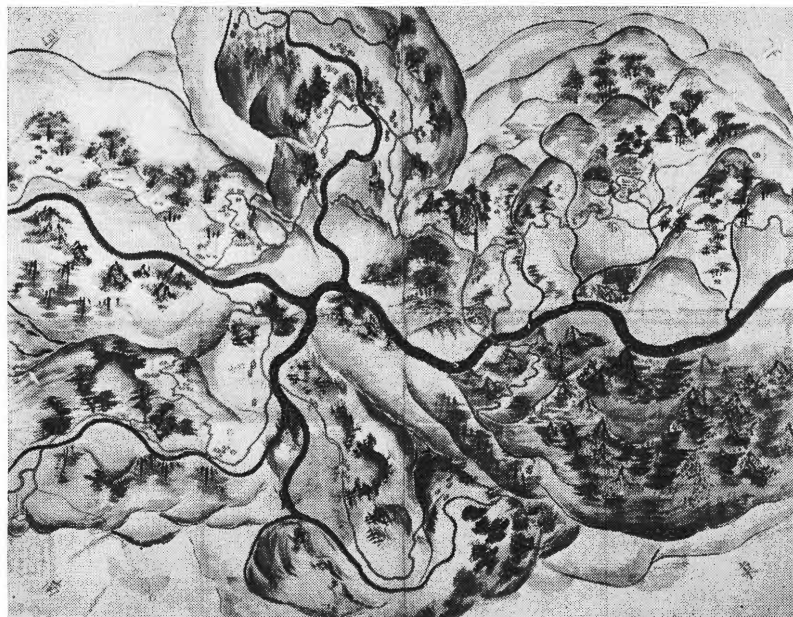
現在は大寂寺住職八木定實が保管している。

一一 旧西谷村絵図

この絵図は、旧西谷村を描いたもので、その四方には、東「土州別枝村境」西には「此奥大州御領真砂屋口」とあり、北は「柳井川村境」と記されており、南には「土州永野村口」「土州越知面村境」などとなつて、それぞれ道がついている。「東土州御領」「西大州御領」「南宇和島御領」「北松山御領」なども書かれている。

彩色された絵図には、黒川とその支流が大きく描かれ、また深山を想像される山々、道はほとんど川沿いに寄りつくことなく、離れて山の上部を走っている。

部落は郷角から猪伏まで、その中には、地藏堂・大師堂・神社・古城など、また民



旧西谷村絵図（柳谷村役場所蔵）

家がそれぞれ描かれていて、特に本谷の庄屋所については、大きく豪華に描かれてあり、庄屋のはなやかなりし時代の絵図と思われる。しかし、この絵図には、残念ながら年号が記されていない。

絵図に描かれている人家の数によって、推定するために描かれているそのまゝを拾ってみた。そうして、「久万山手鑑」(寛保年間(一七四一〜四三))による戸数と比べてみると、総戸数が五五戸少ないのでそれ以前のものであることが推定される。

宝王寺が享保二年(一七一七)の創立とされているが、絵図には宝王寺が描かれているのでそれ以後のものであり、約二五〇〜六〇年前のものとして推定される。

〔絵図〕による人家の数

郷角 一軒(郷角組 一)

本谷 一六軒(本村組 一三 湯ノ成ル 三)

小村 一八軒(小村組 八 飛穴 四 大たいら 二 木地挽屋(熊谷) 四)

名荷 三四軒(くくり松 二 名荷組(中上) 四 寺野 三 上名荷 三)

いよじ 七 本村 五 舟戸 七 奥木地 二 川成 一)

古味 二軒(瀧壁、七 古味組 九 上古味 三 漆谷 二)

中畑 三軒(中畑 三)

菅行 七軒(菅行 七)

中窪 一五軒(中窪 一〇 川成 五)

横野 五軒(横野 五)

高野 八軒(高野 五 川口 三)

〔久万山手鑑〕の人家数

三〇軒(本村)

二四軒

五三軒

二四軒

七軒

九軒

一四軒

一〇軒

一八軒

猪伏 四軒(猪伏 四)

八軒

合計一四二軒

一九七軒

一二 古文書(本谷 立野友義寄贈)

(一) 大野真昌公御氏神之由来

館野兵衛大夫江被下置候御奉書並宝物之由来写

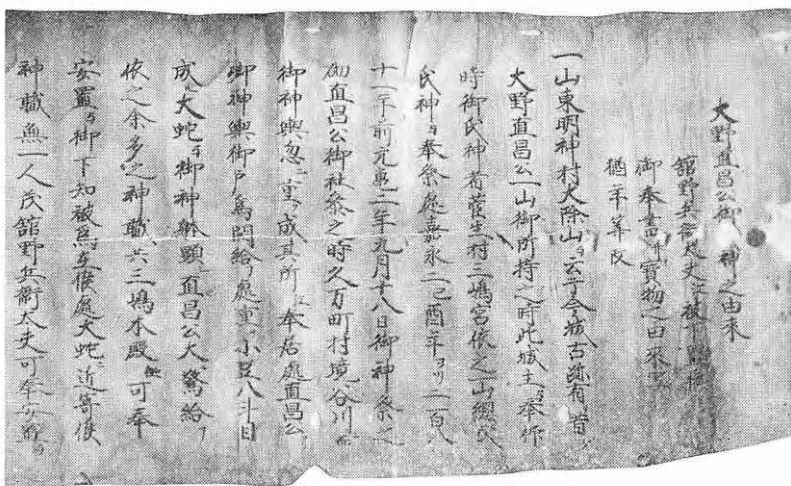
猶年算改

「大野直昌公御氏神之由来」は、西谷村の社人であった、館野家代々の社人名と、五代目館野兵衛大夫ほかについて、久万大除城主大野直昌公から、御墨付の拝領などが記されている。

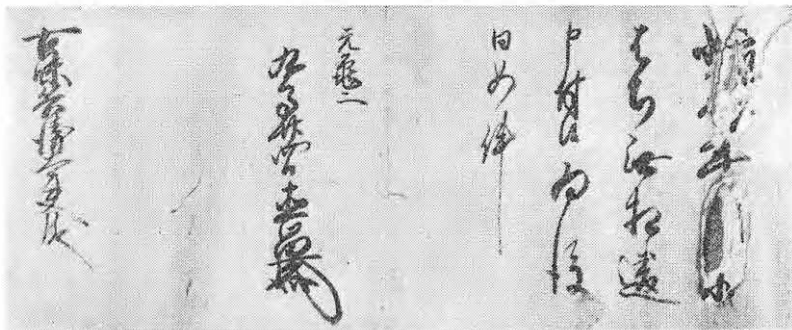
その由来をみると、元龜二年(一五七二)九月一八日、久万山菅生村三嶋宮の御神祭で、御神輿が、久万町村境の谷川にさしかかったところ、御神輿がたちまち重くなり、参拜のためそこに居た、城主大野直昌公が、御神輿の戸を開けられたところ、小豆八斗目成る大蛇が、御神体より現われ、直昌公は大変驚いて、早く御神体を三嶋本殿へ安置奉るよう、多くの神職どもに下知したという。

しかし恐れをなし、大蛇に近寄ろうとする神職は一人もなかった。その時、館野兵衛大夫が進み出て、直昌公の御下知を仰いだ。兵衛大夫は、御神体の大蛇に近づき奉祓して、狩衣に御神体をおおい、無事三嶋宮へ移し奉ったという。

直昌公は大変歎ばれて、その賞として、御墨附と、備前長船住長光作太刀一腰並に馬具を拝領し、館野家の宝物にしたと記されてある。



大野直昌公御氏神之由来



大野直昌公御墨附（兵衛大夫へ）

御墨附は、元亀二年（一五七二）九月二四日、兵衛大夫に賜わったもの、天正五年（一五七七）八月一日、七代新三郎大夫、天正一五年（一五八七）三月一七日、八代佐衛門大夫が拝領したものである。

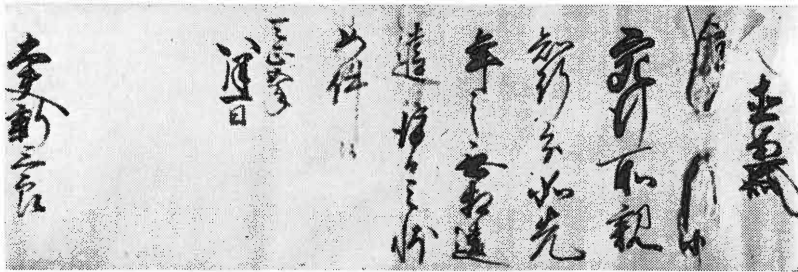
一三 天然記念物

(一) 中久保三仏堂の森

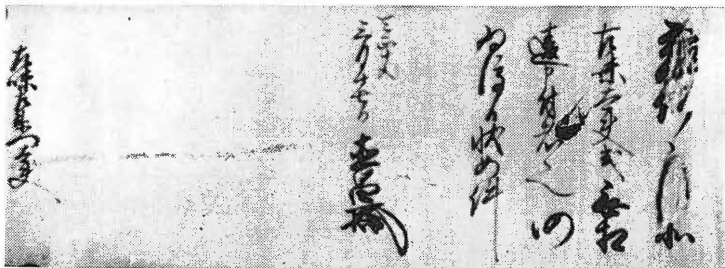
所在地 柳谷村大字西谷中久保

所有者 中久保組

根回り五・一メートル、目通り四・九メートルのトチノキのほか、桐、ハリギリ、モミジ、カエデ、杉、ヒノキなど、四一本の巨樹が三仏堂を囲んでいる。民有林としての、自然植生のへんりんがうかがえる貴重な存在であり、学術的にも現状の保存が望まれる。いずれも樹勢は旺盛である。



大野直昌公御墨附（新三郎大夫へ）



大野直昌公御墨附（左衛門大夫へ）

(二) 川前の大杉

所在地 柳谷村大字柳井川川前

所有者 銚石武一郎

根回り 五・二メートル

目通り 四・九メートル

樹高 三六メートル

樹齢 六〇〇年(推定)

一本杉の愛称で呼ばれ、あたりに偉風を誇っている。樹勢は旺盛である。

(三) 名荷村上の大杉

所在地 柳谷村大字西谷名荷

所有者 村上貞子

根回り 四・四メートル

目通り 四・〇メートル

樹高 二三メートル

樹齢 五〇〇年(推定)

樹勢は旺盛で葉が小さく美しい杉である。



川前の大杉



中久保三仏堂の森

(四) 猪伏のシキビ

所在地 柳谷村大字西谷猪伏

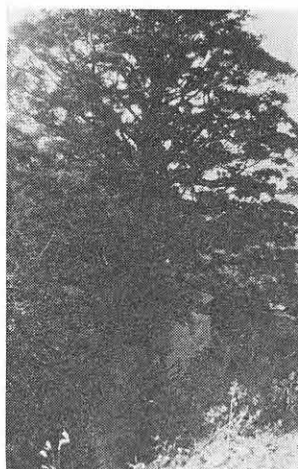
根回り 一・九メートル

目通り 一・四メートル

樹高 一五メートル

樹齢 三〇〇年(推定)

樹齢は旺盛であり、シキビとしては大きいものである(写真は六章 伝説に掲載)。



名荷村上の大杉